

富山県婦中町

鍛冶町遺跡発掘調査報告

2003年3月

婦中町教育委員会



卷首图版1 C地区出土遗物



卷首图版 2 各地区出土中近世遗物



卷首図版 3 1. 各地区出土ヘラ書きスタンプ文土器 2. 各地区出土砥石・古銭 3. E区出土石剣

序

婦中町は富山県のほぼ中央に位置し、西部は呉羽丘陵が連なり、そこから東に立山連峰を仰ぎ見ることが出来ます。東部は神通川・井田川に育まれた水田地帯が広がる綠豊かな地であります。古来から人々にとって大変暮らしやすい場所であったようで、呉羽丘陵を中心、県内でも屈指の埋蔵文化財の宝庫であることが知られています。

本書で報告する鍛冶町遺跡は、平成11年度に発見された遺跡です。この度、一般国道359号道路改築改良工事に先立ち調査致しました。2ヵ年にわたる調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構・遺物をはじめ、奈良・平安時代や、中世の遺構・遺物が見つかり、この地域は、長い間人々が暮らしていくのに利用されつづけてきた、ということわかりました。また、鍛冶町遺跡は、「千坊山遺跡群」を構成する遺跡のひとつです。「千坊山遺跡群」とは千坊山遺跡を中心とする、弥生時代から古墳時代にかけての集落と墓域がセットになっている遺跡群のことで、近年試掘調査が行われ、大きな成果がありました。その文化の独自性、保存状態の良さなど、全国的にみても大変貴重なものです。本遺跡の調査では、そのような当時の生活の一端を窺い知ることのできる資料を得ることができました。

本書はこうした調査の成果をまとめたものであり、今後の調査研究を進める上で参考にして頂きますとともに、埋蔵文化財のご理解に役立てて頂ければ幸いと思います。

終わりに、地元の方々をはじめ、調査に多大なご協力をいただきました関係各位に、深く感謝申し上げます。

平成15年3月

婦中町教育委員会

教育長 宮島信一

例　　言

- 1 本書は、富山県婦負郡婦中町長沢地内に所在する鐵冶町遺跡の埋蔵文化財調査報告である。
- 2 発掘調査は、一般国道359号道路（婦中西バイパス）改築改良工事に先立ち、富山県畜山土木事務所の依頼を受け婦中町教育委員会が実施した。
- 3 調査期間・面積は以下のとおりである。

試掘調査	平成11年9月9日～平成11年9月10日	発掘調査面積	23m ²
試掘調査	平成11年11月16日～平成11年11月20日	発掘調査面積	135m ²
本調査	平成12年5月17日～平成12年12月25日	発掘調査面積	2,650m ²
本調査	平成13年5月21日～平成13年11月30日	発掘調査面積	1,920m ²

- 4 現地調査・遺物整理・報告書作成業務の体制は以下のとおりである。

調査事務局：婦中町教育委員会生涯学習課 平成11年度　　課長 見波重尋、文化振興係長 山田茂信
平成12・13年度　課長 見波重尋、文化係長 矢郷幸子
平成14年度　　課長 野田 洋、文化係長 矢郷幸子

現地調査・整理業務担当者：主任 大野英子、文化財保護主事 堀内大介、主事 細辻嘉門

現地調査・整理業務参加者：守田 駿、河竹明子、大友喜代子、小島あすさ、野原大輔（以上嘱託職員）
生田寿美子、村上千春、土田澄子、東海千春（以上整理作業員）
新宅由紀、富山大学考古学研究室学生（補助員）

- 5 本文の執筆分担はそれぞれの文末に記した。文責は各々にある。
- 6 遺物写真撮影は、撮影場所・器材等を福岡町教育委員会に借り、同教委の栗山雅夫氏のご指導を得た。また現地調査・資料整理にあたっては、次の方々から有益なご教示とご助言を得た。記して深い謝意を表したい。
久々忠義、藤田富士夫、高梨清志、新宅 茜、金三津秀則、金三津道子、町田賢一（敬称略）
- 7 調査にあたって、長沢地区総代をはじめ、地元の方々に多大なご協力を得た。記して厚く感謝申し上げたい。
- 8 出土遺物及び記録資料は婦中町教育委員会で保管している。

凡　　例

- 1 図で使用する方位は真北、水平基準は海拔高である。
- 2 遺構の略号は次のとおりである。
SI：堅穴住居跡、SB：掘立柱建物跡、SA：槽、SD：溝、SK：土坑、SP：柱穴、SX：その他の遺構
- 3 土色、土器胎土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帖 1996年版」による。
- 4 平面図及び写真図版の遺物番号は、出土遺物実測図の番号と一致する。
- 5 遺物観察表は以下のとおりである。
「実測番号」欄は出土遺物実測図の番号と一致する。
「口径遺存」「底径遺存」欄は、残存率を、12分割した同心円で読み取った数値で表示してある。
「胎土」欄は、「密・やや密・やや粗・粗」の4段階で示してある。
「焼成」欄は、「良好・やや良好・やや不良・不良」の4段階で示してある。
- 6 図版中のスクリーントーンが示すものは、特に断りがない限り次のとおりである。
赤彩 黒色処理 須恵器・株洲の断面
- 7 遺物写真図版の縮尺は統一していない。

本文目次

卷首図版

序文

例言・凡例

目次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境.....	1
第2章 調査に至る経緯と経過.....	3
1 調査に至る経緯.....	3
2 調査の経過.....	3
3 遺物整理.....	3
第3章 調査の概要.....	8
1 調査区と座標軸の設定.....	8
2 基本層序.....	8
3 各地区の概要.....	8
A区.....	10
B区.....	18
C区.....	28
D区.....	29
E区.....	38
第4章 まとめ.....	42
1 遺構について.....	42
2 遺物について.....	48
3 婦負における古墳出現期の土器の変遷.....	56
参考文献.....	68
附録 鋼冶町遺跡の自然化学分析	107

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 周辺の遺跡分布図	第10図 A区SI15・SK07・SK60・SK61・SK120・ SD56平・断面図
第2図 試掘調査概要図	第11図 A区SI15・SK60遺物出土状況図
第3図 第1次試掘調査出土遺物	第12図 A区SB125平・断面図
第4図 第1次試掘調査出土遺物	第13図 B区遺構配置図
第5図 第2次試掘調査出土遺物	第14図 B区SI908・SK907・SK909・SK921・SD906 平・断面図, SD725遺物出土状況図・断面図
第6図 基本層序模式図	第15図 B区SI908・SK907・SK909・SD906 遺物出土状況図
第7図 グリッド配置図及び区割図	第16図 B区SI745平・断面図
第8図 A区遺構配置図	
第9図 A区SK12・SK48遺物出土状況図・断面図,	
SK120遺物出土状況図, SK108平・断面図	

第17図	B区SI745遺物出土状況図	第40図	婦負における古墳出現期の土器変遷案（2）
第18図	B区SK728・740・741・SD735・736・737・738 ・739・743・744・746平・断面図	第41図	婦負における古墳出現期の土器変遷案（3）
第19図	B区SD742・SB749・750・751・SA752 平・断面図	第42図	婦負における古墳出現期の土器変遷案（4）
第20図	C区造構配置図	第43図	婦負における古墳出現期の土器変遷案（5）
第21図	C区SI615・SK587・621・SD302 ・SB530・531平・断面図	第44図	婦負における古墳出現期の土器変遷案（6）
第22図	C区SI615・SK816遺物出土状況図	第45図	A区出土遺物
第23図	D区下層造構配置図	第46図	A区出土遺物
第24図	D区上層造構配置図、SX241断面図	第47図	A区出土遺物
第25図	D区SD273・274・275・276・277・303断面図 SI271・272・SA304平・断面図	第48図	A区出土遺物
第26図	D区SA305・306・SB307・308・SK230・SX201 平・断面図、土器集中地点遺物出土状況図	第49図	A区出土遺物
第27図	E区造構配置図	第50図	A区出土遺物
第28図	E区SI431・SK432・SB435平・断面図	第51図	A区出土遺物
第29図	E区SI431・SK432遺物出土状況図	第52図	B区出土遺物
第30図	弥生～古墳時代造構配置図	第53図	B区出土遺物
第31図	古代・中世造構配置図	第54図	B区出土遺物
第32図	弥生土器の器種分類図	第55図	C区出土遺物
第33図	弥生土器の器種分類図	第56図	C区出土遺物
第34図	弥生土器の器種分類図	第57図	C区出土遺物
第35図	古代の器種分類図	第58図	C区出土遺物
第36図	中近世・その他製品の器種分類図	第59図	D区出土遺物
第37図	遺跡別器種構成比率	第60図	D区出土遺物
第38図	甕口縁部形態別構成比率	第61図	D区出土遺物
第39図	婦負における古墳出現期の土器変遷案（1）	第62図	D区出土遺物

目 次

表1	周辺の遺跡一覧	表10	遺物観察表（7）
表2	変遷案と開拓編年の対応の目安	表11	遺物観察表（8）
表3	変遷図基準資料	表12	遺物観察表（9）
表4	遺物観察表（1）	表13	遺物観察表（10）
表5	遺物観察表（2）	表14	遺物観察表（11）
表6	遺物観察表（3）	表15	遺物観察表（12）
表7	遺物観察表（4）	表16	遺物観察表（13）
表8	遺物観察表（5）	表17	遺物観察表（14）
表9	遺物観察表（6）	表18	遺物観察表（15）

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

婦中町は富山県のほぼ中央、神通川の左岸に位置する。北は県庁所在地の富山市と接している。地勢はおおまかには西の丘陵部と東の平野部に二分される。丘陵部は、呉羽丘陵の南に連なり、丘陵裾部は一部が河岸段丘となる。平野部は神通川とその支流の井田川によって形成された扇状地である。

本書で報告する鶴治町遺跡（1）は、富山県婦負郡婦中町長沢地内に所在する、弥生時代後期後半から近世に至る複合遺跡である。井田川支流の山田川左岸の河岸段丘上に位置し、標高約30mを計る。遺跡の現況は、宅地、水田、畑地である。

呉羽丘陵から続く丘陵部は、旧石器時代から中近世に至るまで数多くの遺跡が分布する。特に南端部の山田川沿いの平野から丘陵にかけては弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺跡が密集しており、近年試掘調査が実施され大きな成果があった。これらの遺跡群は、最初に試掘調査が行われた千坊山遺跡（3）にちなみ、「千坊山遺跡群」と呼ばれる。本遺跡も「千坊山遺跡群」を構成する遺跡の一つである。「千坊山遺跡群」には、集落遺跡と、山陰地方との関連が窺える四隅突出型墳丘墓等の墳墓で構成され、集落と墓域がセット関係でとらえることができる。中でも本遺跡西側の丘陵上に位置する四隅突出型墳丘墓の鏡坂墳墓群1・2号墓（2）は、立地上、本遺跡の墓域である可能性が高い。また、県東部最大規模の前方後方墳、王塚古墳（8、国指定史跡）、勅使塚古墳（7、県指定史跡）も含まれ、このことから古墳時代初めには周辺地域勢力の統合が進み、大きな勢力を保有していたと考えられる。

奈良時代には、大宝元年（701年）天武天皇第7皇子一品親王（仮性聖人）の創立とされる北觀音山各願寺が本遺跡の北方約700mの丘陵上にある。各願寺の南方及び東方に各願寺前遺跡（44）が広がっており、過去3次にわたる発掘調査では各願寺に伴うと考えられる遺構・遺物が見つかっている。

中世には、この一帯は富山平野から砺波・飛騨地方に抜ける交通の要衝として戦略上重要視された。射水・婦負二郡の守護代であった神保氏の拠点である富崎城（9）をはじめ、山田川両岸の山中に数多くの山城が築かれた。（細辻）

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	鶴治町遺跡	集落	弥生・古墳・古代・中世	29	小美沢古墳群	古墳	古墳	57	丸山寺遺跡	寺社	中世
2	鏡坂墳群	西周床出型墳丘墓	後半	30	弓高山遺跡	散布地	鏡文	58	牛頭山I遺跡	集落	鏡文・中世・近世
3	千坊山遺跡	集落・鍛冶跡・礎	旧石器・縄文・古墳	31	小美沢Ⅲ遺跡	散布地	鏡文・古代・中世	59	通路Ⅰ遺跡	集落	中世・近世
4	六古丘古墳	輪郭突出型墳丘墓	弥生・古墳・中世	32	二木裏遺跡	散在地・中世墓?	鏡文・中世?	60	外山A遺跡	散在地	不明
5	門谷寺	輪郭突出型墳丘墓	弥生・古墳・中世	33	二木裏Ⅱ遺跡	散在地	鏡文・中世・近世	61	外山B遺跡	散在地	不明
6	山古墳	方形堆土	弥生	34	一本木Ⅲ遺跡	古代地・中世・近世	鏡文	62	外山C遺跡	散布地	鏡文
7	鶴治町後方遺跡	前方後方墳	古墳	35	新原I・II遺跡	散布地	古代	63	新原城西遺跡	散布地	鏡文
8	三重石碑	前方後方墳	古墳	36	玉手古墳北遺跡	散布地	鏡文	64	喜多南野遺跡	集落	鏡文・古代・中世
9	（吉崎山遺跡群）	集落・鍛冶場・土器	縄文・弥生・古墳	37	前田北遺跡	散布地	不明	65	上ノ川I遺跡	集落	弥生・古代・中世・近世
10	鏡坂I・II遺跡	集落・山城	弥生・中世	38	新原Ⅲ遺跡	散布地	古代	66	喜多向山遺跡	散布地	不明
11	喜多向山遺跡	山城	弥生	39	新原人塚遺跡	中世?	67	下野原	山城	中世	
12	喜崎城跡	集落・鉄冶場	弥生・古墳・中世・近世	40	新町Ⅲ遺跡	集落	鏡文・古代・中世・近世	68	赤坂野	山城	中世
13	富崎千石古墳群	前方後方・方・方・円	古墳	41	新町横穴墓	横穴	古墳?	69	喜田山晩	山城	中世
14	南原I・II遺跡	集落	弥生・古墳・古代・中世・近世	42	喜々城跡	城館	中世	70	平川片原遺跡	散布地	不明
15	安田城遺跡	平城	中世・近世	43	下色遺跡	散布地	鏡文・古代・中世	71	ゴダイ塚	その他	中世
16	文光天守遺跡	集落	鏡文・古墳	44	各願寺中世遺跡	集落	鏡文・古代・中世	72	丁原遺跡	散布地	不明
17	移舟古墳群	古墳	鏡文・古代・古墳	45	下条東遺跡	集落	古墳・古代	73	御前野	山城	中世
18	文光寺遺跡	集落・城壁	鏡文・古代・中世・近世	46	古奥美佐瀬南前遺跡	散布地	鏡文・推定?	74	南原II遺跡	集落	中世
19	対岸I・II遺跡	散布地	不明	47	五三塚古墳群	円墳	古墳	75	小倉中野I遺跡	集落	中世
20	通路Ⅳ・V遺跡	散布地	不明	48	曾我城跡	城館	中世	76	小倉中程遺跡	集落	古代・中世・近世
21	通路Ⅵ・VII遺跡	散布地	鏡文	49	喜志北遺跡	山城	中世	77	千葉正遺跡	集落	古代・中世・近世
22	通路Ⅷ・IX遺跡	散布地	鏡文・古墳	50	戸坂城跡	山城	中世	78	千葉II遺跡	散布地・集落?	古代・中世・近世
23	新原I・II遺跡	集落・散布地	旧石器・古墳	51	金糞山遺跡	山城	その他の中世	79	千葉III遺跡	散布地	古代・中世・近世
24	通路Ⅹ・XI遺跡	散布地	鏡文	52	妙子田I・II遺跡	集落	古墳・古代・中世	80	千葉C遺跡	集落・散布地	弥生・古墳
25	大隈日道跡	散布地	不明	53	伊豆那田	散布地	古代	81	千葉F遺跡	散布地	古代
26	小堀野北城	城壁?	不明	54	鏡坂II遺跡	散布地	中世	82	大船城跡	城跡	中世
27	小堀野I・II遺跡	集落	山古・中世(遺跡)	55	鏡坂III遺跡	集落	鏡文	83	御ヶ馬場城跡	山城	中世
28	平原遺跡	散布地	鏡文	56	御坂I・II遺跡	集落	鏡文・古代	84	山田南晩	山城	中世

表1 周辺の遺跡一覧



第1図 周辺の遺跡分布図(1/30000)

第2章 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

鍋中町教育委員会（以下、町教委）は町内の遺跡を把握するため、平成11年4月8日～同年4月15日にかけて長沢を含む古里地区と朝日地区で分布調査を行った。その結果、現在の鍛冶町遺跡付近で、縄文土器・須恵器・古代土師器・珠洲・中世土師器・越前・瀬戸・瓦質土器・近世陶磁器・土師質土器・土製品が採取された。「鍛冶町（かんじやまち）」という字名が残っていること、近隣には数多くの遺跡・戦国時代の山城跡が存在することを考慮し、町教委では、新規に古代・中世・近世の遺跡として鍛冶町遺跡を設定した。

その後、2次にわたって試掘調査を行った。第1次試掘調査は、富山土木事務所より近くを流れる辺呂川河川改修工事に伴い、バスが迂回するためのロータリーを造成する必要が生じた。そこで、国道予定地である田が対象となり、平成11年9月9日から同年9月10日にかけて行った。幅1.3mの試掘トレンチを1箇所設定した。調査面積は23m²である。結果、弥生時代終末期から古代・中世にかけてのさまざまな遺構（竪穴住居跡・柱穴・溝・土坑等）を検出した。遺物は弥生時代終末期の土器を中心に点数にして1,000点以上の遺物が出土した。そこで、町教委では遺跡の時代を弥生時代から近世までの複合遺跡として変更した。

第2次試掘調査は、富山土木事務所より一般国道359号道路（姫中西バイパス）改築改良事業をうけ、本遺跡内を通過する部分を対象に、平成11年11月16日から同年11月20日にかけて行った。幅1.0mの試掘トレンチを8箇所設定した。調査面積は135m²である。結果、再び弥生時代終末期から古代・中世にかけての遺構・遺物を検出した。遺物は弥生時代終末期の土器を中心に点数にして約1,000点以上の遺物が出土した。（第2図）

2 調査の経過

試掘調査後、富山土木事務所との協議により、本調査を平成12年度より2ヵ年、報告書作成に1ヵ年とする事業計画が作成された。平成12年3月より、まず平成12年度の調査区であるA区、D区の重機による表土剥ぎと、全調査区の柱設置作業を行った。平成12年度は、平成12年5月17日より、A区から発掘調査作業を開始した。これは事業主体である富山土木事務所より、最優先で調査するよう依頼されたためである。同年12月25日に平成12年度の現地調査A・D区2,650m²を終了した。

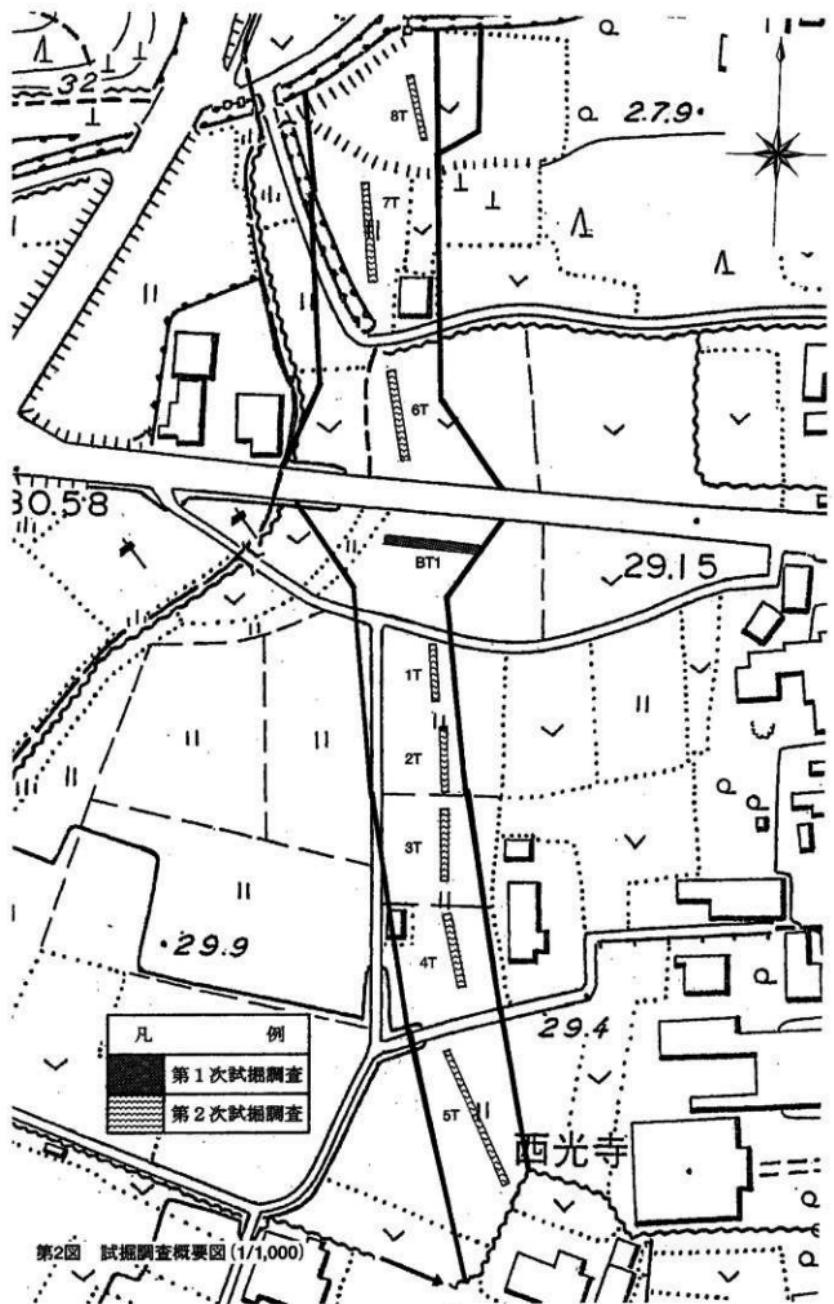
平成13年度は、平成13年5月21日より残りの調査区の重機による表土剥ぎ作業を開始し、同年5月28日より、E区から発掘調査作業を開始した。これは面積が広く、調査を早く完了させるためである。同年11月17日には2年間の発掘調査の成果を踏まえ、現地説明会を行った。悪天候にもかかわらず、地元の方を中心にして約100名の参加があった。同年11月30日に平成13年度の現地調査B・C・E区1,920m²を終了した。

3 遺物整理

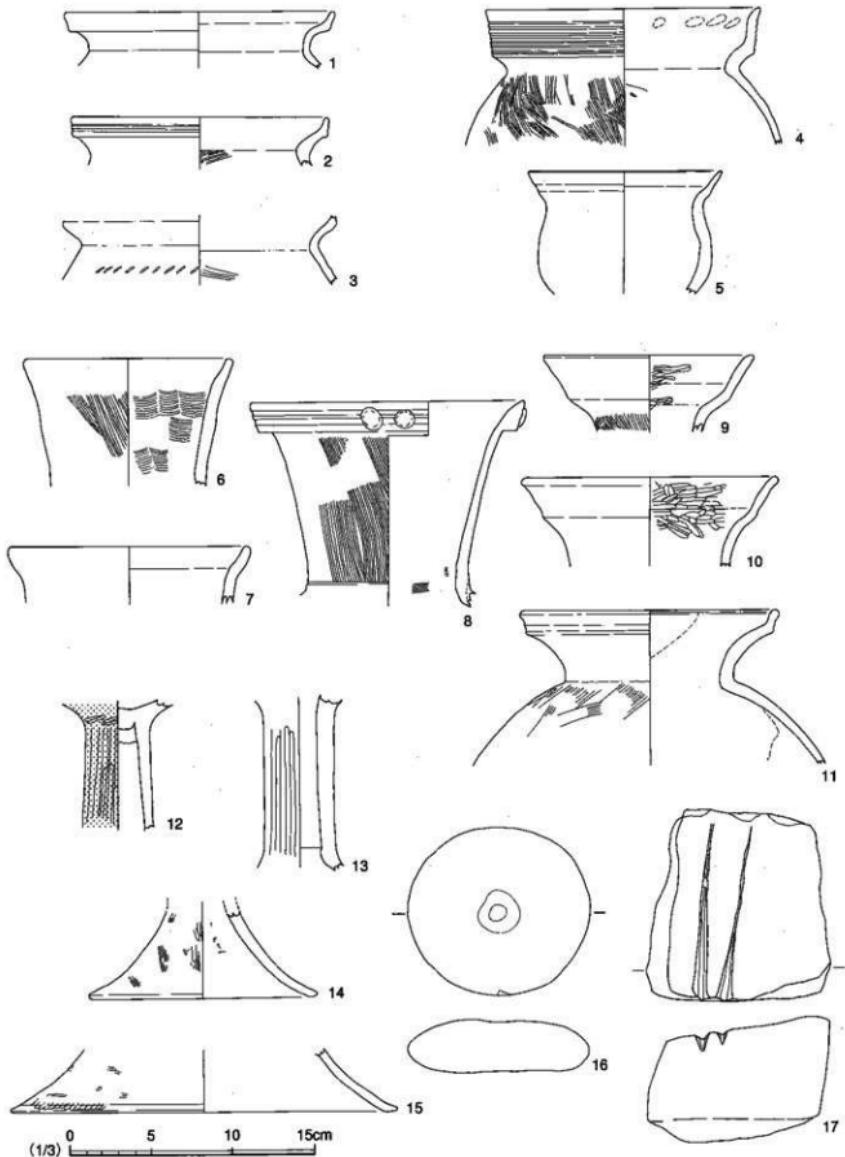
出土した遺物は収容コンテナでおよそ212箱である。できるかぎり現地事務所で随時洗浄を行い、土師質のもろい遺物に関してはバインダー浸透作業も行った。注記も行ったが、大量の遺物に対応するため、平成13年度には、インクジェットマーカーを1台借りて作業を行った。その後現地調査が終了後、遺物の接合・復元作業を行った。遺物の量が非常に多く、完形に復元できるものが多かったため、作業は平成14年7月までかかった。

遺物の実測作業は平成13年度の現地調査終了後富山大学考古学研究室の学生によって行っていたが、作業の進行を鑑み、主に弥生土器に関して、接合作業の完了に合わせ、平成14年7月に鶴中部日本鉱業研究所に委託し、平成14年10月に完了した。

自然科学分析については、パリノサーヴェイ㈱に依頼し、平成13年7月にサンプリングと現地確認を行った。分析報告を平成14年2月に受け、完了した。
(細述)



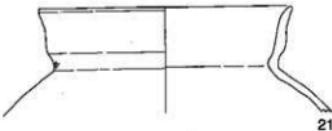
第2回 試掘調査概要図 (1/1,000)



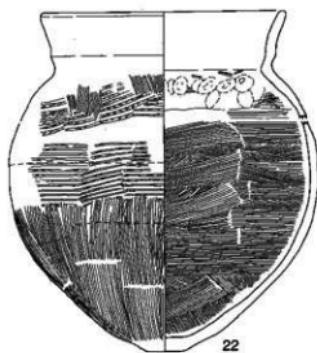
第1図 第1次試掘調査出土遺物(1/3) BT1 SP内:2,6~9,11 BT1 NO.2:4 BT1 NO.6:1,10,15
BT1 NO.8:3,5,12~14 BT1 NO.12(B区 SI745内):17 BT1 包含層:16



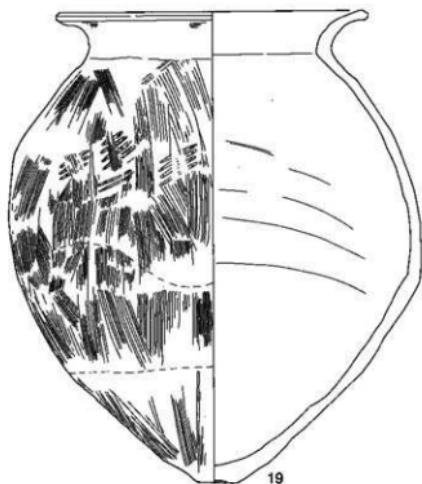
18



21



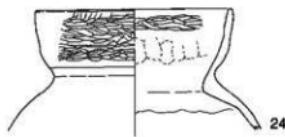
22



19



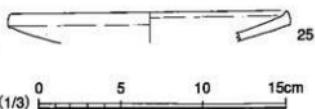
23



24



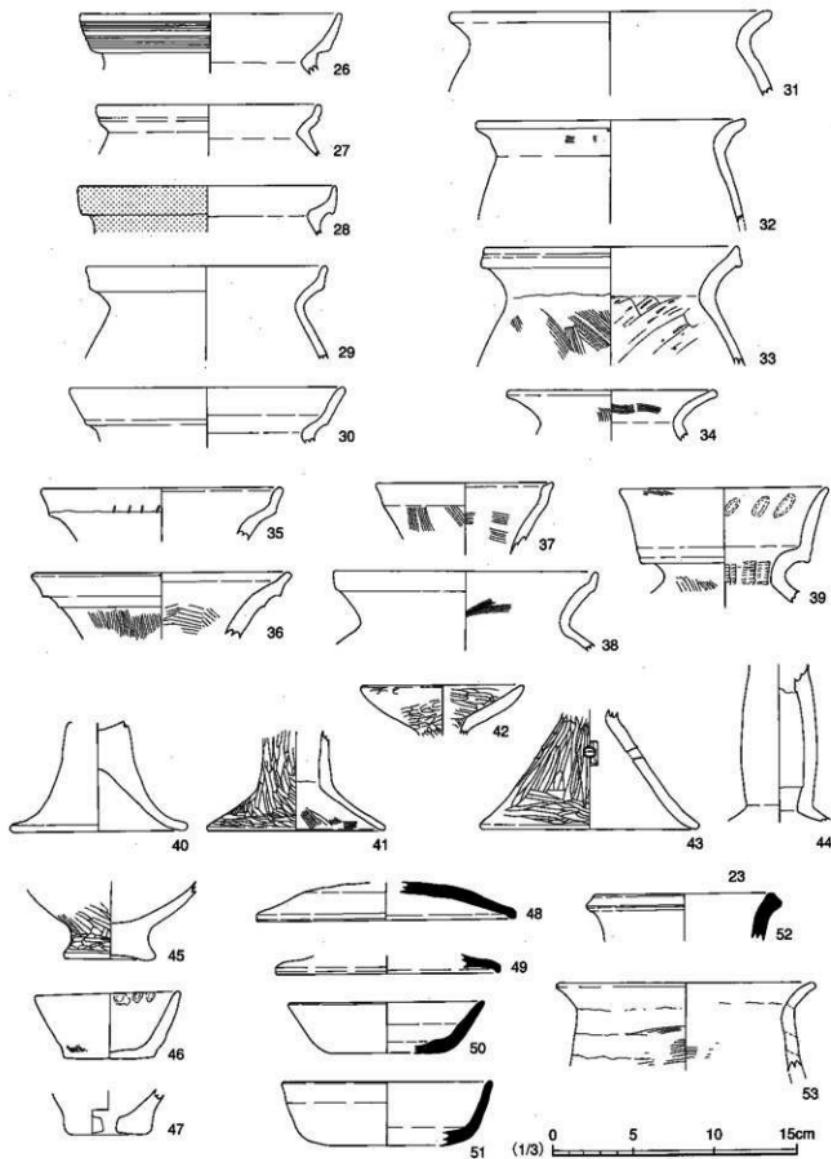
20



25

(1/3) 0 5 10 15cm

第4図 第1次試掘調査出土遺物(1/3) BT1 NO.12(B区 SI745内)



第5図 第2次試掘調査出土遺物(1/3) T1:28~35,37,38,40~46 T2:27,39,49,50,53 T5:26,47,48,51,52 T6:36

第3章 調査の概要

1 調査区と座標軸の設定

調査区割は、2年間の調査期間であること、調査区が南北約200mと長いこと、地形や既存の用・排水の状況、試掘結果などを考慮し、北から順にA・B・C・D・E区の五つの調査区を設定した。そこで、試掘の結果からD区南側からE区北側にかけては、疊層が隆起し耕作土と疊層の間にはほとんど土の堆積は見られない。そのため、調査対象から除外した。また、B区西側に隣接する光円寺への進入道路は、迂回路の確保ができないため、これも調査対象から除外した。

座標軸は国土地理院設定の第VII座標系公共座標のうち、X=71,400、Y=-4,000を0原点として設定した。南北軸をX軸とし、X=0から北方向に進むにつれてX座標の数値が増える。同様に東西軸をY座標とし、Y=0から東方向に進むにつれて、Y座標の数値が増える。1グリッドの区画は2m×2mを1単位とし、調査区の範囲はX=106~203、Y=158~178となる。(第7図)

2 基本層序

調査区が南北に長いため、A~D区と、E区では様相が異なる。(第6図)

A~D区はおよそI層：暗灰黄色土(耕作土)、II層：黄褐色砂質シルト(近世以降堆積層、水田基盤土)、III層：黄灰色シルト(中世以降堆積層)、IV層：暗褐色シルト(中世・古代遺物包含層)、V層：褐色粘質シルト(中世・古代遺構検出面)、VI層：にぶい黄褐色シルトに褐色シルト混じり(弥生～古墳時代遺物包含層)、VII層：にぶい黄褐色砂質土(地山、弥生～古墳時代遺構検出面)、VIII層：オリーブ褐色粗砂と礫(地山基盤層)となる。

E区は1層：暗灰黄色土(耕作土)2a層：灰黄褐色土(近世以降堆積土、水田基盤土)、2b層：オリーブ褐色シルト(中世以降堆積層)、3層：暗褐色砂質土(古代遺物包含層)、

4層：黄褐色粘質シルト～砂質シルト(地山、古代遺構検出面)、5層：褐色粗砂と礫(地山基盤層)となる。なお、調査区全般にわたって、地山は北から南に向かって低くなっている。

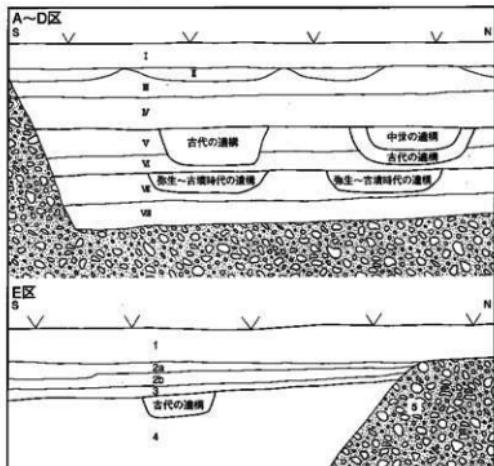
全体的に中世の遺構は後世に削平されており、一部の深い遺構を除いて遺存状況は良くない。

D区のほぼ中央を南西から北東にかけて旧河川と思われる落ち込みが見られる。E区北側の疊層はD区の南端に向かって隆起してきており、耕作土以外に堆積は見られない。

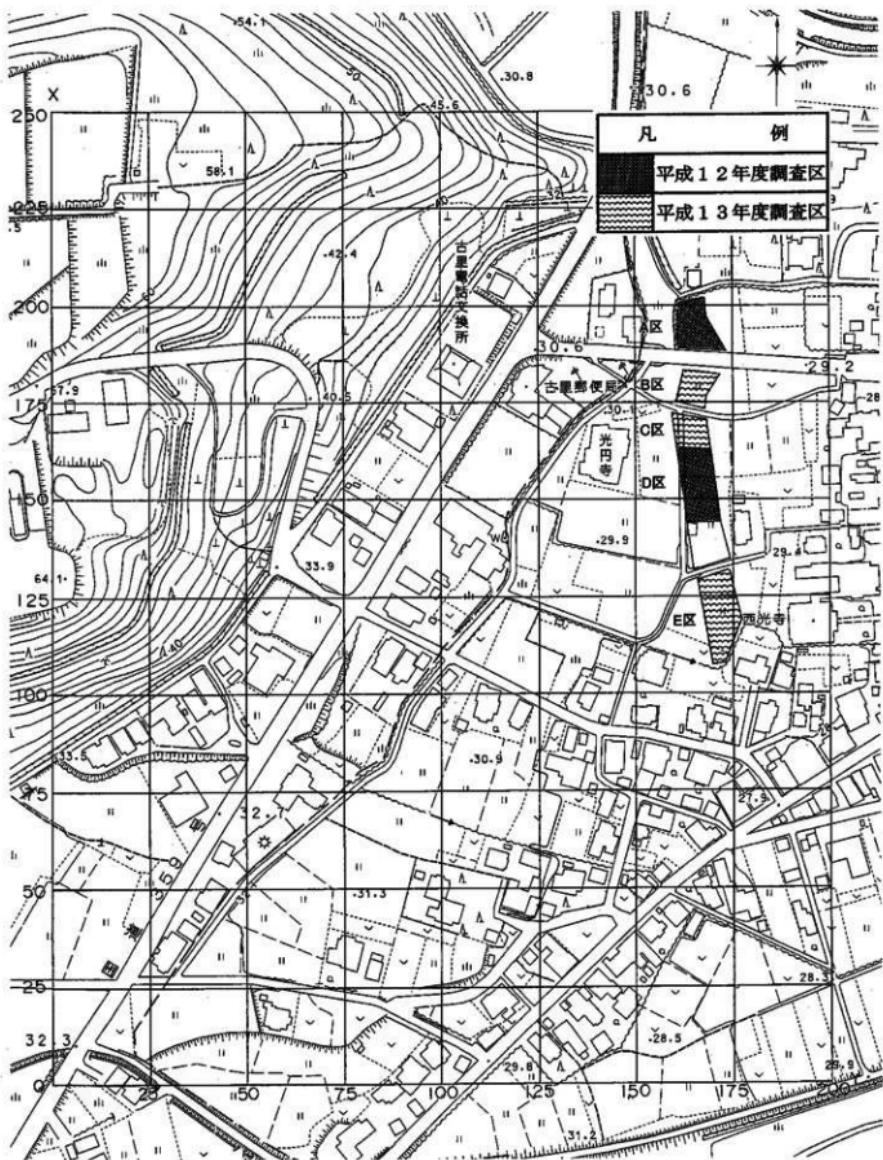
(細辻)

3 各地区の概要

調査年度が2カ年にわたっているため、以下、各地区ごとに調査の概要を記載する。おおむね弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけての遺構、古代の遺構、中・近世の遺構、と時代の古い順に記載した。遺物についてはここでは詳しくは触れず、器種細分などは第4章でふれることにしたい。



第6図 基本層序模式図



第7図 グリッド配置図及び区割図(1/2,500)

A区

弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の遺構

SI15（第10・11図） X191～195Y164～168付近に位置する。規模及び形態は、平面形が一辺約6mの隅丸方形で、床面積は31.8m²を測る。深さは約40cmを測る。床面はほぼ水平である。貼床、硬化面、周壁溝は検出されなかった。住居の軸方向はN-45°-Wである。遺構のほぼ中央で、炉跡を検出した。炭化物と焼土が詰まった地床炉である。他に土器の詰まつビットを2箇所検出した。P1は炉跡の東より1.4mに位置する。長軸82cm、短軸72cmを測る。P2は、炉跡より南西側1.3mに位置し、長軸86cm、短軸68cmを測る。SI15の埋土は黒褐色シルトと暗オリーブ褐色シルトの混じりである。遺物は床面全体で大半が出土した。ほぼ原位置を保っていると思われ、完形に復元できるものが多くあった。器種には壺・長頸壺・無頸壺・高环・器台受部・器台脚部等があり月影I式に比定される。周辺遺構との切り合い関係はSK60を切り、SK61・SX01・SD42に切られている。

SK108（第9図） X189～191Y166～170付近に位置する。規模及び形態は、南側が調査区域外であるため不明である。平面形は不定形で、検出した規模は、長軸6m以上、短軸2.5～3m、深さは10cm～18cmを測る。主軸の方向は不明である。埋土は、オリーブ褐色土と褐色土の混じりである。土器の出土量、平面形の不定形から自然地形の窪みを利用した土器廃棄場と思われる。遺物は壺・壺・高环坏部・高环脚部・蓋等があり月影I式に比定される。出土遺物を観察すると、長頸壺の口縁部分や高环の坏部・脚部の割合が高く、土器廃棄の際に、特定の部分を決めて廃棄する風習・祭祀が存在した可能性もある。赤彩品はわずかしか出土していない。

SK12（第9図） X193～195Y162～164付近に位置する。規模及び形態は、平面形はやや歪な梢円形を呈し、長軸194cm、短軸100～115cmを測る。深さは25cmを測る。長軸の方向はN-10°-Eである。埋土は暗灰黄～黒褐色シルトである。遺物は中央底部付近に集中しており、器種としては壺があり月影I式に比定される。

SK48（第9図） X192～193Y161～162付近に位置する。規模及び形態は、西側が調査区の端で切られているが、平面形は直径1mの円形または梢円形と思われる。深さは9cmを測る。埋土はオリーブ褐色～暗オリーブ褐色シルト、遺物は壺・壺等があり、古府クルビ式に比定される。

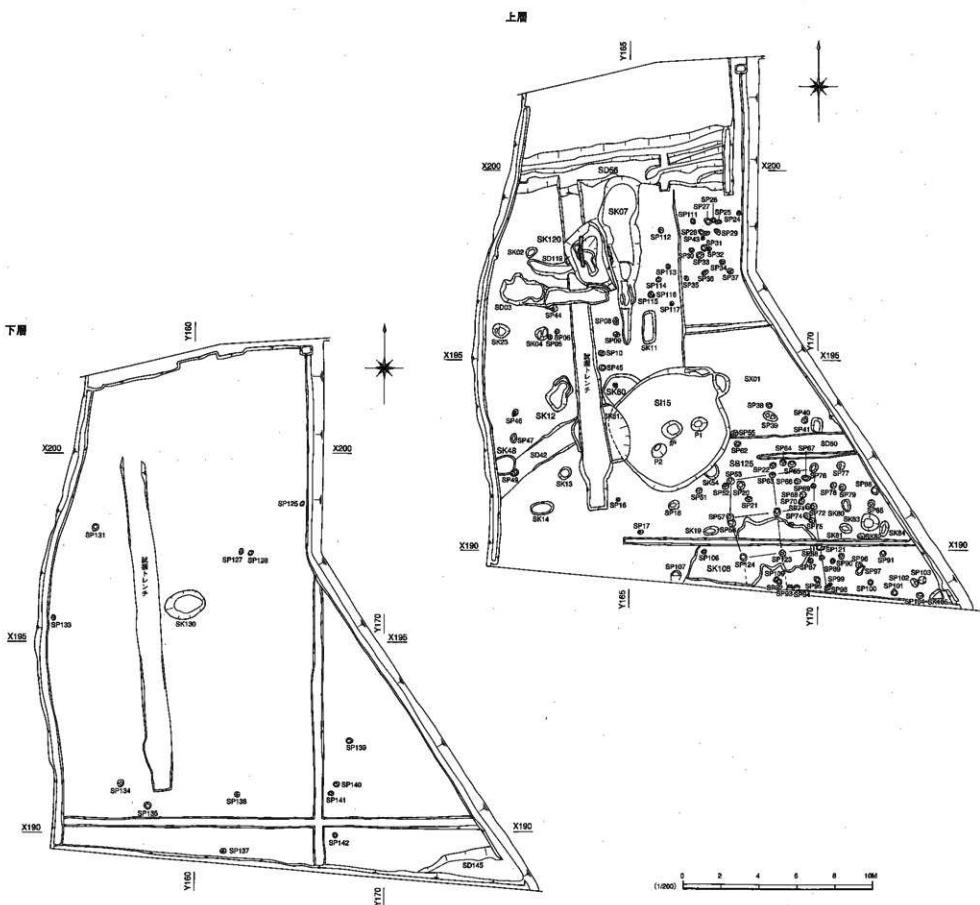
SK120（第9・10図） X196～199Y163～165付近に位置する。規模及び形態は、SD03・SK07に切られているが、平面形は隅丸方形ないし長方形と思われ、長軸3.8m、短軸2.1m以上を測る。深さは25cm～50cmである。底面に長軸1.9m、短軸0.5m～1.4m、深さ40cmの掘り込みが見られる。埋土は上からオリーブ褐色土と暗灰黄色土の混ざり、黒褐色土とオリーブ褐色土の混ざり、褐色土と暗オリーブ褐色土の混ざりである。遺物は、壺・壺・高环等があり月影I式に比定される。底面の掘り込みからはほとんど確認出来なかった。

中・近世の遺構

SD56（第10図） X199～202に位置し、調査区を東から西へ横断している。断面形は緩やかなU字形を呈する。埋土は、堆積から判断して、2回は掘り直しをしていると思われる。南側の旧溝は幅1.5m、深さ50cmである。北側の新溝は西へいくほど深くなっている。幅1.7～1.9m、深さ25～50cmである。遺物には珠洲がある。遺物から14世紀前半～15世紀前半に比定される。

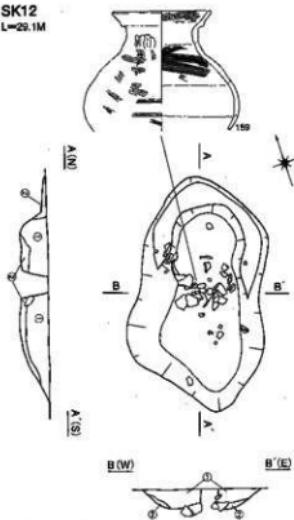
SB125（第12図） X189～193Y167～171に位置する2間×3間以上の掘立柱建物で、調査区南側に広がると考えられる。間尺はSP53～SP76間2.25m+2.2m、SP57～SP72間2.5m+1.95m、SP124～SP121間2.05m+2m、SP53～SP124間2m+2.2m、SP63～SP123間1.95m+2.2m、SP76～SP98間2.05m+2.15m+2.15mである。柱穴規模は直径28cm～48cm、深さ14cm～30cm、平均は直径36cm、深さ23cmである。建物の主軸方向はN-7°-Wである。遺物はSP123から中世土師器があり、13世紀後半～14世紀前半に比定される。他は実測に耐えるものがなかった。

SK07（第10図） X195～200・Y164～166付近に位置し、南から北に向けて深くなっている。規模及び形態は、長軸

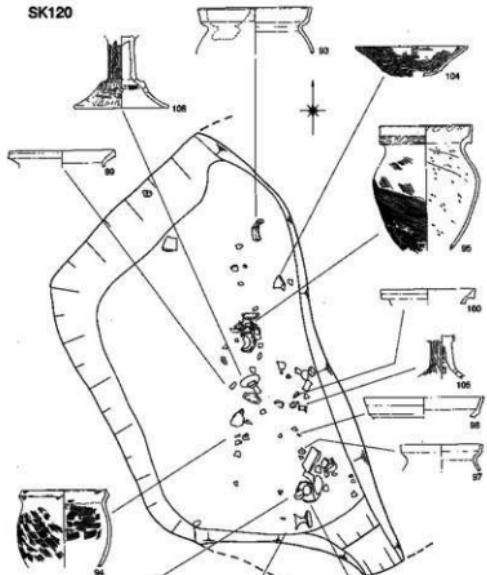


第8図 A区 遺構配置図(1/200)

SK12
L=29.1M

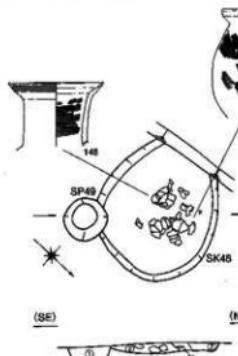


SK120

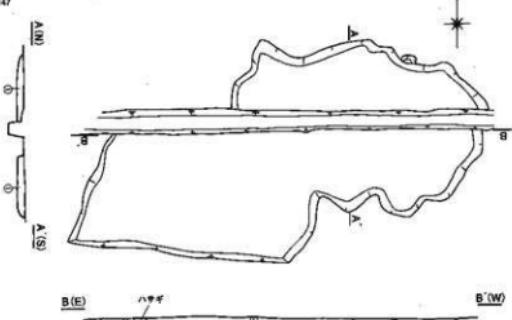


全セクション共通
①2.5Y4/2褐色地～3/2褐色オーリーブ褐色シルト
②2.5Y4/3～4/4オーリーブ褐色砂～③少量

SK48・SP49 L=29.1M



SK108 L=29.1M



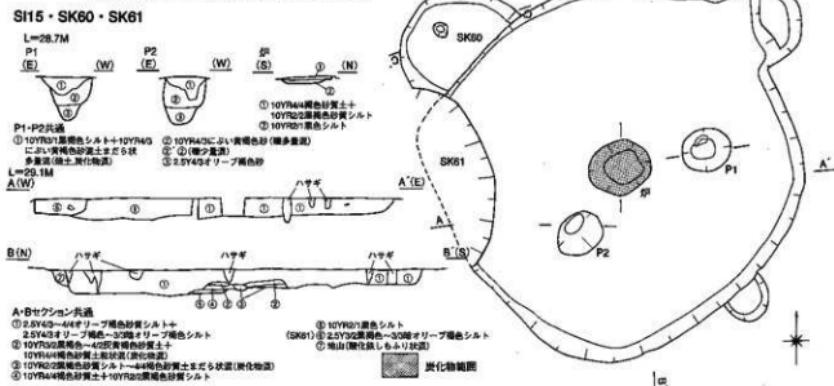
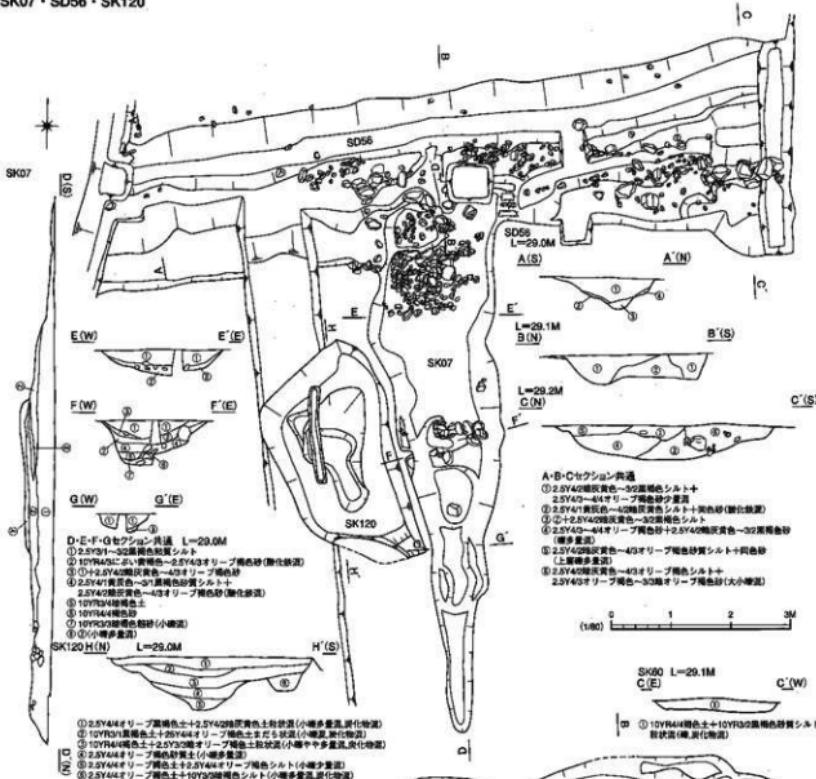
全セクション共通
①2.5Y4/2褐色地～3/2褐色オーリーブ褐色シルト
②2.5Y4/3～4/4オーリーブ褐色地～3/2褐色オーリーブ褐色シルト
③2.5Y4/3～4/4オーリーブ褐色
④2.5Y4/2オーリーブ褐色～3/2褐色オーリーブ褐色シルトブロック状態

全セクション共通
①2.5Y4/3オーリーブ褐色土+10YR4/4褐色土粒状多量層(炭化物層)
②土壁多量に含C

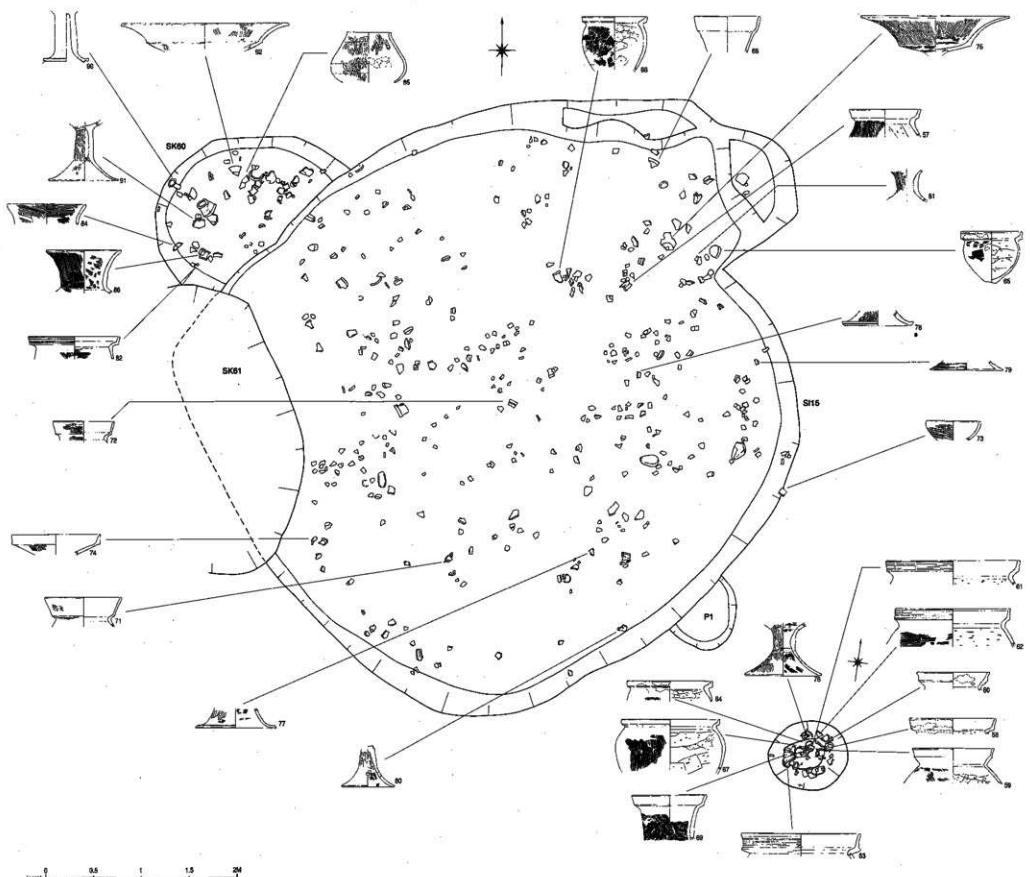
0 0.5 1 1.5M

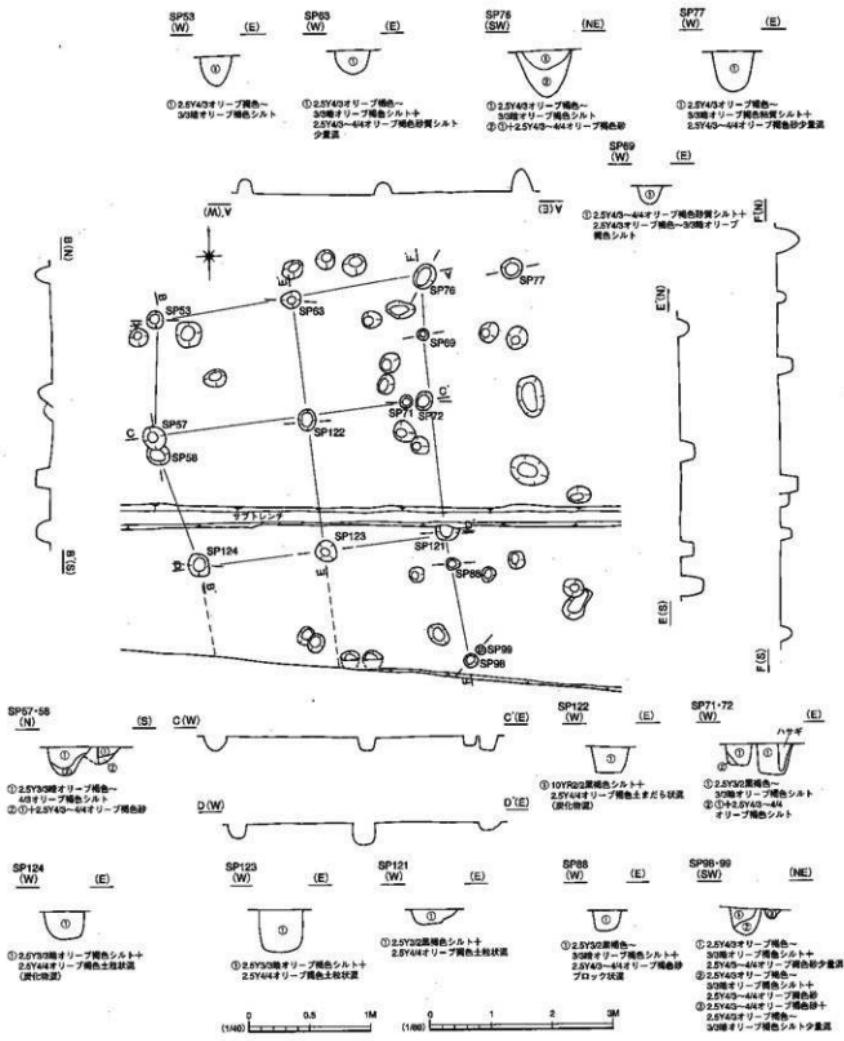
0 1 2 3M

第9図 A区 SK12・SK48・SP49遺物出土状況図及び断面図(1/40),主な遺物の出土位置(1/8)
SK120遺物出土状況図(1/40),主な遺物の出土位置(1/8),SK108平面図及び断面図(1/80)



第10図 A区 SK07-SD56-SK120平面図及び断面図(1/80),SI15-SK60-SK61平面図及び断面図(1/80)





第12図 A区 SB125平面図及びエレベーション(1/80),ピット断面図(1/40)

9.2m、短軸0.6m～2.1mを測る。深さは15cm～75cmである。平面形は不定形である。埋土は上から黒褐色粘質シルト、にぶい黄褐色～オリーブ褐色砂、黄灰色～黒褐色砂質シルトと暗灰黄色～オリーブ褐色砂の混ざりである。遺物は、越中瀬戸・近世陶器があり16世紀末に比定される。他にはSK120を切っており弥生土器がある。

(掘内)

B区

弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の遺構

SI908（第14・15図） X178～181Y168～169に位置する。遺構の規模及び形態は、南東側が調査区域外にあり、なおかつSK907に切られているため不明であるが、検出した規模は2.7m×6.0m、床面積は13.0m²、深さはおよそ25～30cmを測る。平面形は一辺6mの隅丸方形であると考えられる。住居の軸方向は不明である。床面はほぼ水平と考えられるが、硬化面や貼床は検出していない。遺構全体で、周壁溝を検出した。幅40cm、深さは床面からおよそ10cmを測る。炉跡やピットは検出していない。埋土は主に褐色粘質シルト炭化物混である。遺構全体に埋土と床面の間に炭化物の堆積が5cmほど見られる。検出の際は埋土と地山との区別がつきにくく、サブレンチを入れ、炭化物や他の土の混じり具合で区別した。遺物は遺構全体の炭化物層と床面の間から大半が出土した。器種には壺・壺・高杯・小型土器があり、月影II式に比定される。完形に復元できる土器が多く、高杯などの煮炊きをしない遺物を観察すると、焼成時ではなく後から2次的被熱を受けているようである。或いは炭化物層が遺構床面だけに均一に堆積していることから、燃焼によって生成されたものではない可能性もある。

SI745（第16・17図） X178～182Y161～165に位置する。遺構の規模及び形態は、北側をSD746及び第1次試掘調査時のトレンチに切られているが、一辺約8m、床面積は51m²を測る。深さはおよそ25～30cmを測る。住居の軸方向はN-16°～Eである。平面形は隅丸方形と考えられる。床面はほぼ水平であると思われるが、硬化面や貼床などは検出されなかった。遺構の東壁寄りで、炉跡かと思われる集石があったが、断ち割ってみたところ、断面からは明確に炉と判断は出来なかった。周壁溝らしきものは東・南壁全体と西壁途中まで検出した。幅20cm、深さは床面から5cmを測る。ピットは11箇所検出したが、ピット1以外はあまりはっきりとした輪郭ではなく、主柱穴と考えられるものはない。ピット1は遺構のほぼ中央に位置する。長軸43cm、短軸40cm、深さ22cmを測る。ピット2は、遺構中央より南北寄りに位置し、長軸52cm、短軸34cm、深さ12cmを測る。遺構の埋土は、黒褐色粘質土・にぶい黄褐色粘質シルト地山粒混・褐色粘質シルト地山粒混である。遺物は埋土から地山直上まで様々な状態で出土した。器種には壺・壺・台付壺脚部・高杯・器台・鉢・蓋・小型土器があり、白江式に比定される。

SK728（第18図） X179Y166～168に位置する。遺構の規模及び形態は、東側が調査区域外で切られているため不明であるが、検出した規模は、3.0m×3.5m、深さ15cmを測る。平面形は長方形に近いと考えられる。埋土は、暗褐色粘質シルト地山粒混である。はさ木により遺構全体が擾乱を受けていた。遺物は弥生土器があるが、小破片ばかりで、実測出来るものはなかった。

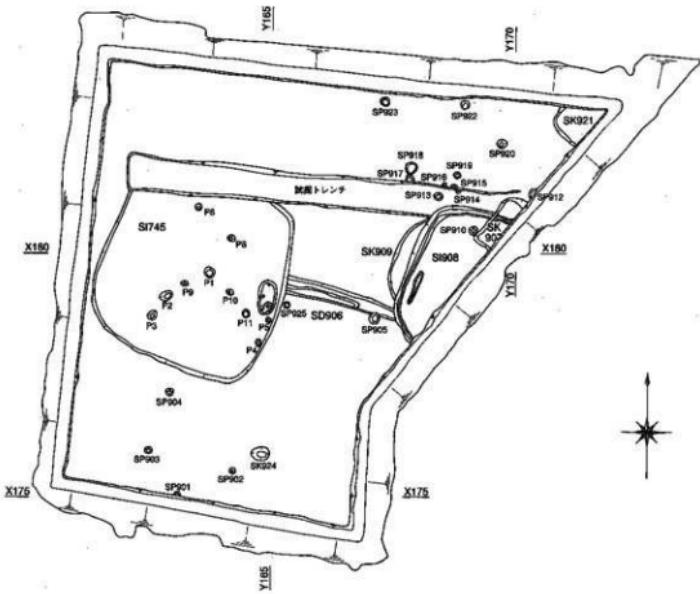
SD725（第14図） X175～176に位置する東西に走る溝。Y161より西側とY165より東側の部分は削平されているためか途切れている。規模は幅0.6m、深さ25cmを測る。断面形は急な角度を持つU字形を呈する。埋土は褐色粘質シルトで地山とほとんど区別がつかなかったが、炭化物や酸化鉄の粒の混ざり具合により遺構のプランを検出した。遺物は壺・小型高杯・器台脚部などがあり、月影II式に比定される。

SD906（第14・15図） X179Y166～168に位置し、SI745とSI908に両端を切られている。遺構の規模及び形態は、幅0.75m、深さ20cmを測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。埋土は、断面を見ると、堆積状況から1度埋まってから振り直されて幅を拡張しているらしい。遺物はほぼ完形の高杯高杯部が1点ある。月影II式に比定される。

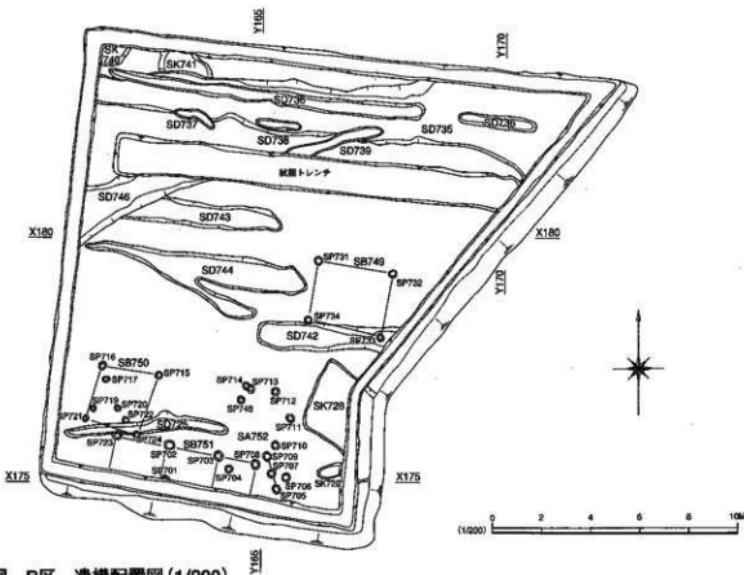
古代の遺構

SD742（第19図） X178Y165～169に位置する。西へいくほど浅くなり、Y165付近で消滅する。遺構の規模及び形

下層

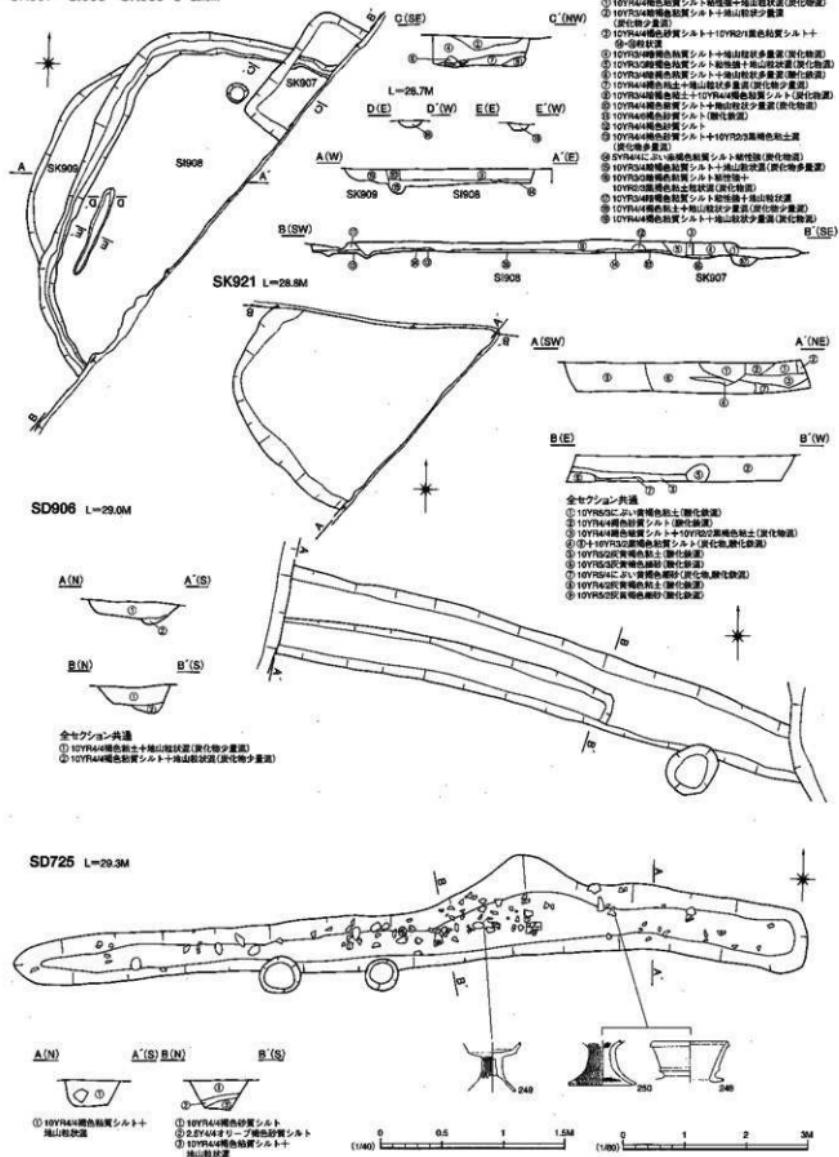


上層

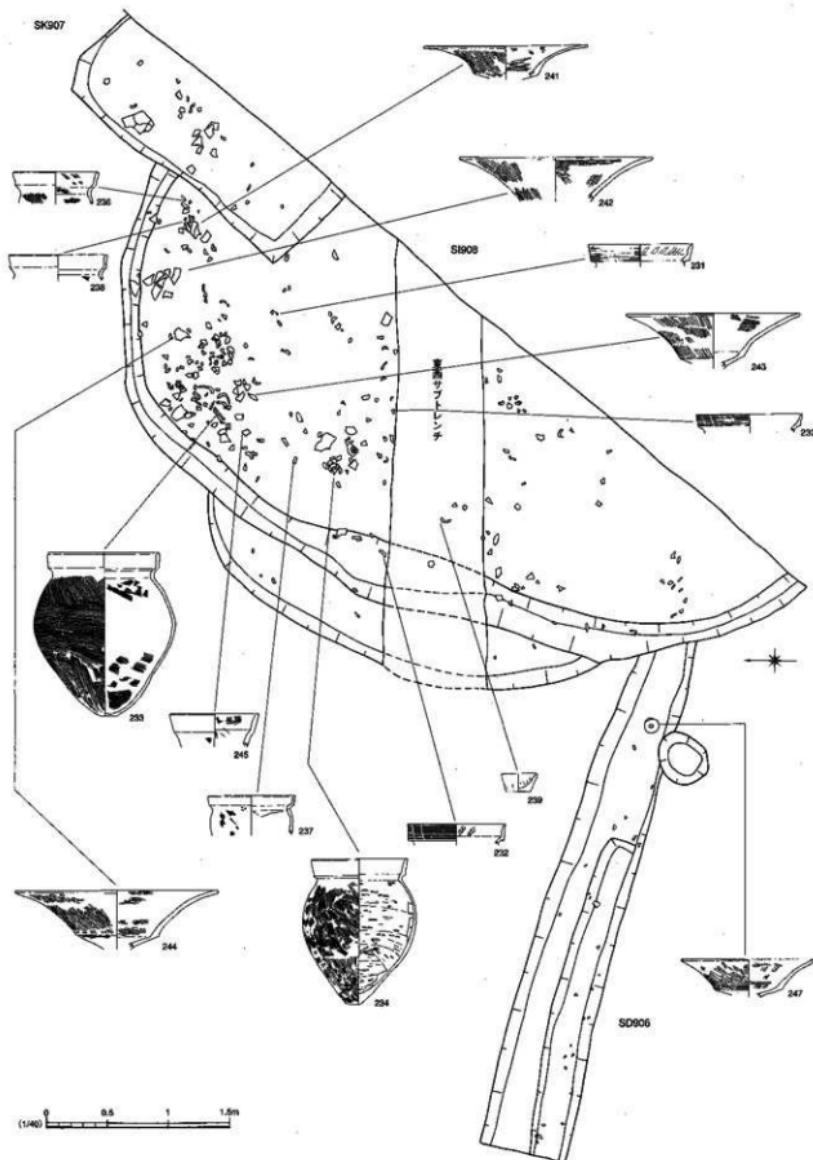


第13図 B区 造構配置図(1/200)

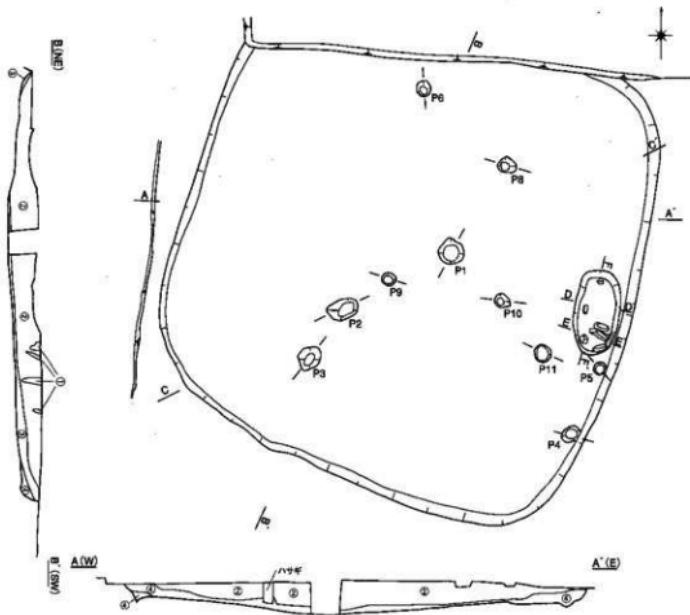
SK907 • SI908 • SK909 L=28.9M



第14図 B区 SK907・SI908・SK909平面図(1/80)及びA・B断面図(1/80),C・D・E断面図(1/40)
 SK921平面図及び断面図(1/40),SD906平面図及び断面図(1/40)
 SD725遺物出土状況図及び断面図(1/40),主な遺物の出土位置(1/8)



第15図 B区 SD906・SK907・SI908・SK909遺物出土状況図(1/40)及び主な遺物の出土位置(1/8)



A-Bセクション共通

- ① 10YR5/4に近い黄褐色粘土質シルト
- ② 10YR4/2褐色粘土質シルト粘性土+じらみりび～粒状
- ③ 10YR4/2Cに近い黄褐色粘土質シルト～地山状状
- ④ 10YR4/4褐色粘土質シルト～地山状状
- ⑤ 黄褐色状

A-B-Cセクション L=29.3M

D-E-Fセクション L=29.0M

C(SW)

C'(NE)

D(W)

D'(E)

E'(E) E(N)

F'(S)

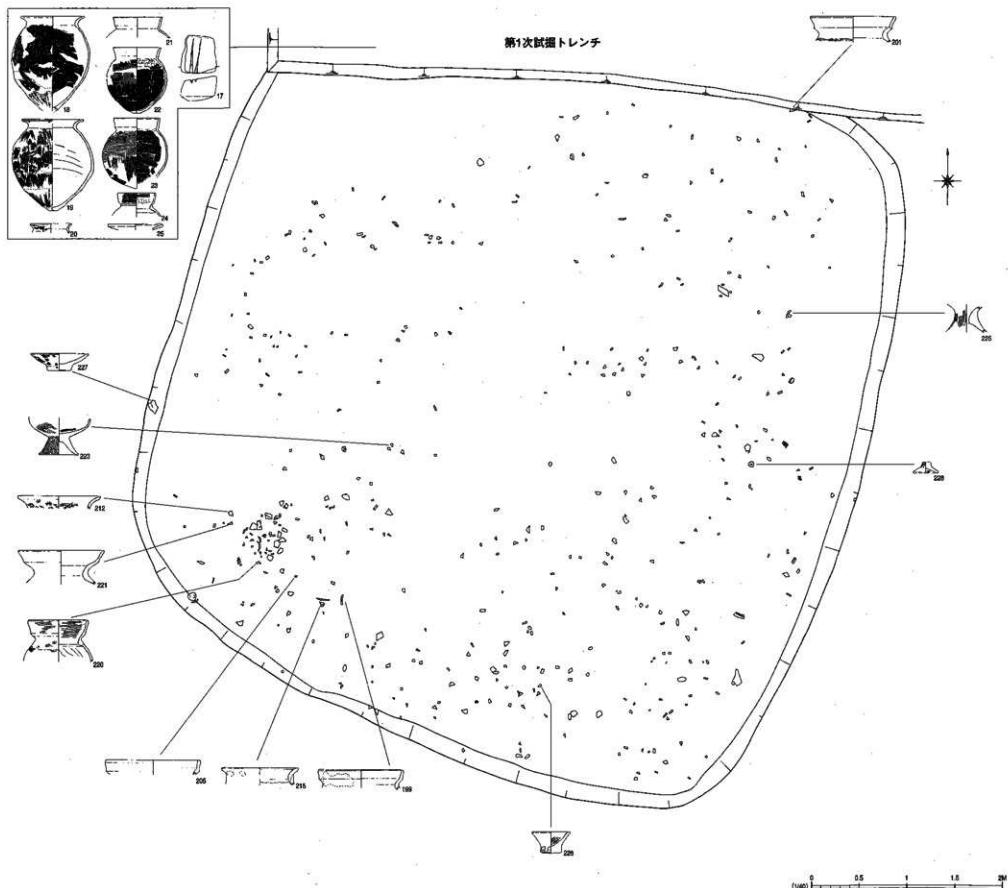
D-E-Fセクション共通

- 全ピット共通
- ① 10YR5/4に近い黄褐色粘土質シルト粘性土+地山状状
 - ② 10YR5/2褐色粘土質シルト粘性土+地山状多量
 - ③ 10YR4/2に近い黄褐色粘土質シルト～地山状状

(1/40)

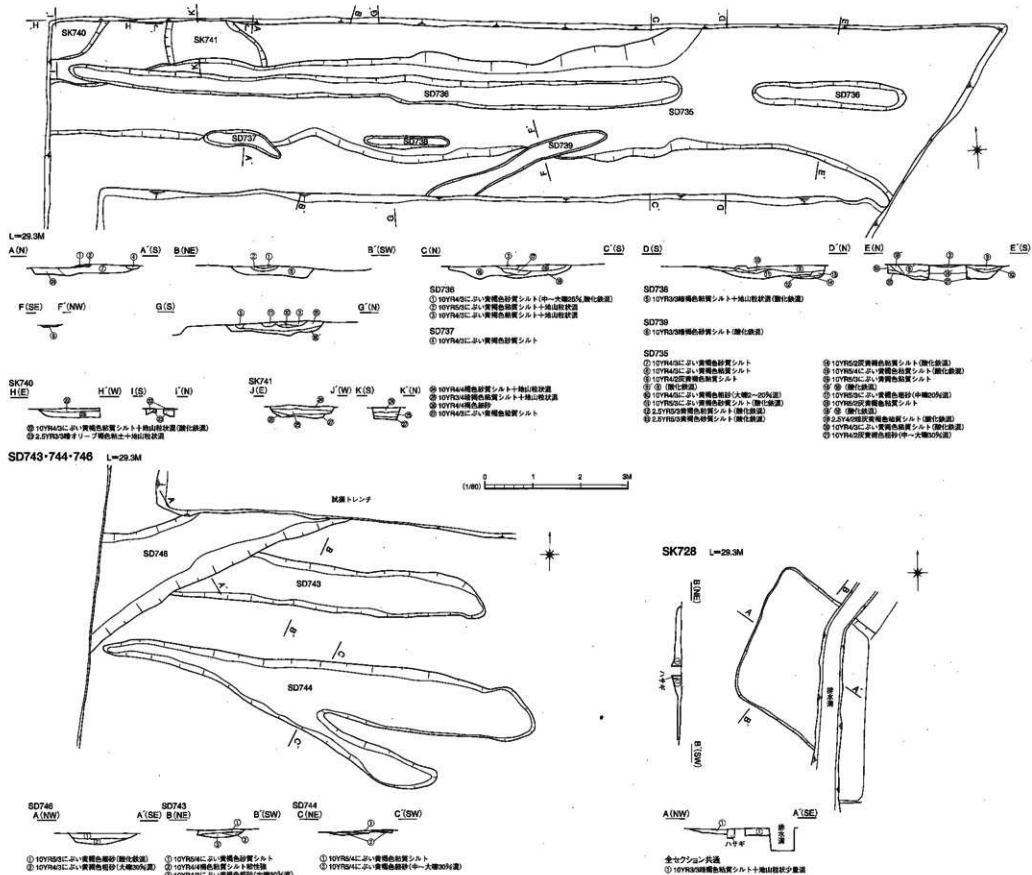
(1/80)

第16図 B区 SI745平面図及びA-B断面図,エベレーション(1/80),D-E-F断面図及びピット断面図(1/40)



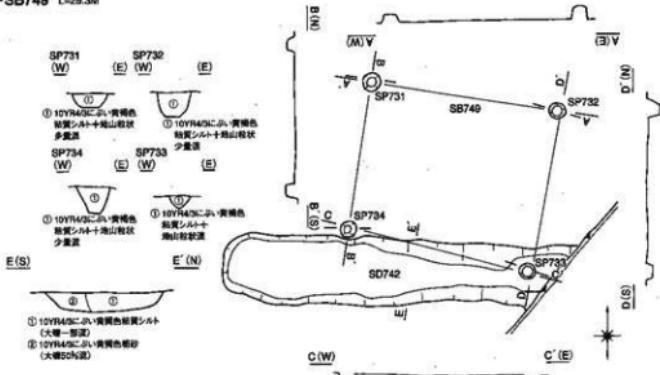
第17図 B区 SI745遺物出土状況図(1/40)及び主な遺物の出土位置(1/8)-第1次試掘の出土遺物(1/12)

SD735-736-737-738-739 SK740-741

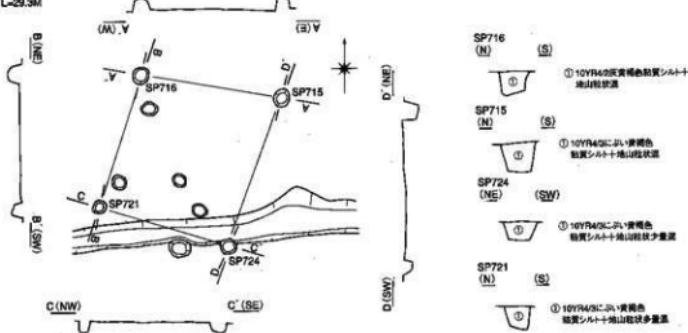


第18図 B区 SD735-736-737-738-739-SK740-741平面図及び断面図(1/80)
SD743-744-746平面図及び断面図(1/80), SK728平面図及び断面図(1/80)

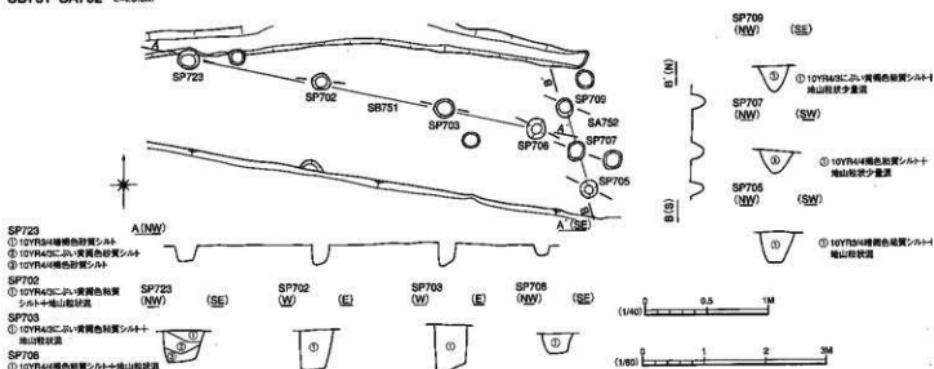
SD742•SB749 L-29.3M



SB750 L-293V



SB751-SA752 L-29.3M



第19図 B区 SD742平面図(1/80)及び断面図(1/40),SB749平面図及びエレベーション(1/80),ピット断面図(1/40),SB751・SA752平面図及びエレベーション(1/80),ピット断面図(1/40)

態は、幅1.1m、深さ16cmを測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。埋土は粗砂に直径1~2cmほどの砂利が混入する。平面形からはSD744とつながりそうであるが、サブトレンチを入れて確認したところ、つながらなかった。遺物は図示したもの以外に須恵器等がある。

SD743（第18図） X180Y161~164に位置する。東へいくほど浅くなり、Y165付近で消滅する。遺構の規模及び形態は、幅0.45m、深さ10cmを測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。埋土は黄褐色の粗砂に直径1~2cmほどの砂利が混入する。遺物は10世紀に比定され、図示したもの以外に須恵器等がある。

SD744（第18図） X179Y161~166に位置し、SI745の上を流れている。Y164付近で2つに分かれる。東へいくほど浅くなり、Y166付近で消滅する。遺構の規模及び形態は、幅1.3m、深さ10cmを測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。埋土は黄褐色の粗砂に直径1~2cmほどの砂利が混入する。遺物は11世紀に比定され、図示したもの以外に土師器・須恵器がある。

中世の遺構

SD735（第18図） X182~183Y162~173に位置し、調査区北端を西から東へ横断している。遺構の規模及び形態は、幅2.7m以上、深さ30cmを測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。東にいくほど幅が広く、深さも深くなっている。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルト～灰黄褐色粗砂である。遺物は須恵器・土師器・中世土師器・珠洲等があり、長期間溝として存在していたと考えられる。

SD736（第18図） SD735の真上、X183付近に位置している。遺構の規模及び形態は、幅60cm、深さ10cmを測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトに酸化鉄が混じる。大部分を後世に削平されたようで、遺構の底部分のみが部分的に遺存していると考えられる。遺物は珠洲があるが実測に耐えるものはなかった。

SB749（第19図） X179Y167に位置する1間×1間の掘立柱建物である。間尺はSP731~SP732間2.8m、SP732~SP733間2.4m、SP733~SP734間2.8m、SP734~SP731間2.2mを測る。柱穴規模は直径20cm~29cm、深さ10cm~22cm、平均は直径26.2cm、深さ13.3cmを測る。建物の主軸方向はN-79°~Wである。SP733が古代の溝SD742を切っている。遺物は実測に耐えるものがなかった。

SB750（第19図） X176Y162に位置する1間×1間の掘立柱建物である。間尺はSP715~SP716間2.1m、SP716~SP721間2.0m、SP721~SP724間2.0m、SP724~SP715間2.3mを測る。柱穴規模は直径22cm~29cm、深さ15cm~25cm、平均は直径26.5cm、深さ19.5cmを測る。建物の主軸方向はN-17°~Eである。遺物は実測に耐えるものがなかった。

SB751（第19図） X175Y162~165に位置する3間×1間以上の掘立柱建物である。調査区の南端で切られているため、柱穴の列としては1列しか検出していないが、柱穴や間尺から見て、掘立柱建物と判断した。間尺はSP723~SP702間1.9m、SP702~SP703間1.8m、SP703~SP708間1.3mを測る。柱穴規模は直径25cm~33cm、深さ17cm~41cm、平均は直径28.5cm、深さ29cmを測る。建物の軸方向はN-77°~Wである。遺物は実測に耐えるものがなかった。

SA752（第19図） X175Y165に位置する。柱穴の大きさから見て、掘立柱建物の可能性もあるが、対応する柱の列が検出されず、柱間も狭いため柵列とした。間尺はSP705~SP707間40cm、SP707~SP709間42cmを測る。柱穴規模は直径24cm~29cm、深さ20cm~25cm、平均は直径27cm、深さ22cmを測る。柵列の軸方向はN-18°~Wである。遺物は実測に耐えるものがなかった。

C区

弥生時代終末～古墳時代前期前半の遺構

SK816（第22図） X171Y167に位置する。遺構の規模及び形態は、試掘トレントにより西端を切られているため不明であるが、検出された規模は2m×1.6m、深さはおよそ35cmを測る。平面形は楕円形であると考えられる。長軸の方向は、N-73°~Eである。埋土は地山の黄褐色土がベースであるが、黒褐色・暗褐色・褐色の土や多量の炭化

物が混ざりあい、粘り気が強く、乾くとねじり錆でなかなか削れないくらい硬く締まる。地山が砂質土であるのに対し、異質である。あるいは被熱を受けている可能性もある。遺物は埴上層から多く出土した。器種には壺口縁部・壺口縁部・高坏脚部・高坏脚部・赤彩小型壺があり、法仏II式に比定される。

古代の遺構

SI615（第21・22図） X166～169Y162～164に位置する。中世の遺構SK621がほぼ中央に掘り込まれており、遺構中央部の詳細は不明である。規模及び形態は、一辺約4.8m、床面積は24.2m²を測る。深さは20～30cmを測る。平面形は方形を呈する。住居の軸方向はN-94°-Eである。床面はほぼ水平と思われる。SK621に切られているためわずかしか残っていないが、中央部に乾くとねじり錆でもほとんど削れない硬く締まった混ざり土の部分があり、貼床と思われる。遺構の東壁北寄りで、炭化物と焼土の堆積した掘り込みを検出した。カマドの支脚が出土しており、天井や袖は失われているものの、カマドの跡と考えられる。近辺からカマドに伴うと思われる長胴甕が出土した。周壁溝・柱穴は検出されなかった。埋土は暗褐色粘質シルトである。遺物はカマド近辺の遺物以外は床面よりやや浮いた状況で出土した。器種には土師器壺・高坏脚部・須恵器坏H・内黒土器碗・砥石があり、7世紀中頃に比定される。

SB530（第21図） X165～166Y164～165に位置する1間×1間の掘立柱建物である。間尺はSP567～SP597間1.9m、SP597～SP548間2.0m、SP548～SP570間2.4m、SP570～SP567間2.0mを測る。柱穴規模は直径29cm～40cm、深さ13cm～35cm、平均は直径34.8cm、深さ23cmを測る。建物の主軸方向はN-10°-Wである。遺物はSP548から須恵器があるが実測に耐えるものがなかった。

SB531（第21図） X168～169Y160～162に位置する。SK621に切られて柱穴が1つ消失しているが、1間×1間の掘立柱建物であると考えられる。間尺はSP519～SP522間2.5m、SP522～SP527間2.6mを測る。柱穴規模は直径29cm～35cm、深さ33cm～34cm、平均は直径31.6cm、深さ33.3cmを測る。建物の軸方向はN-0°-Eである。遺物は実測に耐えるものがなかった。

SD302（第21図） 調査区南端X165に位置する。調査区を西から東へ横断し、Y166付近でD区との境により途切れている。遺構の規模及び形態は最大幅1.2m、深さ40cmを測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。埋土は上から暗褐色粘質シルト・にぶい黄褐色粘質シルト・褐色粘質シルト・にぶい黄褐色粘質シルト地山粒混である。堆積状況から、時間をかけて埋まっていたものと考えられる。遺物は須恵器・土師器等があり、8世紀後半に比定される。

中世の遺構

SK587（第21図） X168～170Y165～167に位置する。遺構の規模及び形態は、試掘トレンチにより東側を切られていて、規模及び形態は東西2.9m以上、南北3.9mを測る。深さはおよそ80cmを測る。平面形は不定形であるが、円形と方形を組み合わせた形にも見える。埋土は灰黄色粘質土に酸化鉄が多く混じる。遺構底部には地山の土が混じる。遺物は遺構底部で中世土師器と輪羽口が出土しており、14世紀代に比定される。同じ調査区内のSK590、SK621も規模・平面形・埋土がよく似ており、同じ目的で作られた遺構であると考えられる。（細辻）

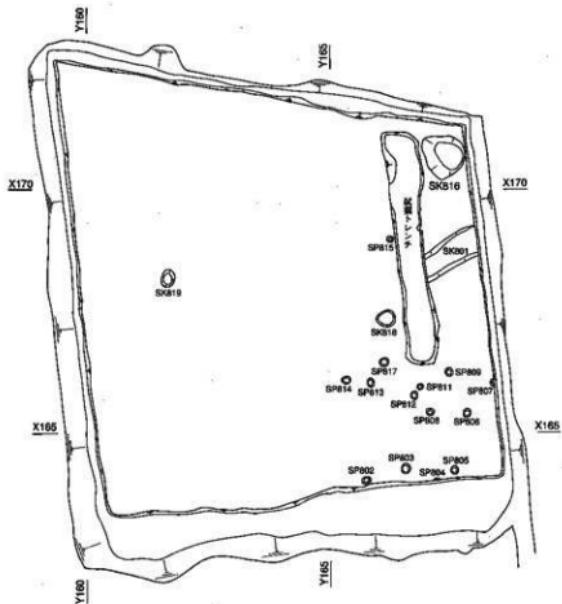
D区

弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の遺構

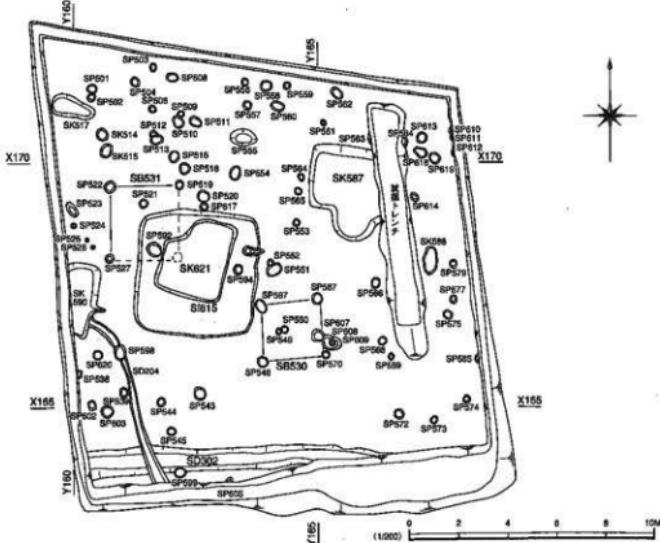
SD275（第23・25図） X160～164付近に位置し、調査区東西に走る溝。遺構の規模及び形態は、幅3.8m～5.5m、深さは最も深いところで116cmを測る。断面形は急な角度を持つU字形を呈する。調査区北東端でSD277と合流している。埋土は黒褐色粘質シルトとにぶい黄褐色シルトブロック状の混ざりで、遺構底部には地山の土が混じる。遺物は弥生土器壺・壺・高坏・器台等があり、法仏～白江式に比定される。

SD277（第23・25図） 調査区を南北から北東に縱断するように走る溝。SD277になぞるようにSD276が走っており、遺構の規模及び形態は不明であるが、幅7.5m以上、深さは最も深いところで145cmを測る。断面形は緩やかな角度を

下層



上層

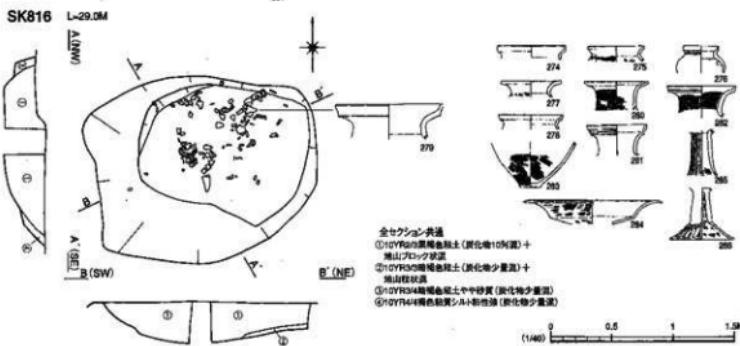


第20図 C区 造構配置図(1/200)

SI615



SK816 L=29.0M



第22図 C区 SI615遺物出土状況図(1/40)及び主な遺物の出土位置(1/8)
 SK816遺物出土状況図及び断面図(1/40),主な出土遺物(1/12) (276±16)

持つU字形を呈する。調査区北東端でSD275と合流している。埋土は黒褐色粘質シルトと灰黄褐色シルトブロック状の混ざり、黒褐色粘質シルトと灰黄褐色砂ブロック状の混ざりである。遺物は弥生土器壺・壺・高坏・器台があり、法仏～白江式に比定される。

古代の遺構

SI271（第25図） X158～162Y161～165に位置する。規模及び形態は、一辺4.5mの隅丸方形、床面積は20.5m²を測る。深さは約8cmを測る。住居の主軸方向はN-21°-Eである。床面はほぼ水平である。貼床、硬化面、周壁溝は検出されなかった。南壁西寄りで、カマドと思われる掘り込みを検出した。埋土は暗褐色土と褐色シルトが斑状に堆積し、焼土を含んでいる。遺物は床面でわずかに出土した。器種は須恵器壺蓋が1点完形で出土した他は、土師器壺などがあるが、図示したもの以外は実測できるものはなかった。遺物から8世紀代に比定される。

SI272（第25図） X156～159Y161～164に位置する。南西端が調査区の端で切られているが、一辺4mの隅丸方形で、床面積は14.8m²を測る。深さは8cmを測る。住居の主軸方向はN-28°-Eである。床面は住居の中央部分2m四方が高くなってしまい、壁から内側に幅90cm、深さ10cmほど掘り込まれている。やや幅が広すぎるが周壁溝の可能性がある。貼床・硬化面・ピットは検出していない。北壁ほぼ中央で、カマドと思われる掘り込みを検出した。埋土は暗褐色シルトと褐色シルトが斑状に堆積し床面の掘り込まれている部分は灰黄褐色砂と褐色シルトの混成に黒褐色の数が混じる。遺物は土師器壺などがわずかに出土しているが、図示したもの以外は実測できるものはなかった。遺物から8世紀代に比定される。

SD276（第23・25図） 調査区南西から北東に緩断するように走る溝。SD277をなぞるように走る溝である。規模は、幅3.5m～7.4m、深さは最も深いところで40cmを測る。埋土は黄褐色～灰黄色細砂である。遺物は遺構全体から出土した。器種は弥生土器壺・壺・高坏・器台・須恵器壺A・壺B・壺蓋・長頸壺等が出土した。遺物から8世紀後半～9世紀前半に比定される。

中世の遺構

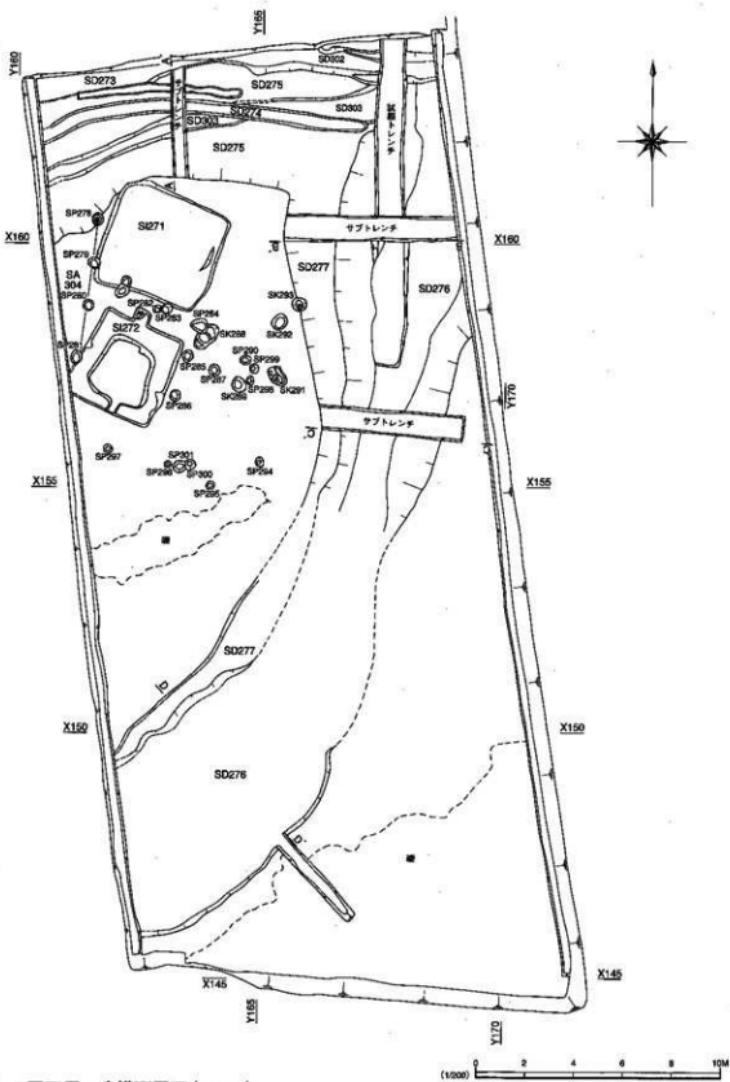
SX201（第26図） X162～163Y161～162付近に位置する石組遺構。規模は、長軸120cm、短軸63cmの長方形で、深さは13cmを測る。底には10cm～25cm大の川原石を敷き、四面の壁には10cm～20cmの川原石を一段ないし二段に積む。石組内法は、長軸105cm、短軸47cmである。遺構の長軸の方向はN-14°-Eである。埋土には焼土や多量の炭化物を含んでいる。石に被熱痕は特に見受けられなかったが、屋外炉のような目的で使用された可能性が高い。遺物は中世土師器が出土しており、15世紀後半に比定される。福光町の権原胡麻堂遺跡に類例が見られる。

SX241（第24図） X147～156Y163～170に位置し、調査区南半分を占めている。規模及び形態は、東側は調査区端で切られており不明であるが、検出した規模は、東西13.4m以上、南北16.5m、深さはおよそ50cmを測る。平面形は不定形である。埋土は灰褐色シルト、黒褐色シルトと灰黄褐色砂の混ざりである。遺物は、中世土師器・白磁があり、14世紀に比定される。また、SD276・277を切っており、弥生土器・須恵器・古代土師器が確認された。

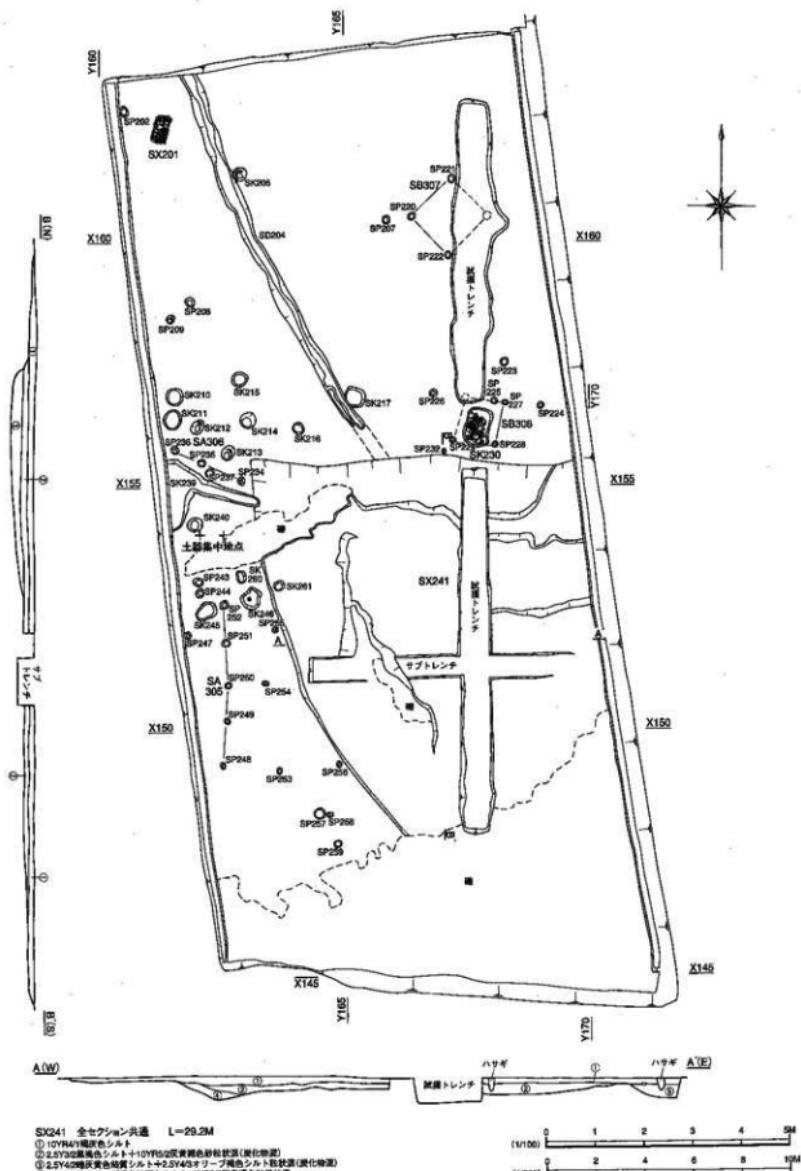
中世土師器廐棄遺構（第26図） X153～155Y162～163に位置する。規模は40cm×50cmの範囲に、中世土師器が数個体積み重なった状態で出土した。何かの祭祀の後、一括して廐棄されたらしく、復元するとほとんどが完形になった。15世紀末～16世紀前半に比定される。

SA304（第25図） X158～161Y160～162付近に位置する3間の横列である。間尺はSP278-SP281間1.9m+1.8m+2.2mである。柱穴規模は直径48cm～52cm、深さ18cm～34cm、平均は直径49cm、深さ26cmである。軸方向はN-9°-Eである。遺物は実測に耐えるものがなかった。

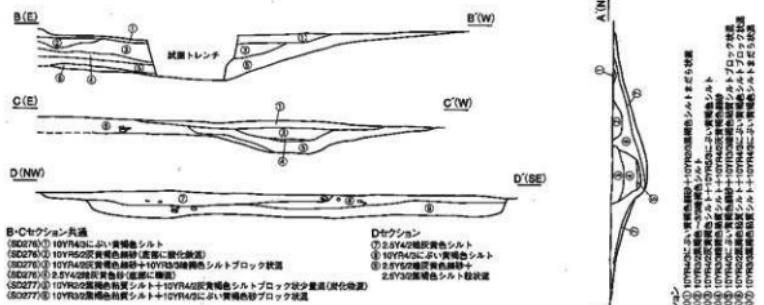
SA305（第26図） X149～153Y162～163付近に位置する4間の横列である。間尺はSP248-SP252間1.85m+1.25m+1.7m+1.6mである。柱穴規模は直径26cm～34cm、深さ20cm～34cm、平均は直径29cm、深さ27cmである。軸方向は



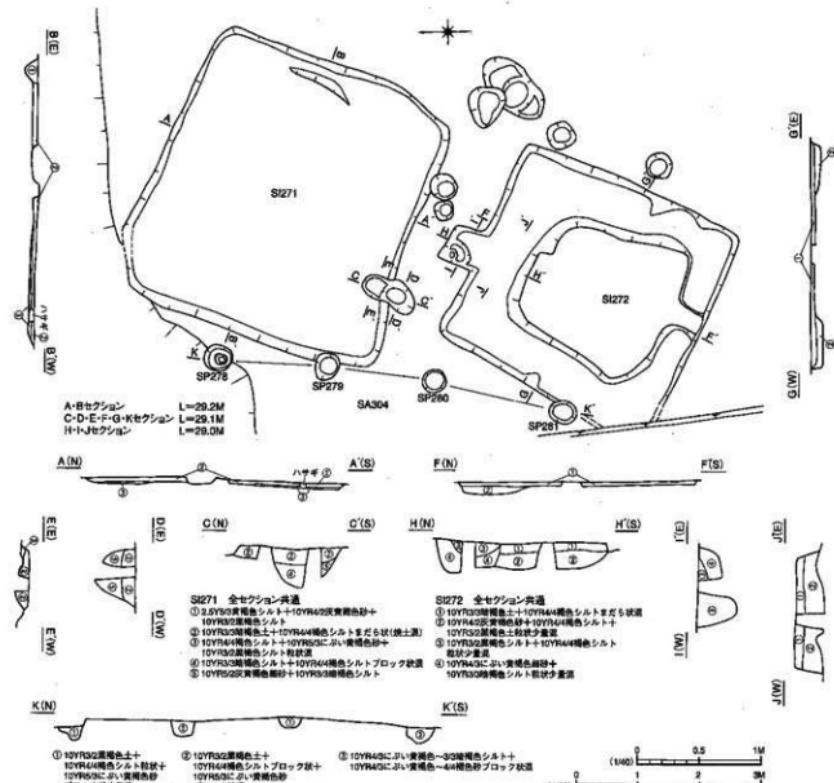
第23図 D区下層 造構配置図(1/200)



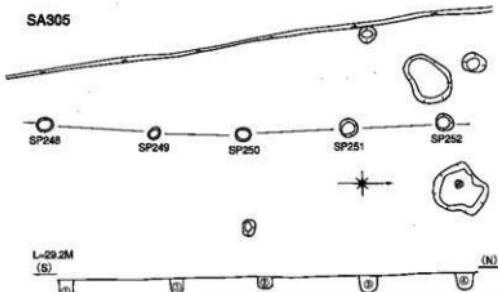
第24図 D区上層 造構配図(1/200) 及びSX241断面図(1/100)



SI271-272-SA304



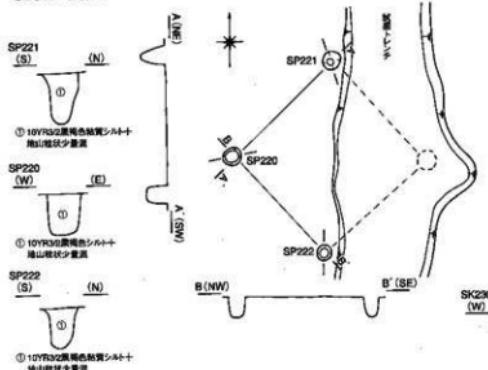
SA305



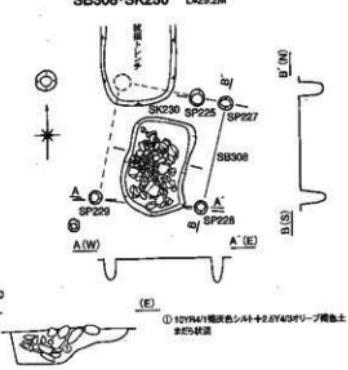
SA306



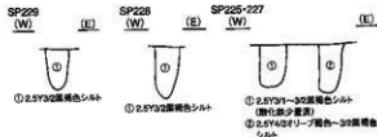
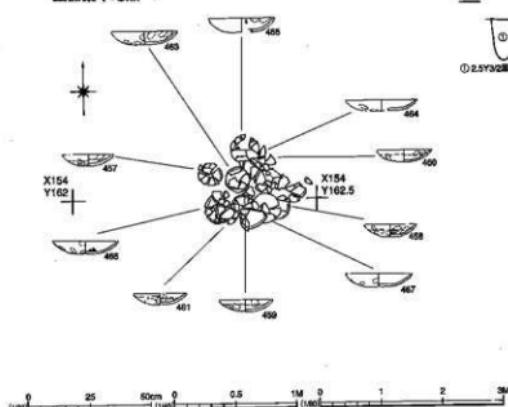
SB307 L-29.2M



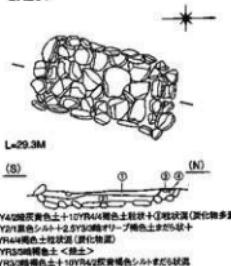
SB308-SK230 L-29.2M



土器集中地点



SX201



第26図 D区 SA305・306平面図及びエレベーション(1/80), SB307・308・SK230平面図及びエレベーション(1/80), SK230・ピット断面図(1/40), 土器集中地点遺物出土状況図(1/20)及び主な遺物の出土位置(1/8), SX201平面図及び断面図(1/40)

N-0°-Wである。遺物は実測に耐えるものがなかった。

SA306 (第26図) X155~156Y161~163付近に位置する2間の櫛列である。間尺はSP234-SP236間1.8m+1.2mである。柱穴規模は直径32cm~34cm、深さ10cm~20cm、平均は直径33cm、深さ15cmである。軸方向はN-65°-Wである。遺物は実測に耐えるものがなかった。

SB307 (第26図) X166~168Y159~162付近に位置する1間×1間の掘立柱建物である。間尺はSP220-SP221間2.2m、SP221-SP222間2.2mである。柱穴規模は直径26cm~32cm、深さ30cm~40cm、平均は直径30cm、深さ34.5cmである。建物の軸方向はN-46°-Eである。遺物は実測に耐えるものがなかった。

SB308 (第26図) X155~157Y167~169付近に位置する1間×1間の掘立柱建物である。間尺はSP227-SP228間1.75m、SP228-SP229間1.75mである。柱穴規模は直径22cm~26cm、深さ32cm~40cm、平均は直径24cm、深さ37cmである。建物の軸方向はN-12°-Eである。SK230を買っており、これはSB308に伴う遺構である可能性がある。遺物は実測に耐えるものがなかった。

(堀内)

E区

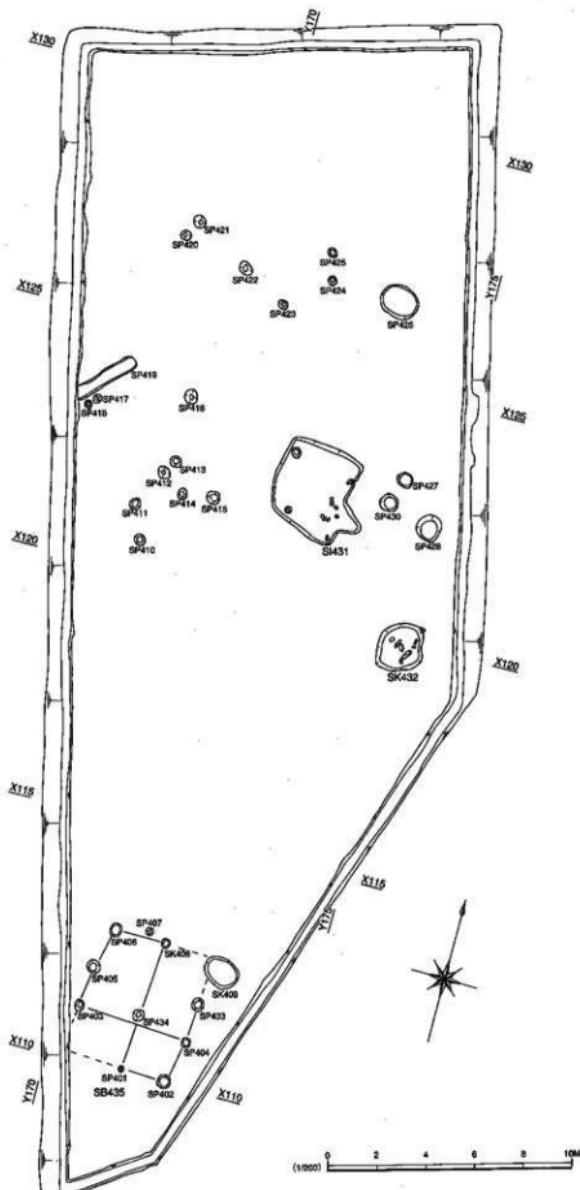
古代の遺構

SI431 (第28・29図) X123~124Y172~173に位置する。規模及び形態は、平面形はやや歪んだ長方形で、長辺約3.5m、短辺約3.0m、床面積は10.9m²を測る。深さはおよそ15cmを測るが、壁の立ち上がりは緩やかで、後世に削平されている可能性がある。床面はほぼ水平で、貼床・硬化面・周壁溝は検出されなかった。住居の軸方向はN-114°-Eである。遺構の東壁の南寄りに、焼土の堆積した振り込みがある。周辺に被熱を受けた石が6個長軸を上下にして立った状態で見つかり、カマドの袖石と思われる。その間から、土師器長頸壺が出土した。他にピットを2箇所検出した。ピット1は遺構の北西角寄りに位置する。長軸30cm、短軸23cm、深さ14cmを測る。ピット2は、遺構の南西角寄りに位置し、長軸26cm、短軸23cm、深さ10cmである。埋土は黒褐色砂質シルトと暗オリーブ褐色シルトの混じりである。遺物はカマド周辺を中心にして大半が出土した。器種は土師器長頸壺・須恵器壺Aがあり、8世紀後半に比定される。

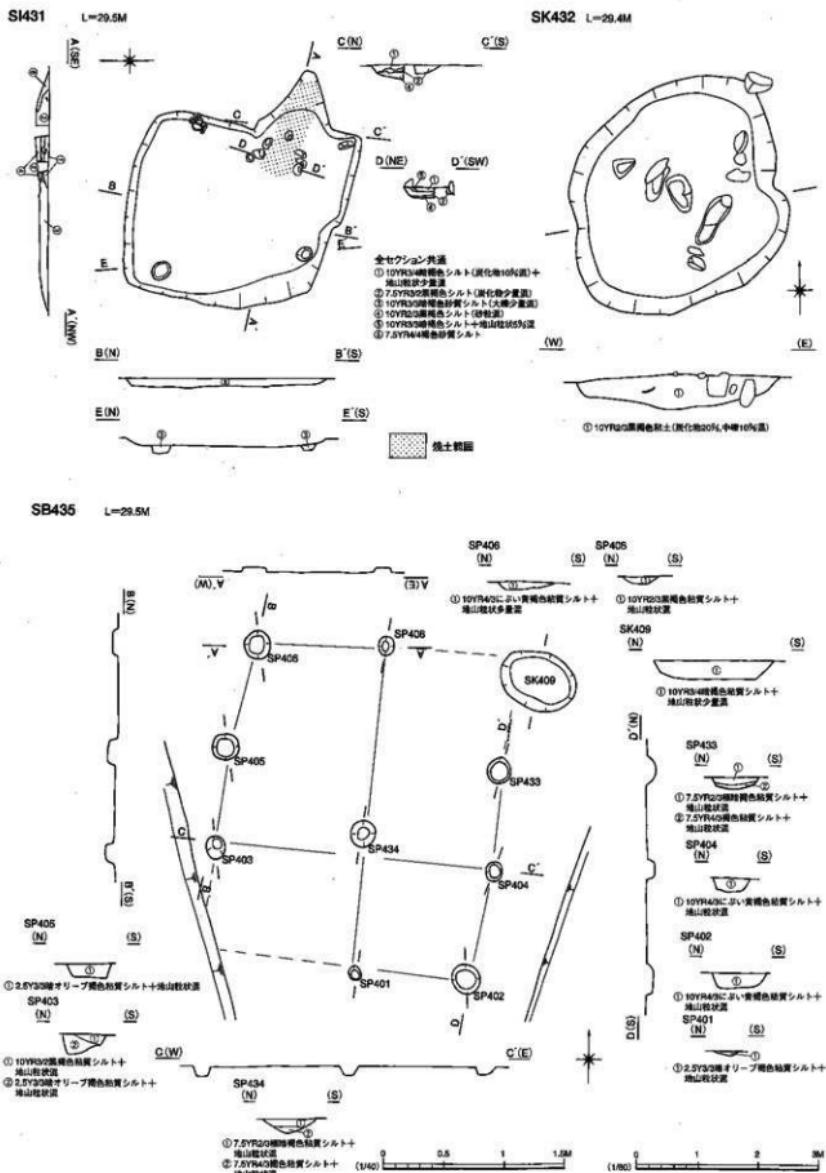
SK432 (第28・29図) X120Y175に位置する。遺構の規模及び形態は、長軸2.2m、短軸1.8m、深さ30cmを測る。平面形は不整形な楕円形である。遺構の長軸方向は、N-54°-Wである。埋土は黒褐色で粘り気が強く、炭化物が大量に混じる。遺物は埋土の上方から多く出土した。器種は土師器壺・須恵器壺A・壺B・壺蓋・長頸壺・短頸壺・砥石があり、須恵器は10世紀前半に比定される。須恵器短頸壺のうち、鉄滓が付着したものがある。また、図示しなかったが、土を焼いて正方形の柱状にした不明土製品もあった。大きさは残存部分で長さ55cm、幅18cmである。鍛冶関係の仕事をした後、使わなくなったものを集めて捨てたごみ穴と考えられる。

SB435 (第28図) X110~113Y170~174に位置する2間×2間以上の掘立柱建物である。西側が調査区域外にあるため、全容は不明である。間尺はSP403-SP406間1.24m+1.38m、SP406-SP408間1.76m、SP433-SP402間1.22m+1.36m、SP404-SP403間1.90m+2.12mである。柱穴規模は直径20cm~46cm、深さ7cm~18cm、平均は直径36.3cm、深さ12.1cmである。建物の軸方向はN-6°-Eである。遺物は須恵器・土師器があるが実測に耐えるものがなかった。

(細辻)

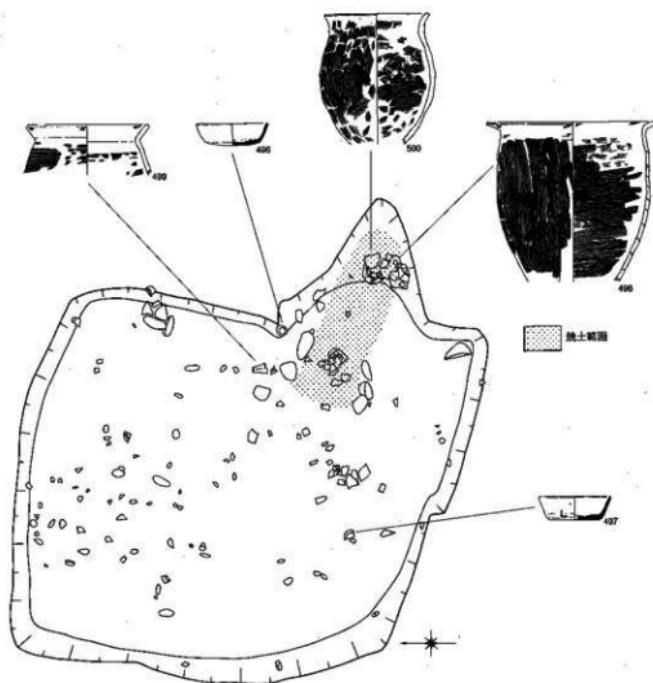


第27図 E区 遺構配置図(1/200)

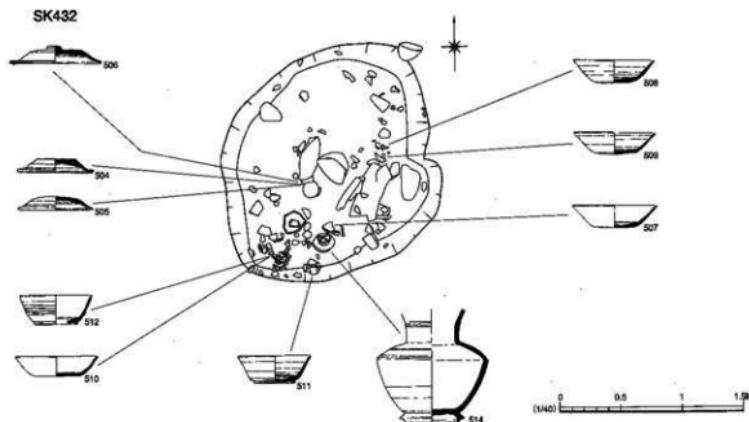


第28図 E区 SI431平面図及び断面図(1/80),SK432平面図及び断面図(1/40)
SB435平面図及びエレベーション(1/80),ビット断面図(1/40)

SI431



SK432



第29図 E区 SI431・SK432遺物出土状況図(1/40)及び主な遺物の出土位置(1/8)

第4章 まとめ

銀治町遺跡では平成12年度、13年度の2年間にわたり、延べ4,570m²の発掘調査を行った。遺跡は弥生時代後期後半～古墳時代前期前半・古代・中世の3つの文化層が存在し、特に土器については良好な一括資料が出土し、この地域の歴史の一端を明らかにすることができた。最後に遺構と遺物についてまとめをここでふれておきたい。なお、調査区名、遺構番号は第3章で記したもの、図中の番号は遺物実測図版の番号と一致する。

1 遺構について

弥生時代後期後半～古墳時代前期前半（第30図）

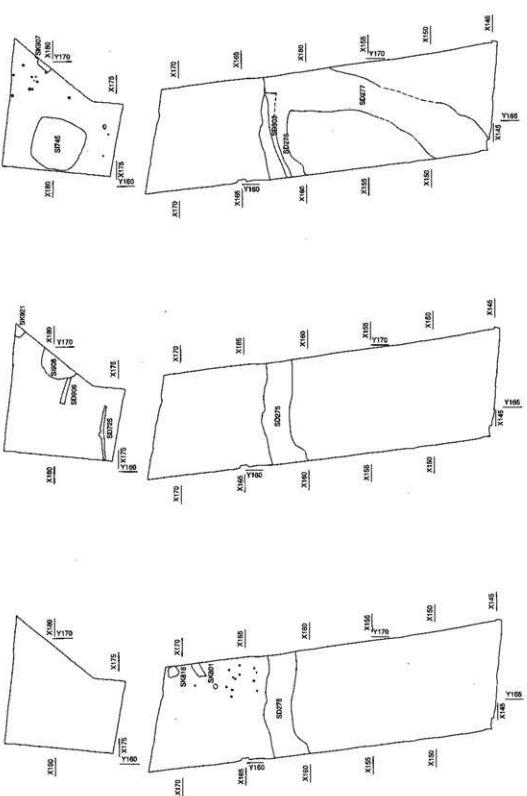
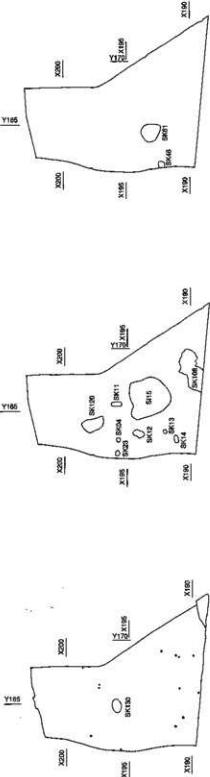
今回の調査では、この時期の遺構はA区からD区において検出されている。なお、E区においてもかなりの量の遺物が出土していることから、近辺に遺構が分布している可能性は高い。法仏II式期に属する遺構はA区SK130・C区SK816とピットが検出された。C区SK816は、地山とは明らかに違う埋土であり、被熱を受けた跡も窺える。弥生土器が一括して出土したが、復元すると、壺口縁部や高坏脚部が多く、土器の器種や部分によって、一定の決まりや風習が存在したのかもしれない。この時期に定住した証拠となる遺構は見つかっていないが、包含層から多くの遺物が出土すること、近隣の富嶠赤坂遺跡・離山砦遺跡では遺構・遺物が確認されていることから、本遺跡でも調査区外に埋蔵されている可能性がある。月影式期には遺構の数が増加し、大量の遺物が出土した。集落の最盛期を迎えたと考えられる。この時期に属する遺構は、堅穴住居跡が2軒検出された。土器の様相から、A区SI15が月影I式、B区SI908が月影II式であると考えられる。SI908は、完形に復元できる土器が多くなっており、高坏など煮炊きに使われない遺物が、焼成時ではなく後から2次的被熱を受けているようであること、この2点から、炭化物層は整地の時や廃棄の時に意図的に燃やした際にできたものではなく、偶然の事故にあって生成され、よって住居は焼失し廃棄されたと考えられる。あるいは炭化物層が床面のみに一定の厚さで均等に堆積していること、壁には堆積が見られなかったことなどから、炭化物層は燃焼によって生成されたものではない可能性もある。A区SK108は、土器廃棄場と考えられ、大量の一括廃棄された土器が出土した。この地域の土器様相を考える上で貴重な資料となる。C区SK816と同様に、復元してみると、壺などはわずかで長頸壺の口縁部や高坏脚部・高坏脚部など特定の部分の比率が高い。このことから、土器を廃棄する際に、特定の器種・部位を決めて廃棄する風習・祭祀はこの時期まで存続したのかもしれない。白江式期に属する遺構には、B区SI745がある。一辺約8mの隅丸方形で、この時期の住居としては大型の住居である。一家族の住居ではなく、共同で使用するスペースであるかもしれない。この他、法仏II式期から白江式期まで継続した遺構にD区SD275・277溝がある。SD277は溝の肩部から土器が出土した。このことから弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけて川溝に土器を廃棄するという行為が、共通の祭祀として継続していた可能性がある。

人々は、法仏II式期にA区近辺で集落を形成し始め、月影式期には定住して西側丘陵上に四隅突出型埴丘墓の鏡坂埴丘墓群を築いた。この時期が集落の最盛期だと考えられる。白江式期には南に向かって居住地域を移した、或いは広げていったと考えられる。その間、継続して南に位置する川溝への土器廃棄を行っていたと考えられる。

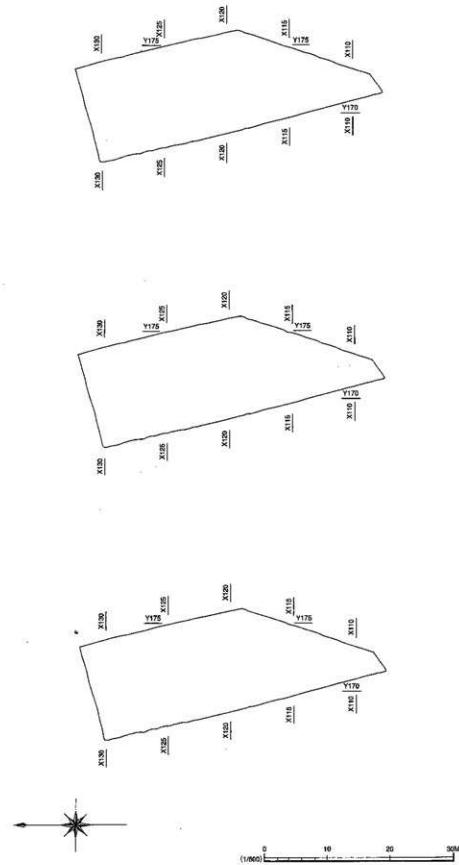
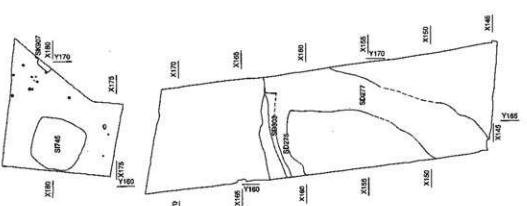
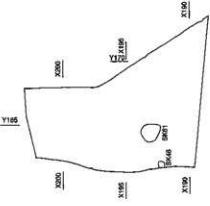
古代（第31図）

この時期の遺構はB区からE区において検出されている。A区では遺構は検出されなかったが、遺物は一定量出土しており、後世に削平されたか、近辺に存在する可能性は高い。まず7世紀中頃の遺構にC区SI615が検出された。東側壁の掘り込みからカマドの支脚が出土している。天井や袖は失われているものの、カマドと考えられる。この時代の堅穴住居跡は調査例が少なく、様相が不明な点が多い。それを補う貴重な調査例といえる。各廟寺創建に携わった人々が生活していた可能性もある。8世紀代の遺構としてはD区SI271・272・E区SI431の3軒が検出された。いずれも方形でカマドを持つ。但し、カマドの方向が、SI271は南、SI272は北、SI431は東、と3棟とも違っていること、

法仏式期



白江式～古墳クルビ式期

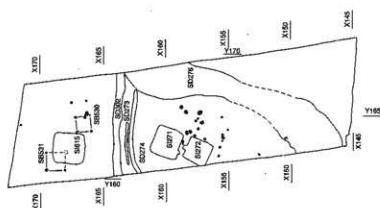
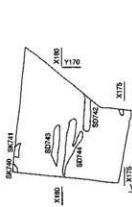
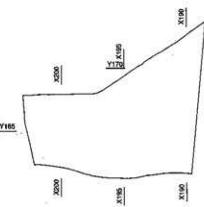


第30図 弥生～古墳時代遺構配置図(1/600)

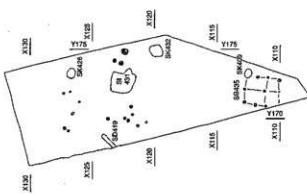
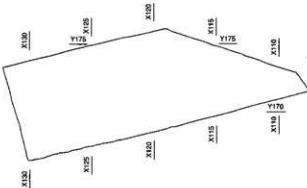
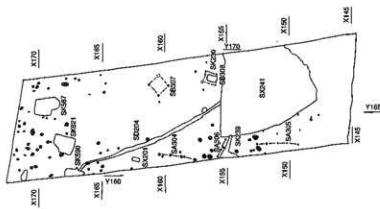
中近世



古代



中近世



第31図 古代・中近世造構配置図(1/600)

特にSI271とSI272の住居はカマド近距離で向かい合わせになっていることなど不明な点もある。掘立柱建物跡は3棟検出した。C区SB530・531は小規模な建物で小屋のような施設であると考える。E区SB435は柱間が均等でなく、土器が出土していないため、柱穴の時期が違う可能性もある。E区SK432からは鉄滓の付着した須恵器・砥石・不明土製品が出土しており、須恵器の時期から10世紀前半である。鍛冶仕事に伴い出土した不要品やごみを廃棄した穴と考えられる。D区SD276は弥生時代から続く大溝で、この時代にも、まだ溝としての機能は保っていたようである。埋土から須恵器・土師器などが多く出土し、須恵器の時期から、9世紀前半迄に埋没したと考えられる。また、遺構からの出土ではないが、「鷺」と墨書きされた須恵器が見つかった。「鷺」という字は類例がなく、複雑な字である。この地域には、この時代には複雑な字を認識できる人々が生活していた可能性がある。

字名には、その土地の歴史や由来を示す呼称が残される場合が多々ある。『鍛冶町』(かんじやまち)という字名は、もともと『鍛冶屋町』(かじやまち)だったものが、なまつた呼び方で現在まで伝えられてきたものと推測できる。今回の調査では、鍛冶関係の遺構・遺物が検出され、由来を裏付けるとともに、字名の起源が少なくとも10世紀前半では遡ることができるのではないかと考えられる。

中世（第31回）

この時期の遺構は、A区からD区まで検出されているが、北のA・B・C区では地山の標高が高く、後世に削平されているためか、一部の深い遺構を除いて遺構の残りがありよくない。遺物に関しては、全ての地区で出土しているが、特にD区での出土が多い。C区で検出したSK587、SK590、SK621は、特にSK587からは底部から輪羽口・14世紀代の中世土師器、SK590からは14世紀代の中世土師器が出土している。はっきりと断定はできないが、輪羽口が出土していることから、鍛冶関連の遺構の可能性がある。D区SX201は、遺構の埋土などから、屋外炉のような施設と考えられる。県内では、福光町の梅原胡摩堂遺跡で1例類例がある。SX201と類例を比較すると、横壁の石組がSX201は一段、類例は二段であること、SX201は単独で存在するが、類例は掘立柱建物に伴う、などの違いがある。今後の調査例の増加を待ちたい。掘立柱建物は6棟検出した。柱穴に伴う遺物が少なく、時期不明のものが多いが、古代の遺構を切っていたり、埋土の状況から、中世以降に建てられた可能性が高い。B区SD735は遺物の様相から、古代から中世まで長い期間溝として存在したと考えられる。また、出土遺物に青磁・白磁・瀬戸瓶子・天目茶碗など、非日常用品もわずかではあるが見られる。関連は不明ではあるが、近隣には寺も存在し、身分の高い人々が生活していた可能性もある。

この地域は、射水・婦負二郡の守護代である神保氏の根据地として、また砺波市に位置する増山城などへ抜ける県東部と西部とを結ぶ交通の要衝として、早くから争奪戦が繰り返された。山田川を挟んだ両岸の丘陵上には富崎城をはじめとする山城が密集して築かれている。また、千坊山遺跡でも、中世の屋敷跡と推測される遺構が検出されている。小沢国夜史氏の研究によれば、富崎城の攻防戦は、大きなものは永禄3年・永禄5年・元亀3年・天正10年の4回あり、その都度、この地域は戦場となったと考えられる。人々は、生き抜くために、ある時は戦国武将の威光を得て村を守るために制札を買ったり、ある時は山へ逃げて、戦いの収まるのをじっと待っていた、ということである。そのためには、情報を集めてしたたかにどちらの武将に組した方が得策か判断したと思われる。今回の調査では、戦に明け暮れて命の危険に晒されながらも、少しでも生き延びようとした人々の生活の痕跡をわずかながらうかがい知ることができた。

(細辻)

2 遺物について

弥生時代後期から古墳時代初頭の器種細別型式分類（第32図・第33図・第34図）

全体の器形が分かるものが少ないので、主に口縁部・脚部の形態を中心に分類を行った。なお、ここでは便宜上、器種の後に付くべき「形土器」は省略した。

(1) 壺

(壺A・B) 有段口縁壺。口縁部外面に擬凹線・凹線を施すもの（A類）と無文のもの（B類）がある。

A (B) 1 長く外反する頸部に付加状口縁部が付く。擬凹線は2条程度と少ない。

A (B) 2 長めの外反する頸部に外反・外傾する短い口縁部が付く。擬凹線は2～3条程度と少ない。

A (B) 3 段の屈曲が強く、短く外反する頸部をもち、伸展する口縁部が直立・外傾する。口縁部内面に指頭圧痕を残すものがある。

A (B) 4 短く外反する頸部をもち、伸展する口縁部が外反する。段の屈曲が強いものとやや緩やかなもの、口縁部内面に指頭圧痕を残すものがある。

A (B) 5 段の屈曲が頸部と胴部の境を内側にやや窪ませる程度であり、伸展する口縁部がやや外傾して直線的に立ち上がる。口縁部内面に指頭圧痕を残すものがある。胴部外面を叩き調整する畿内系の影響を受けたものもある。

A (B) 6 段の屈曲が口縁部外面下端で肥厚する程度であり、伸展する口縁部が外傾して直線的に立ち上がる。

B 7 かなり短い頸部から口縁部が短く立ち上がり、断面が三角形に近い形態を呈する。

B 8 外反する頸部に、斜め上方に短く摘み出した口縁部が付く。

B 9 緩く内湾した口縁部をもつ。

B10 口縁端部を短く上方に摘み上げて受け口状とする。屈曲の強いB10a、口唇部を凹状に面取りするB10b、口唇部を内傾して面取りするB10cがある。東海・近江系の影響が推定される。

B11 段の屈曲が強く、口縁部下端を外側に強く突出させる。山陰系の影響が推測される。

(壺C) 「く」の字状口縁壺。

C 1 口縁端部を強く面取りし、断面が三角形に近い形態を呈する。

C 2 口縁端部を面取りする。頸部で緩く屈曲して外反する比較的短い口縁部をもつC 2a、頸部で強く屈曲して内面に稜をもち、やや外反して直線的に伸びる口縁部をもつC 2b、頸部で屈曲して内面に稜をもち、外反して長く伸びる口縁部をもつC 2cがある。

C 3 口縁端部を丸く仕上げる。頸部で緩く屈曲し、外反する比較的短い口縁部をもつC 3a、頸部で鋭く屈曲して内面に鋭い稜をもち、強く外反する短い口縁部をもつC 3b、頸部で屈曲して内面に稜をもち、大きく外反して長く伸びる口縁部をもつC 3c、頸部で強く屈曲して内面に稜をもち、口縁部が外傾して壺部が若干内湾気味になる球脛状のC 3dがある。C 3dは畿内系の影響を受けたものか。

(2) 壺

(壺A) 長頸広口壺。外傾・外反する長い頸部をもつ。

A 1 口縁端部を丸く仕上げる。

A 2 口縁端部を面取りする。

A 3 口縁端部に断面三角形の口縁帯を作り出す。口縁帯を浮文や擬凹線で加飾するものもある。

(壺B) 長頸有段壺。外傾・外反する長い頸部をもつ。

B 1 口縁部が内湾し、外側に大きく開く。口縁部外面を擬凹線で加飾するものもある。

B 2 口縁端部を上方に短く拡張する。口縁部外面を擬凹線で加飾するものもある。

B 3 段が強く屈曲する。

B 4 段の屈曲が口縁部下端で外側にやや出っ張る程度のもの。

B 5 内傾する頭部から、外傾する口縁部が付くもので、口縁部下端が肥厚するB 5aと口縁部がやや内湾気味に立ち上がるB 5bがある。B 5bは口縁部外面を擬凹線で加飾するものもある。

(壺C) 短頸有段壺。

C 1 口縁部が短く外傾し、段の屈曲が口縁部外面下端で肥厚する程度のもの。

C 2 段が強く屈曲し、口縁部が外傾気味に立ち上がる。

C 3 段が強く屈曲し、伸展する口縁部がやや外反する。

C 4 伸展する口縁部が内湾する。

C 5 伸展する口縁部がやや外傾して直線的に立ち上がり、段の屈曲が口縁部外面下端で突出する程度のもの。

C 6 直立的に立ち上がるやや長い頸部をもち、口縁部が直立気味に立ち上がる。

C 7 大きく外反するやや長い頸部をもち、口縁部が外傾する。口縁部外面を波状文で加飾するものもある。

C 8 大きく外反するやや長い頸部をもち、口縁部は短く上方に拡張する。

(壺D) やや長い頸部に、外反する口縁部が付く有段壺。

D 1 直立的に立ち上がる頸部をもち、口縁部が外反する。

D 2 段は口縁部外面下端を肥厚させる程度であり、頸部・口縁部とともに外反する。

D 3 段は口縁部外面下端を突出もしくは肥厚させる程度であり、頸部・口縁部とともに外傾して直線的に伸びる。

D 4 頸部・口縁部とともに強く外反し、口縁部下端を外側に突出させる。山陰系の影響があるか。

(壺E) 「く」の字状口縁壺。

E 1 頸部のくびれが緩やかで、短い口縁部が外反する。端部を丸めるものと面取りするものがある。

E 2 頸部のくびれが強く、口縁部が外反して開く。

(壺F) 外側上方に直線的に立ち上がる長めの口縁部をもつ。直口壺と推定される。

(壺G) 加飾広口壺。他地域の影響が推定されるもの。

G 1 外反する頸部をもち、口縁部は短く上方に拡張して有段口縁とする。口縁部をスタンプ文や円形浮文で加飾する。

G 2 外傾して直線的に伸びる口縁端部に断面三角形の口縁部を作り出す。口縁部を棒状浮文や擬凹線で加飾するものもある。東海系バレススタイル壺の影響が推定される。

(壺H) 台付装飾壺を絶続する。肩部に突帯もしくは赤彩をめぐらす。肩部で屈曲しそろばん玉状になるものと、肩部が丸いものがある他、口頸部の形態で更に細分化される。

(壺I) 短頸壺。肩の張る肩部に短い口縁部が付く。

(壺J) 小型壺。

(3) 高杯

(高杯A) 杯底部が水平ないしは外側上方へ直線的に伸び、口縁部が底部境で屈曲し、外反して伸びる。底部が大きめで口縁部が強く外反する浅めのA 1と、底部がやや小さいA 2がある。

(高杯B) 杯底部が椀形を呈し、口縁部が底部境で屈曲し、外反して伸びる。底部がかなり大きく底部境の屈曲が強いB 1、底部が小さく長めの口縁部が付くB 2、底部が小さく底部境の屈曲が弱いB 3がある。

(高杯C) 椒形を呈する。杯底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる。

(高杯D) 口縁部がやや内湾して開く。東海系もしくは畿内系の影響が推定される。

(脚部A) 棒状有段脚。

(脚部B) 捩部途中で強く屈曲し、外へ直線的に開く。

(脚部C) 捩部途中から緩やかに外に開く。

(脚部D) 短めの脚部で、裾部で外反する。

(脚部E) 脚部中央が膨らみ、裾部で強く屈曲して外反する。畿内系の影響が推定される。

(4) 器台

(受部A) 有段口縁器台。受部が深く、底部から外反して開き、外反して長く伸びる口縁部をもつ。口縁部外面を擬凹線で加飾する。

(受部B・脚部B) 有段口縁器台。受部は脚部に比して大きく、受部底から外反して伸び、口縁部がやや外傾して立ち上がる。脚部は中央で最も細くなり、外反して伸びる。

(受部C) 受部底から外反・外傾して伸び、口縁端部が短く上方に立ち上がる。受部底から外反して伸び口縁端部を上方に若干拡張するC1と、受部底から外傾して直線的に伸び、口縁部が上方に短く屈曲するC2がある。口縁部外面を擬凹線で加飾するものもある。

(受部D・脚部E2) 受部は平らな皿状となり、脚部は短めで裾部で外反する。受部から脚部に至る孔は無い。

(受部E) 小型器台の受部。やや内湾気味に開く。

(脚部A) 有段の脚部。棒状になるA1と中央で最も細くなり外反して伸びるA2がある。外面を擬凹線で加飾するものもある。

(脚部C) 裾部途中から緩やかに外に開く。

(脚部D) 受部から脚部にかけてX状に開く小型のもの。脚部中央で、内面に稜をもって強く屈曲する。

(脚部E1) 脚部は短めで裾部で外反する。

(脚部F) 小型器台もしくはその影響を受けた小型の器台の脚部。杯底部から「ハ」の字状に開く。

(5) 蓋

(蓋A) 摑み頂部が窪み、体部が直線的に伸びる。

(蓋B) 摑み頂部が平坦で、体部は内湾する。摑みが高さのある逆台形になるものもある。

(蓋C) 小型で、内面に垂下する返しが付くもので、体部は直線的に伸びる。台付蓋の蓋と推定される。摑み頂部が平坦で、摑みの形態が高さのある逆台形になるC1と、頂部に2箇所の突起が付くC2がある。

(6) 鉢

(鉢A) 有段口縁鉢。丸い脚部をもつ。

A 1 進展する口縁部をもつ。口縁部外面を擬凹線で加飾するものも多い。

A 2 口縁部があり進展せず、深めの脚部をもつ。

A 3 口縁部下端が外側にやや屈曲して外側上方に短く摑み出るもので、深い体部をもつ。

(鉢B) 台付鉢。

(鉢C) 「く」の字状口縁鉢。深い脚部をもち、口縁部は緩く屈曲して外反する。

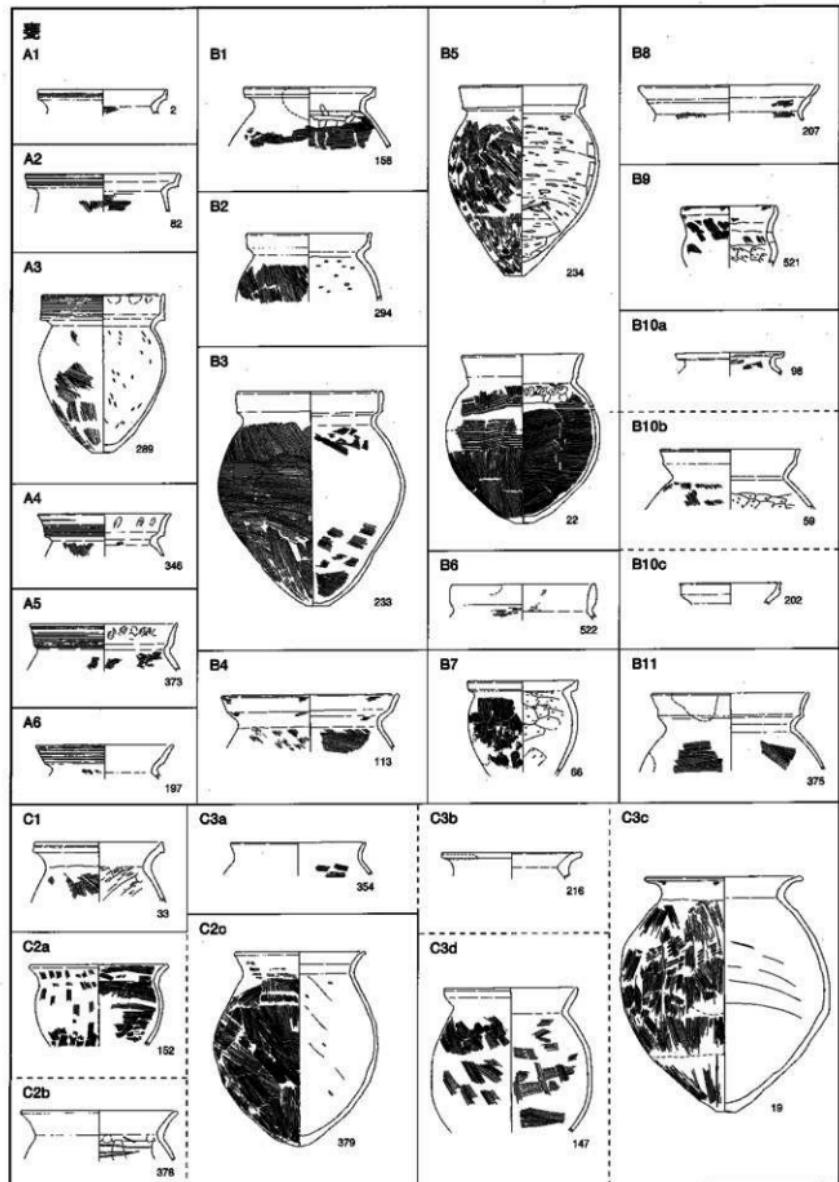
(鉢D) 平底で、脚部は深く、直立気味に立ち上がる。

(鉢E) 有孔鉢。底部が尖り、脚部は外傾して直線的に開くE1と、脚部が砲弾形を呈するE2がある。

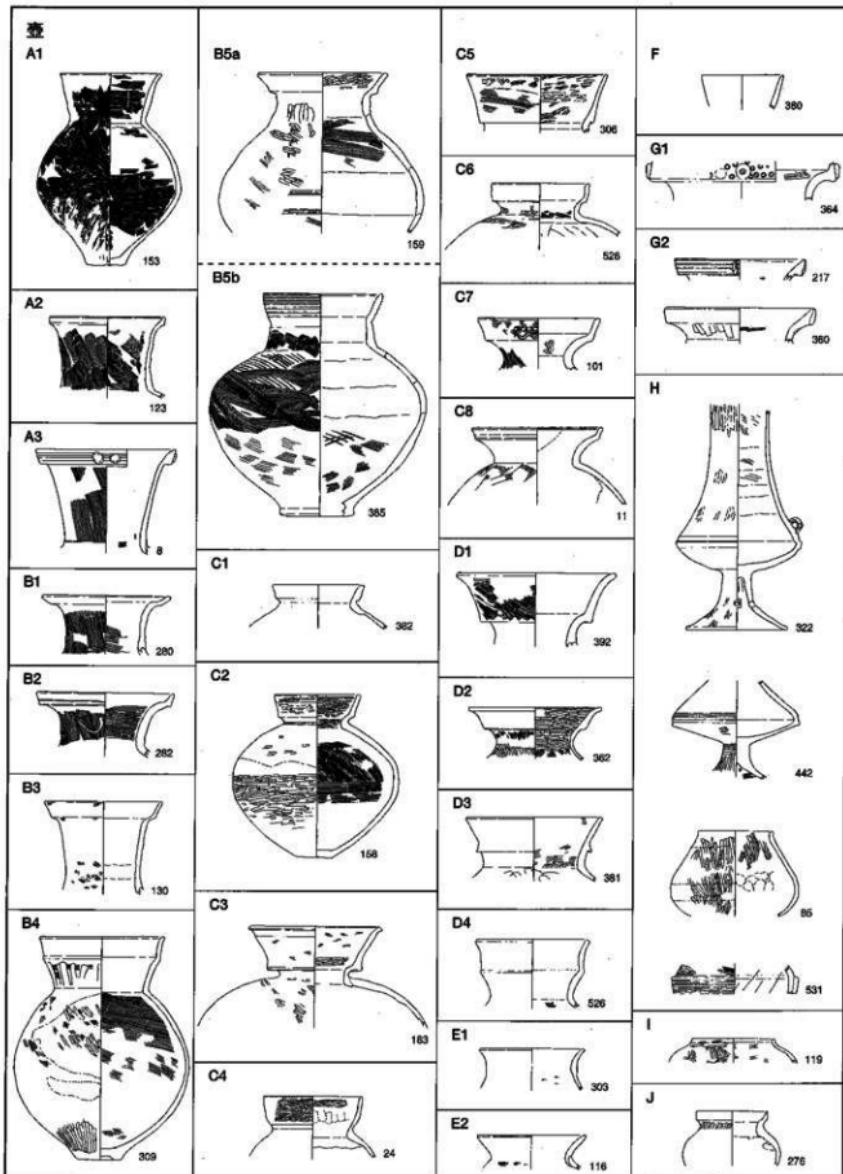
(鉢F) 梶形鉢。

(鉢G) 皿状の鉢。平底で、大きく外側に開いて伸びる脚部をもつ

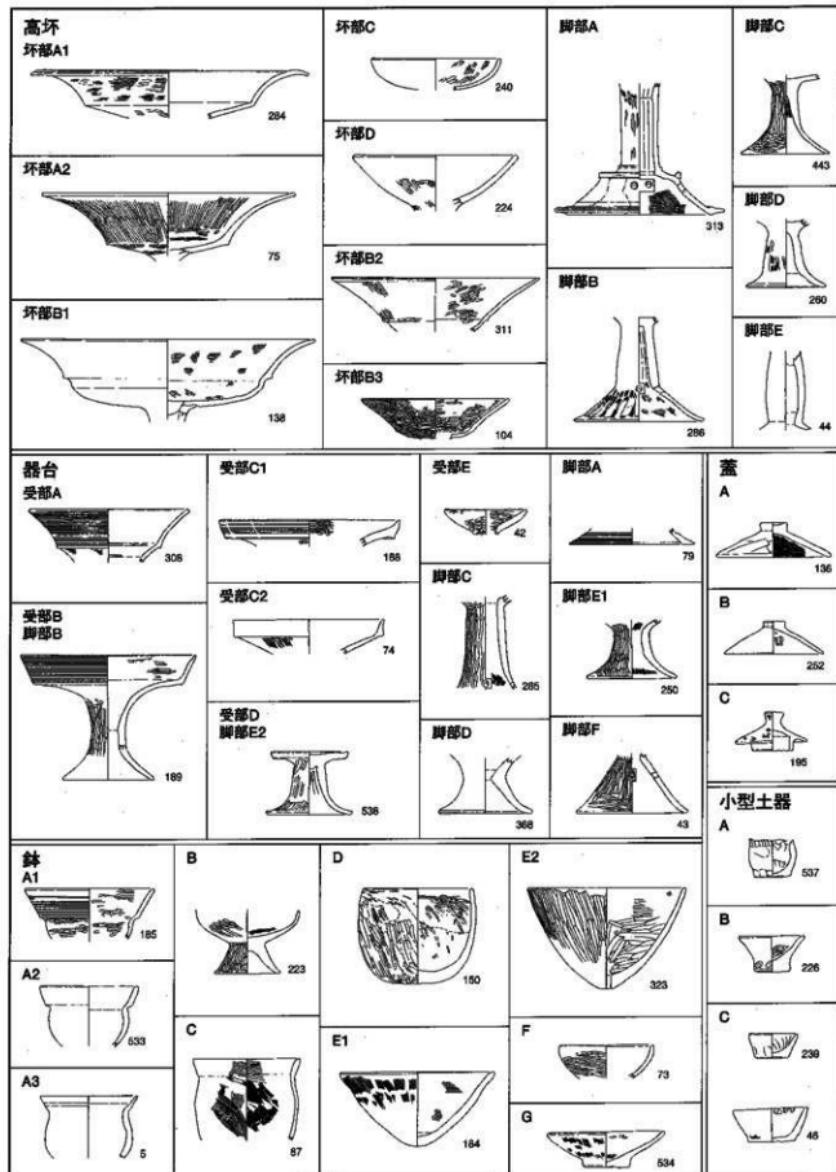
(7) 小型土器



第32図 弥生土器の器種分類図(1/6)



第33図 弥生土器の器種分類図(1/6)



第34図 弥生土器の器種分類図(1/6)

(小型土器A) 内湾する深い胴部をもち、口縁先端が僅かに屈曲して外反する。

(小型土器B) 厚い平底で、外傾して開く胴部をもつ。

(小型土器C) 平底で、屈曲して外傾・内湾気味に立ち上がる胴部をもつ。

(大野)

古墳時代・古代の器種紙別型式分類（第35図）

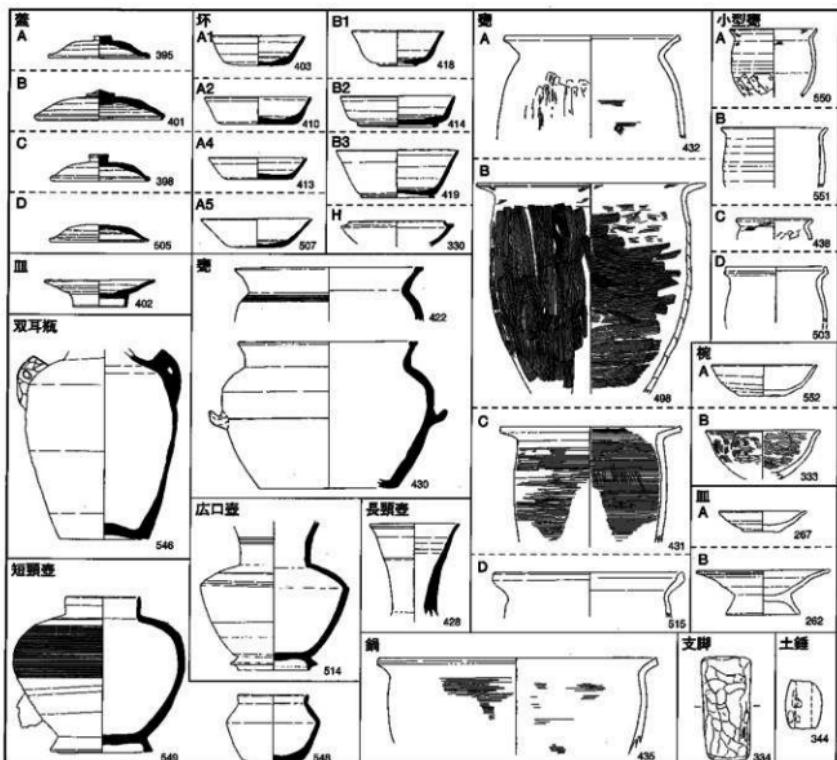
須恵器 出土した器種は、壺蓋、壺、皿、短頸壺、広口壺、長頸壺、双耳瓶、甕がある。

(壺蓋) 口縁部の形態から、断面三角形を呈するものを壺蓋A、口縁端部を内側に強く屈曲させるものを壺蓋B、巻き込むものを壺蓋C、その他、つまみ無いものを壺蓋Dとする。

(壺) 高台がつかないものを壺A、つかものを壺Bとする。更に、体部が外側上方に立ち上がるものをA1・B1、A1・B1よりも器高が低く口径が大きいものをA2・B2、器高が高い大型のものをB3、これらには底部と体部の境が丸いものと角張るものがある。また、体部が大きく外傾するものをA4、皿型を呈するものをA5とする。かえりを持つものを壺Hとする。

土師器 出土した器種は、高壺、小型甕、甕、鍋、碗、棒状支脚である。

(小型甕) 小型甕Aは口縁部がやや内湾し端部を丸くおさめ、体部がやや膨らむもの。小型甕Bは大きく外反する



口縁部の端部を丸くおさめ、体部が直線的に立ち上がる。小型壺Cは端部を面取りし、口縁部が断面四角形を呈する。小型壺Dは端部を内側に強く屈曲させるもの。

(窓) 壺Aは外反する口縁端部を丸くおさめ、体部がやや膨らむ。面取るものもある。壺Bは外反する口縁端部を丸くおさめ、体部が直線的に立ち上がる。壺Cは端部を面取りし、口縁部が断面四角形を呈し、体部が直線的に立ち上がる。壺Dは口縁端部を内側に巻き込み、体部が直線的に立ち上がる。

(鍋) 鍋は端部を面取りし、口縁部が断面四角形を呈する。

(椀) 梗Aは黒色処理等を行わないもので、体部が内湾して立ち上がるもの。梗Bは内黒梗。

(皿) 高台がつかないものを皿A、つくものを皿Bとする。

中世・近世・その他製品（第36図）

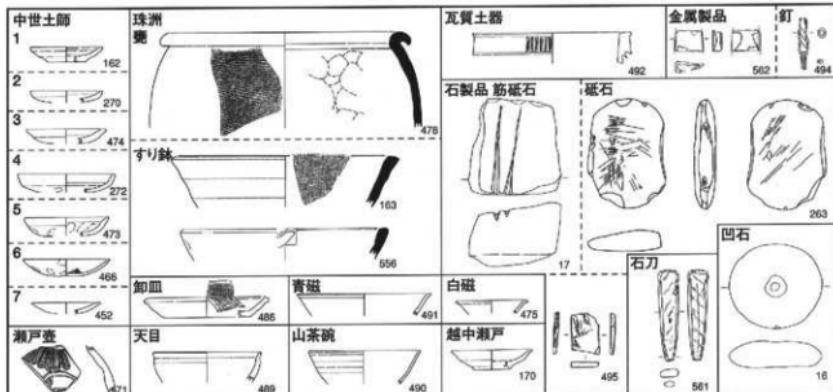
中世土器 1類はロクロ成形で、やや小さめの平底から外傾する体部がつく。2類はやや丸底気味で器高が浅く、体部は内湾し、口縁部を丸くおさめる。3類は口縁端部に一段ナデを施し外反させる。4類は丸底で口縁端部をナデで直立気味に外傾させる。5類は平らな底部から体部が強く内湾して立ち上がり、口縁端部をナデで外反させる。6類は、底部が丸底で、体部から緩やかに内湾する。器壁が薄く、水薬された土を使う。7類は丸底で口縁端部を緩やかに外反せるもの。

その他、珠洲・壺・すり鉢・瀬戸・鉄瓶瓶子胴部・瀬戸美濃・天目茶碗・卸皿・山茶碗・青磁碗・壺・白磁碗・皿、越中瀬戸・皿、瓦質土器、風炉がある。

石製品には、筋延石・砥石・石刀・凹石等がある。

金属製品には、古銭・釘・不明銅製品等がある。

(堀内)



第36図 中近世・その他製品の器種分類図 (1/6)

3 婦負における古墳出現期の土器の変遷

井田川・山田川合流域に広がる婦負平野一帯は、古墳出現期における地域的様相と社会の変遷を考える上で極めて重要な位置を占める地域である。この地域では、ここ数年の集落・墳墓の調査成果から、その豊かな地域性や他地域との交流関係が明らかとなってきたばかりでなく、古墳時代への社会の転換が早い段階に行われた、政治的にも進んだ地域であったことが判明してきている。しかし、このような古墳出現期の動態をより明確なものにするには、土器の分析による裏付けが不可欠である。そこでここでは、婦負における土器の様相と時間的推移を、先学の研究成果を基礎として概観したい。なお、今回基準資料とした遺跡は、千坊山遺跡群に含まれる10箇所の遺跡（鏡町遺跡、千坊山遺跡、南部I遺跡、富崎赤坂・難山砦遺跡、富崎墳墓群、鏡板墳墓群、六治古塚、向野塚、富崎千里古墳群、勅使塚古墳）に、富山市の杉谷A遺跡、杉谷古墳群、八尾町の翠尾I遺跡を加えた13遺跡である。

(1) 各時期の概要

変遷図（第39図～第44図）の作成に際しては、上記の遺跡の遺構一括資料ないしそれに近いものを用い、主に口縁部・脚部の形態から分類して配列した。紙幅と作成時間の都合上、かなり大雑把な分類となってしまった部分がある。また現段階では全ての時期にまとまった量の良好な資料が存在する訳ではなく、不安定要素も多い。資料の増加を待つて、今後改めて訂正・補足を行っていきたい。また今回出来なかった調整手法や容量などによる分析も今後の課題とするところである。

I期（法仏II式期）

当期は、先行する法仏I式の形式を受け継いだ在地系土器で構成される。祭式土器は、大型品が多く、スタンプ文（S字状文、鋸歯文、同心円文）や浮文、赤彩による装飾など、加飾性に富む。

變形土器（以下、「形土器」省略）は、胴部が長頸もしくは卵形であり、底部は平底となる。有段口縁壺のA・B類は短い口縁部に長い頸部をもつものが殆どで、付加状口縁となるA（B）2類も多い。A類の擬凹線の条数は少ない。受け口状口縁のB（A）6類の出土例は稀少である。くの字口縁壺のC類では、端部を面取りするC1類が多い。壺では長頸壺が多く、長頸有段となるもののうち口縁部が内済するB2類は口縁部が外側に大きく広がる。D2類は外来系の影響が窺えるものであるが、在地化している。台付装飾壺のH類は、胴部が下半部で屈曲しそろばん玉状になるものあり、大きさは様々である。長頸のH1類、有段口縁のH2類があり、32は有段口縁壺と棒状脚が結合した大型品で稀少品である。高杯は大型品が多く、杯底部が直線的になるA類と椀形を呈するB類がある。A類は口縁部が長く伸び、口縁部は内面に凸線を作り出すものや肥厚させるもの、短く外に屈曲させるものなどが見られる。B類は杯底部と口縁部の境が強く屈曲する。高杯の脚部は棒状有段となるものが多い。器台は、大型品が多く、発達した

時期区分		型式・様式	婦負	南加賀・漆町 田嶋(1986)	畿内大和 寺沢(1986)
弥生時代	後期後半	法 仏	I	2 群	VI - 3
				(+)	
	終 末	月 影 I	II - 1	3 群	庄内 0
			II - 2		
古墳時代	前期前半	月 影 II	II - 3	4 群	庄内 1
			II - 4		
		白 江	III	5 群	庄内 2
				6 群	庄内 3
		古府クルビ	IV	7 群 8 群	布留 0
		高 岛	V		
				9 群	布留 1

表2 変遷案と関連編年の対応の目安

受部に対して脚柱部は細い。有段口縁のA類と、受部底から外反して伸び口縁端部を強く面取りもしくは付加状口縁とするC類がある。A類は脚部も有段となる。蓋は通気孔のあるA類と頂部が窪むC類がある。鉢には有段口縁のA類の大型品がある。

Ⅱ期（月影式期）

当期は、前期に引き継ぎ土器組成は基本的に在来の形式で構成するが、Ⅰ期の加飾性は衰退する。以下、Ⅱ期を4段階（Ⅱ-1・2期は月影Ⅰ式期、Ⅱ-3・4期は月影Ⅱ式期）に分けて記述する。

壺は、胴部が卵形となり尖り気味の底部をもつ。有段口縁のA・B類は、Ⅱ-1・2期には頸部が引き継ぎやや長めではあるが、口縁部が伸長し始め付加状口縁は無くなる。また、段の屈曲が強くなり、直立もしくは外傾するものが多くなる。A類では擬凹線の条数が増える。B5類では口縁部断面が三角形になるものが一定量含まれる。Ⅱ-3・4期には、頸部は短くなり口縁部を外傾・外反させるようになる。また、段の屈曲が緩やかになり、口縁下端外面を肥厚させる程度のA（B）4類、A（B）5類が出現する。外来系の影響が推定されるものにⅡ-1・2期の近江・東海系の受け口状口縁のB6類があるが、出土例は稀少である。くの字口縁のC類は、Ⅰ期と変わらず端部を面取りするC1類が多い。壺は時期が下るにつれ長頸壺が減少し、短頸有段壺のC類の割合が増えて様々な形態のものが出現在する。D2類は外来系の影響が窺えるものであるが、在地化している。くの字口縁のE類の出土量は少ない。台付装飾壺のH類は小型化し、時期が下るにつれ胴部が丸くなり、定型化していく。高杯と器台は、時代が下るにつれ小型化する。高杯のA類は、Ⅱ-2・3期で底部が一旦小さくなる。Ⅱ-4期には底部は再度大きくなっている、口縁部がやや短くなり立ち気味になる。Ⅰ期からの口縁端部内面を肥厚させるものはⅡ-3期まで見られる。B類は、Ⅱ-1期で底部が一旦大きくなり、Ⅱ-2・3期では再度小さくなり、Ⅱ-4期には口縁部がやや短くなり立ち気味となる。椀形を呈するE類は、量は少ないがⅡ期を通して存在する。高杯の脚部は、Ⅱ-1・2期は棒状有段となるものと裾部途中で強く屈曲して直線的に聞くものが一定量を占めたが、時期が下るにつれ裾部途中から緩やかに外反するものとなる。器台は、有段口縁のA類は口縁部外面が無文化し、Ⅱ-3期には底部が内湾気味になる深い杯部のものが出現在する。A類の脚部は、段の無いものが殆どとなる。C類は殆ど無くなり、Ⅱ-3期には小型のB類、D1類が出現する。蓋は、Ⅱ-1・2期はⅠ期からのA類とC類が継続するが、Ⅱ-3・4期には摘み頂部が平坦なB類と小型で内面に垂下する返しが付くD類に入れ替わる。

Ⅲ期（白江式期）

当期には、祭式土器を中心として外来系（特に東海系）の影響を受けた土器（東海系のパレススタイル壺・小型器台・高杯、畿内系の二重口縁壺・直口壺、山陰系の壺・壺）が波及する。ただし、それらには在地化したものも多く、全体的には依然として在地性が強い。

壺は、胴部が卵形もしくは球卵状となり肩部の張りは弱くなる。底部は尖る。有段口縁壺のA・B類は、口縁部の外傾・外反が強くなり、A（B）4類、A（B）5類の割合が高くなる。B4には肩部外面を叩き調整する畿内系の影響を受けた壺（222）も僅かに存在する。また、山陰系の影響が推測されるものとして口縁下端を外側に突出させるB7があるが、出土例は稀少である。くの字口縁壺のC類は、口縁端部を丸く仕上げるC2類が増加し、口縁部が外反して伸びるものが多くなる。壺では、長頸壺が更に減少し、長頸広口壺のA1類は消滅する。残ったものも頸部が短かめになるなどの退化が進み、頸部が内傾するB4類も見られる。短頸有段壺のC類は依然として様々な形態のものがあるが、全体に口縁部の外傾・外反が強くなる。外来系の影響が窺えるものでは、畿内系の二重口縁壺の影響が推測されるD1類、東海系パレススタイル壺の影響が推定されるD2類、山陰系の影響が推測されるD3類、畿内系の直口壺であるJ類が出現するが、在地化したものも多い。くの字口縁のE類は増加する。台付装飾壺のH類は、前期の定型化した小型装飾壺が退化・消滅する。高杯は更に小型化が進み、A類、B類共に口縁部が更に短かめに立つよ

うになる。その他、口縁部が長く直立気味に伸びる、器高の深いC類が出現する。外來系と在地系の折衷型であるF類では、C類の杯部と東海系の脚部が結合したF1類がある。外來系の影響が窺えるものでは、東海（もしくは畿内）系のG類が出現する。高杯の脚部は、前期からの裾部途中から緩やかに外反するものが継続する他、裾部で外反するものの、東海系のものなどがある。器台は、有段口縁のA類が激減し、小型の器台に転換する。特に、小型器台もしくはその影響を受けたと考えられるD2類が出現し、増加する。蓋は、前期からのB類、D類が継続する。

V期（古府クルビ式期）

当期には、外來系土器は畿内系が強くなる。ただし布留系壺は受容しない。在地系土器は、祭式土器を中心にやや衰退傾向にあるものの、依然としてその比率は高い。

壺は、有段口縁壺のA・B類が衰退し、特に有文のA類は殆ど無くなる。無文のB類は段を僅かに残す程度のもののが存在する他、北近江系の長浜壺と考えられるB8類（271）が僅かに見られる。くの字口縁のC類は、口縁端部を丸く仕上げるC2類が多くを占め、口縁部が外反して伸びるもの他、外傾する口縁部の端部が若干内湾気味となり球脣状となる畿内系の影響が推測されるもの（276）が僅かに見られる。壺は、長頸壺が消滅し、短頸有段壺のC類の口縁部は更に外反が強くなる。外來系の影響が窺えるものでは、畿内系の二重口縁壺の影響が推定されるD1類、山陰系の影響が推定される大型のD3類、畿内系の直口壺のJ類がある。台付裝飾壺のH類は、II期で定型化したものとは形態が異なる小型品（285、286）が僅かに見られる。高杯は前期から継続するC類、B1類があり、器高が深くなる傾向がある。外來系の影響が窺えるものでは、東海・畿内系のG類の他、畿内系のH類が出現する。器台は、小型器台のD2類が多い。裝飾器台のE類では、脚部が小型器台脚部に類似し、装飾性が退化したもの（298）が1点のみ見られる。蓋は、前期からのB類、D類が継続し、B類は摘みが高さのある逆台形となるものが多くなる。

V期（高畠式期）

当期の資料として確認しているのは南部I遺跡SI01出土土器のみである。当期には、土器の形態が齊一化される。前期に引き続き、外來系土器は畿内系を中心として見られるが、布留系壺は受容しない。

壺は、有段口縁壺がほぼ消滅し、くの字口縁壺で占められるようになる。C2類は胴部が倒卵形もしくは球状となり、丸底で、強く屈曲して外反する口縁部が付く。この形態に布留系壺の影響が若干窺えるか。壺では、強く外反する短頸有段壺C類と、畿内系の直口壺であるJ類が見られる。また、小型壺型土器のI類が出現する。高杯は前期から継続する畿内系のH類と、在地系の杯部と畿内系の脚部が結合したF2類が見られる。

(2) 数量分析

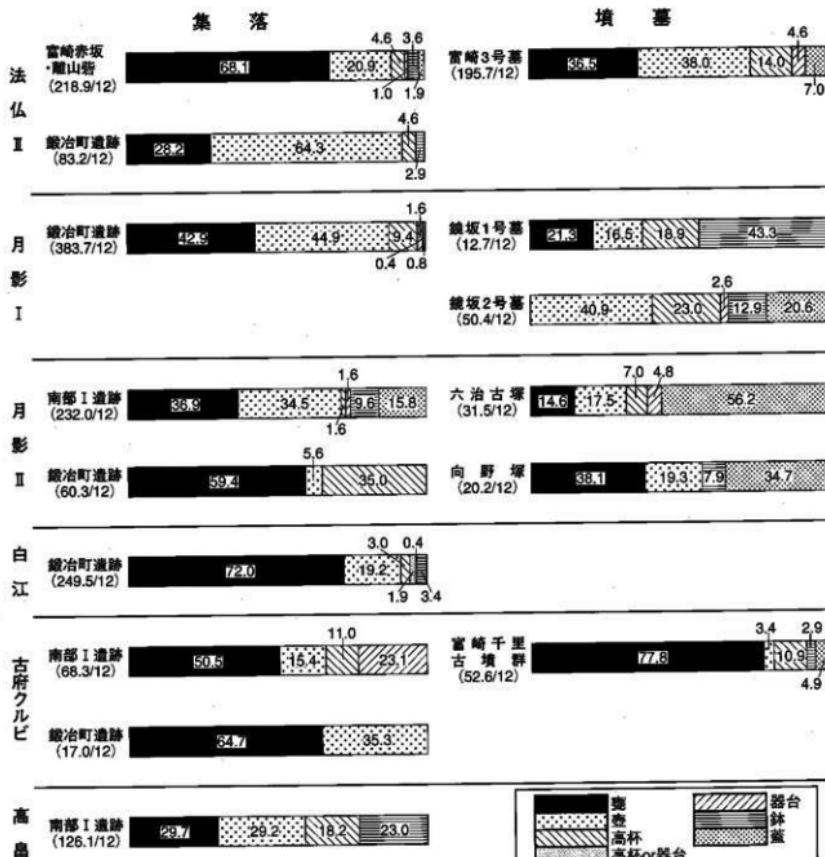
ここでは、婦負における遺跡別の器種構成比率と壺の口縁部形態類別構成比率を時期別に算出し、推移を追った。対象とした遺跡は、集落では銀治町遺跡、南部I遺跡、富崎赤坂・離山砦遺跡、墳丘墓・古墳では富崎墳墓群、鏡坂墳墓群、六治古塚、向野塚、富崎千里古墳群である。土器の出土量は、口縁部計測法によって算出した（宇野1992）。ただし、個体識別法を併用していない為、実際の出土量が数値に反映されていない面があることを断っておきたい。

① 遺跡別器種構成比率（第37回）

これについては、先学によって、越中では法仏式期から古府クルビ式期にかけて壺が時期を下るにつれ漸的に増加し、それと相反して壺が減少する傾向があることが指摘されていた（稚石1997）。今回の分析は、データ量の不足や遺跡・遺構の性格差などによってやや不安定な面はあるものの、ほぼ同様の傾向が得られた。集落では遺跡の性格上当然壺が多いが、法仏II式期には壺の比率が壺を上回る遺跡が存在し、その後は徐々に壺が比率を減らして月影II式期で壺と壺がほぼ同量となる。法仏II式期から月影II式期に至るまでは、北陸東部の他遺跡と比べると、壺の比率がやや高い印象がある。次の白江式期では壺の比率が激減し、反対に壺が激増する。高畠式期には再度、壺と壺が同量となり、高杯と鉢の比率が急増する。上記の変化に当てはまらない特異な構成比率となるものについては、データ

に使用した土器数が少ないことが第一の原因として挙げられるが、なかには遺跡や遺構の性格に起因すると推測されるものもある。例えば法仏式期（月影I式期も含む）の高地性集落である富崎赤坂・離山砦遺跡は壺が主体となる構成であり、また、月影II式期の鍛冶町遺跡はSI908出土土器のデータを使用しているが、壺が極端に少なく高杯が非常に多い特徴がある。古府クルビ式期の南部I遺跡は溝祭祀が推測されるSD02出土土器のデータを使用しているが、高杯と器台が34.1%と高い比率を占めている。

一方、墳墓では、高杯を始めとした祭式土器の占める比率が高い。富崎3号墓以外は出土量が少ない為不安定なデータではあるが、壺と壺の比率については集落とほぼ同様の変化を示すようである。ただ、古府クルビ式期の富崎千里古墳群については、特に土器出土量が少なく傾向が捉えにくい。グラフでは壺が多用されるように見えるが、実際は口縁部が残存しない壺も一定量存在し、器台も存在する。同時期の首長墓である勤使塚古墳では壺・高杯を多用しており、首長墓クラスの古墳との階層差を含めて、今後改めて検討を深めていく必要がある。



*出土量の算出は口縁部計測法による(宇野1988,1992)

第37図 遺跡別器種構成比率

② 齊口縁部形態類別構成比率（第38図）

北陸東部における臺の口縁部形態の時間的な変化については、先の研究成果により、法仏式期は有段口縁壺とくの字口縁壺がほぼ同じ比率で、月影I式期には有段口縁壺がかなり優位に立つようになり、月影II式期には有段口縁壺が優位に立ちながらも徐々にその比率を減らし始め、古府クルビ式期にはくの字口縁壺による北陸東部特有の組成が形成されることが指摘されてきた（小田木1989）。一方、婦負地域では、概ねこれと同様の変遷を辿るもの、法仏II式期には既に有段口縁壺が68%と完全に優位に立っている。更に月影I式期になると有段口縁壺は90.5%を占め、月影II式期にはほぼ全てとなり、白江式期では比率は減るもの依然として60.7%を占めている。この比率が逆転するのは古府クルビ式期になってからであり、この時期にはくの字口縁壺が66%に急増する。有段口縁壺が殆ど無くなるのは高畠式期まで下る。これらのことから北陸東部でも婦負は、有段口縁壺が長期に渡って優位に立ち、くの字口縁壺への転換時期が遅いという地域性があることが推察される。有段口縁壺における有文口縁の比率については、法仏II式期は18.4%と低いが、月影I式期には29.3%と増加し、有段口縁壺が最も多くなる月影II式期にピークを迎え、34.2%を占める。白江式期になると19.3%に減少し、古府クルビ式期には1.8%と殆ど無くなり、高畠式期には完全に消滅する。

（3）まとめ

以上が、婦負における古墳出現期の土器の変遷である。墳墓に見られる特徴も含めて考えると、婦負は北陸東部でも特に強い地域性をもち、他地域の文化を取り入れながらもその豊かな地域性を長く保持し続けた地域であったといえる。最後に、集落と墳墓の動向を含めた婦負の変遷の概略を記述し、まとめに変える。

弥生時代後期後半（法仏II式期）

出現期。高地性集落を含む集落が2箇所に出現する。周溝墓的な四隅掘り残しタイプの四隅突出型墳丘墓が1基築造され、これ以降、同形態の墓を特定個人墓として築く墓制が成立する。この墳丘墓の受容形態は、他地域の墓制を固有のものに消化してから伝統的墓制の素地の上に取り入れたものと考えられ、婦負独特の地域性や他地域との交流の在り方を示している。先行する在来の形式を受け継いだ土器の様相もこれと合致するものである。

弥生時代終末期（月影I・II式期）

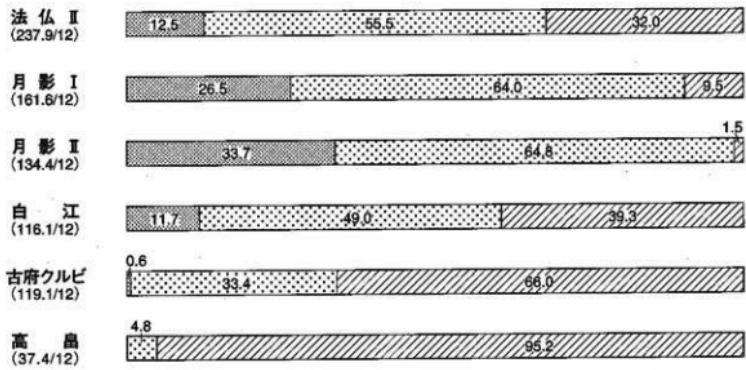
成立・発展期。集落は少なくとも6箇所に存在し、相互に等質的な農業共同体が成立する。四隅突出型墳丘墓は、前期からの四隅掘り残しタイプ1基と突出部が極端に肥大化した「千坊山型」ともいえる形態のもの4基が築造され、婦負で共通した墓制がとられる。また、月影II式期には県内最古の前方後方形墳丘墓が築造される。土器は前期に引き続き、強い在地性をもつものである。なお、四隅突出型墳丘墓は次の白江式期に1基が造られて以後、消滅する。

古墳時代初頭（白江式期・古府クルビ式期）

流動・再編期（最盛期）。大きな地域社会の変動が起り、急速に地域の統合が進んで集落が再編される。広域な範囲を取り込んだ重層的な階層性が生じ、それに応じて墳丘の形態や規模が複雑に序列化する。その中で、首長墓として卓越した規模の前方後方墳を県内で初めて導入しており、遅く大和を頂点とした汎日本の政治秩序に参入していくことが推測される。しかしその反面、古墳には葺き石や埴輪を受容しないなどの地域性がある。土器についても、祭式土器を中心とする外来系土器を受容し、古墳時代の土器様相への変化が始まる反面、依然として在地系土器も多く残り（祭式土器においても白江式期には多くは在地系で、古府クルビ式期にならぬ並存する）、地域性が維持される。古墳や土器に見られる選択的な受容形態から、一定の独自性、自立性を持った在地勢力の存在が想定できよう。

古墳時代前期前半（高畠式期）

衰退期。集落が激減し、古墳の有無も不明である。土器は齊一化され、畿内の影響を強く受ける（特に祭式土器は全て畿内系となる）。ただし、依然として布留系壺は普及しない。在地勢力が衰弱し、地域性が希薄化する。（大野）



第38図 夷口縁部形態類別構成比率
※出土量の算出は口縁部計測法による(宇野1988,1992)

時期	基準資料
I	銀治町遺跡A区SK130 (6, 25)、銀治町遺跡A区SD145 (15)、銀治町遺跡A区包含層 (45)、銀治町遺跡C区SK816 (9, 22, 23, 35, 38, 39, 46)、銀治町遺跡C区下層包含層 (2, 31)、銀治町遺跡C区排水溝 (42)、難山砦遺跡 (13, 20, 21, 48)、富崎赤坂遺跡 (7, 11, 16, 18, 37, 49, 51)、富崎3号墓 (1, 3, 4, 5, 8, 10, 12, 14, 17, 19, 24, 26, 27, 28, 29, 30, 32, 33, 34, 36, 40, 41, 44, 50, 43, 47)
II-1	銀治町遺跡A区SK60 (54, 67, 71, 78, 84)、銀治町遺跡A区SK108 (55, 57, 62, 63, 64, 66, 69, 68, 73, 74, 79, 81)、銀治町遺跡A区包含層 (80)、銀治町遺跡C区下層包含層 (53)、鏡坂1号墓 (52, 56, 72, 75, 77, 82)、南部I遺跡SK08 (H 11) (58, 59, 61, 65, 70, 83, 85)、南部I遺跡試掘CT12 (76)、南部I遺跡試掘CT27 (60)
II-2	銀治町遺跡A区SI15 (86, 88, 89, 91, 93, 94, 95, 96, 98, 100, 101, 103, 107, 114, 115, 119)、銀治町遺跡A区SK120 (87, 90, 92, 97, 99, 104, 109, 110, 112, 113)、鏡板2号墓 (102, 105, 106, 108, 111, 116, 117, 118)
II-3	T坊山遺跡SI04・11 (150, 156, 157, 158, 164, 168, 174, 175)、南部I遺跡SI01 (H 8) (120, 124, 125, 126, 128, 130, 131, 132, 134, 135, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 149, 151, 152, 153, 154, 155, 159, 166, 171, 172, 173, 178, 179, 183, 184, 186, 187, 188, 189, 190)、南部I遺跡試掘BT64 (121, 127, 146, 148, 165, 169, 182, 185)、六治古塚 (123, 133, 160, 161, 162, 163, 176, 177, 180, 181)
II-4	銀治町遺跡B区SI908 (122, 129, 136, 147, 167, 170, 191)、翠尾I遺跡 (199, 202, 203, 209)、向野塚 (193, 194, 195, 196, 197, 212)、杉谷A遺跡 (192, 198, 200, 201, 204, 205, 206, 207, 208, 210, 211, 213)
III	銀治町遺跡B区SI745 (214, 217, 219, 221, 222, 224, 226, 228, 229, 231, 233, 238, 239, 244, 255, 256, 261, 265, 266, 268, 269)、銀治町遺跡B区SI746 (220, 262)、銀治町遺跡C区上層包含層 (232, 242, 258, 259, 260, 263)、銀治町遺跡D区SD275 (241)、銀治町遺跡D区SD277 (215, 216, 225, 227, 234, 236, 237, 240, 249)、銀治町遺跡E区包含層 (245)、南部I遺跡試掘AT12 (254)、南部I遺跡試掘AT19 (253)、南部I遺跡試掘BT26 (246)、南部I遺跡試掘CT6 (223, 230, 248, 250, 257, 264, 267)、翠尾I遺跡 (243, 247, 251)、杉谷4号墳 (218, 235, 252)
IV	銀治町遺跡A区SK48 (276)、南部I遺跡SD02 (H 8) (270, 272, 273, 274, 275, 279, 281, 283, 287, 296, 298, 299, 300, 305, 308, 309)、南部I遺跡試掘BT29 (294, 303)、富崎千里4号墳 (288, 297)、富崎千里6号墳 (292, 307)、富崎千里9号墳 (285, 286, 282, 293, 304)、富崎千里10号墳 (284)、富崎千里16号墳 (278, 302)、富崎千里17号墳 (271)、慈使塚古墳 (277, 280, 289, 290, 291, 295, 306)
V	南部I遺跡SI01 (H 11) (310, 311, 312, 313, 315, 316, 317, 318, 319, 320, 321, 322, 323)、南部I遺跡BT89 (314)

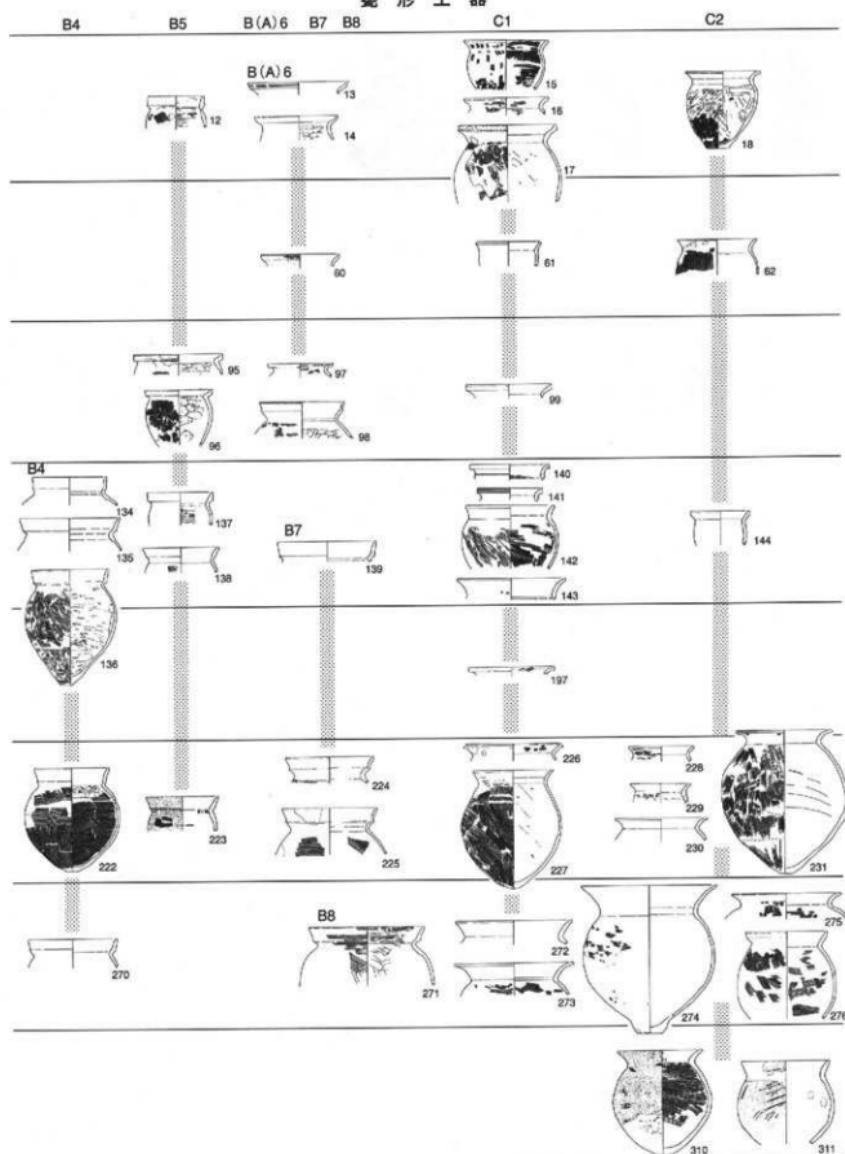
表3 夷口縁部形態類別構成比率

	A1	A3	A(B)2	A4	A5	B1	B3a	B3b
I								
II-1								
II-2								
II-3								
II-4								
III								
IV								
V								

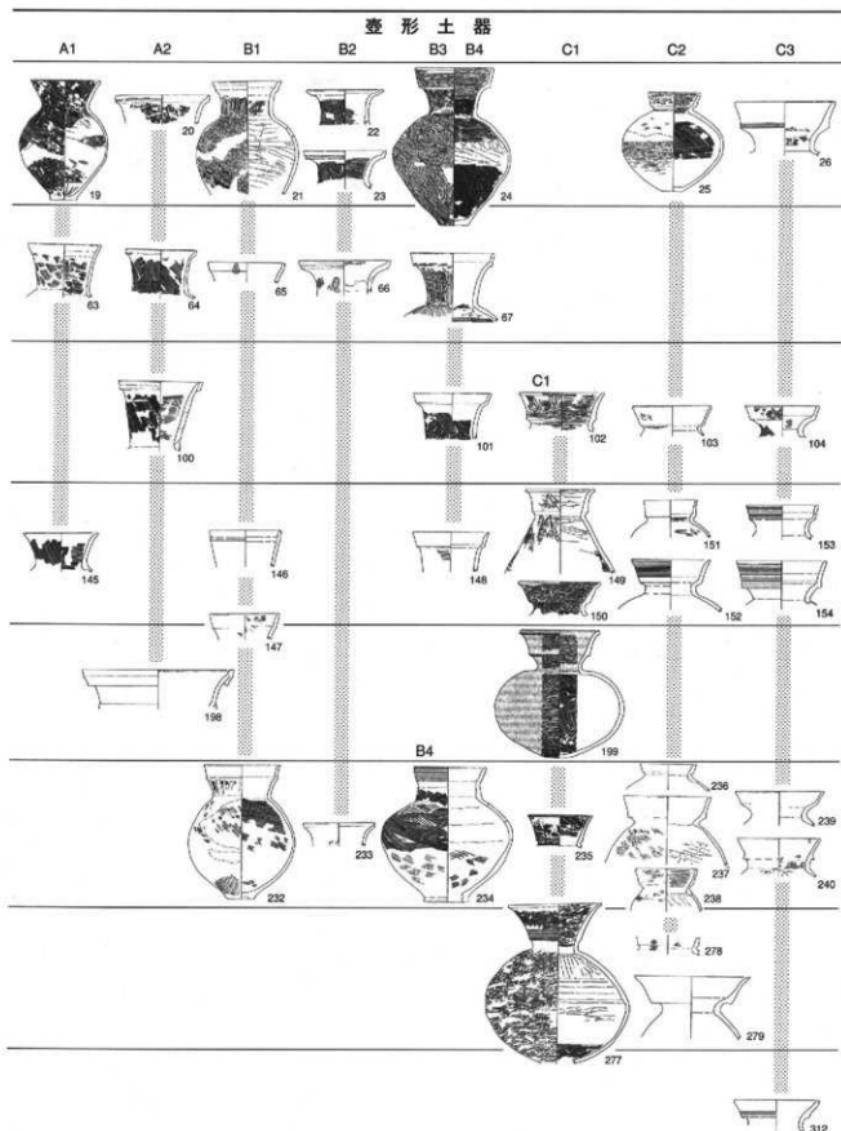
第39図 妻負における古墳出現期の土器変遷案(1)

S=1/10

變形土器

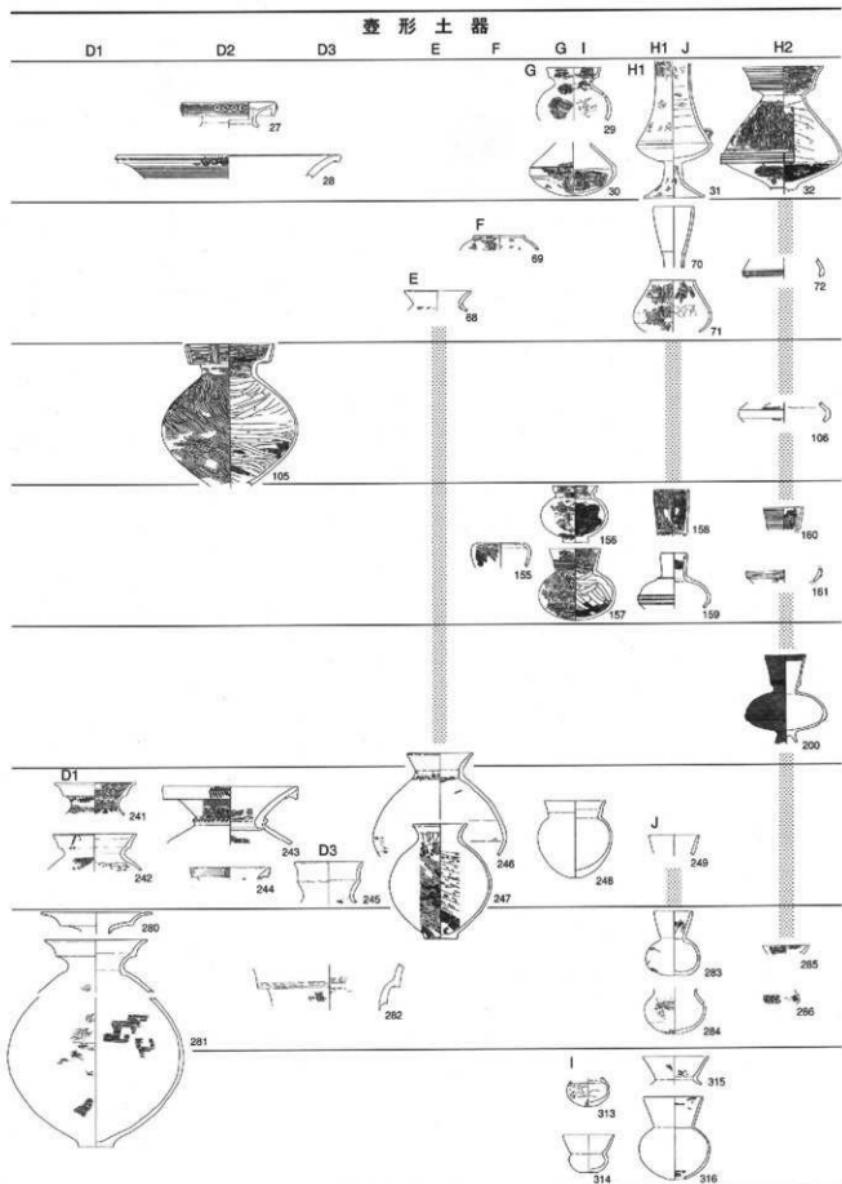


第40図 婦負における古墳出現期の土器変遷素(2)



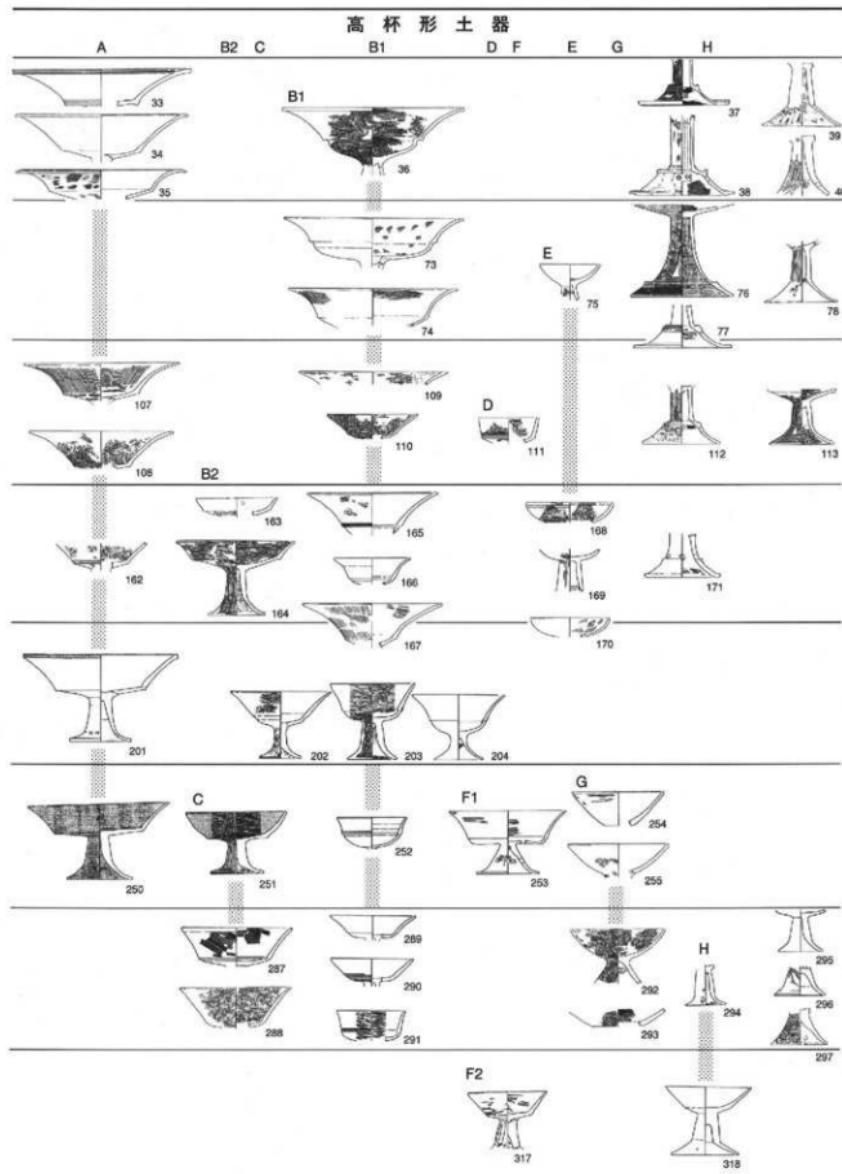
第41図 婦負における古墳出現期の土器変遷案(3)

S=1/10



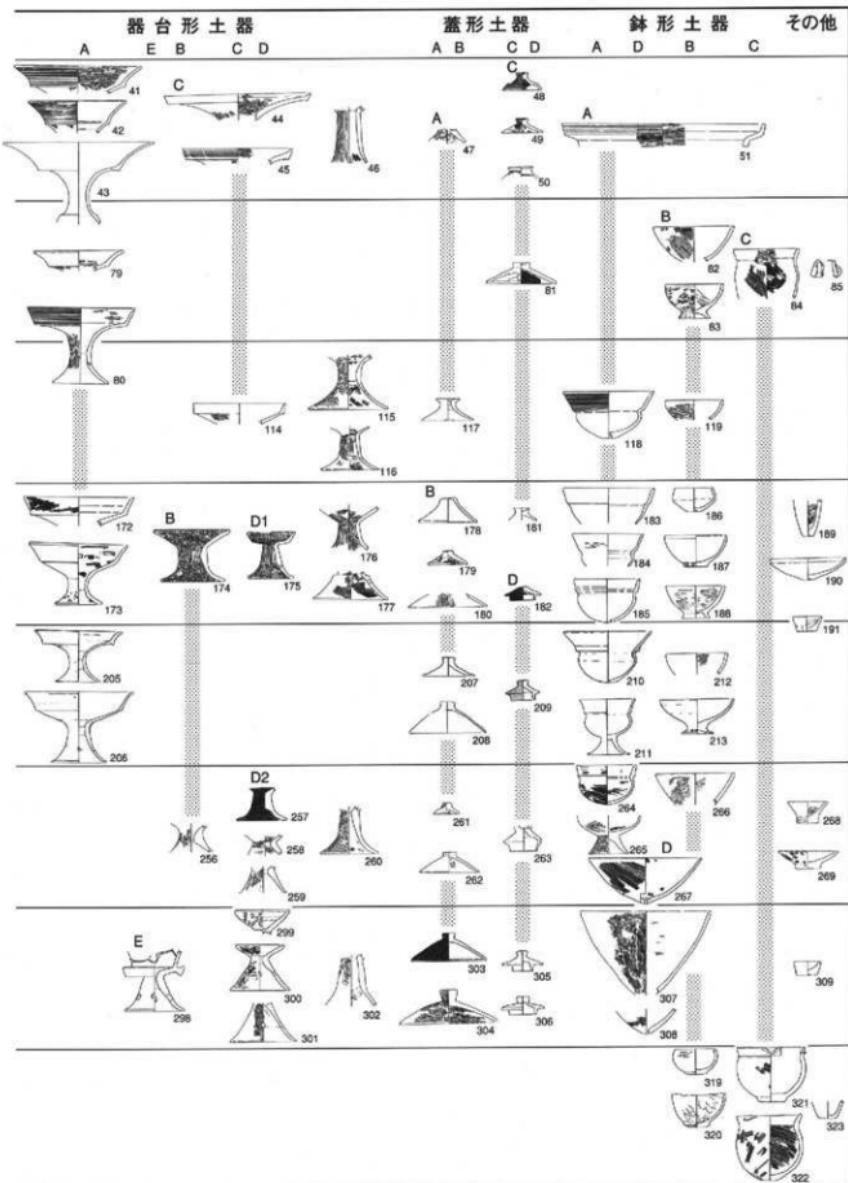
第42図 妻負における古墳出現期の土器変遷図(4)

S=1/10



第43図 妻負における古墳出現期の土器変遷図(5)

S=1/10



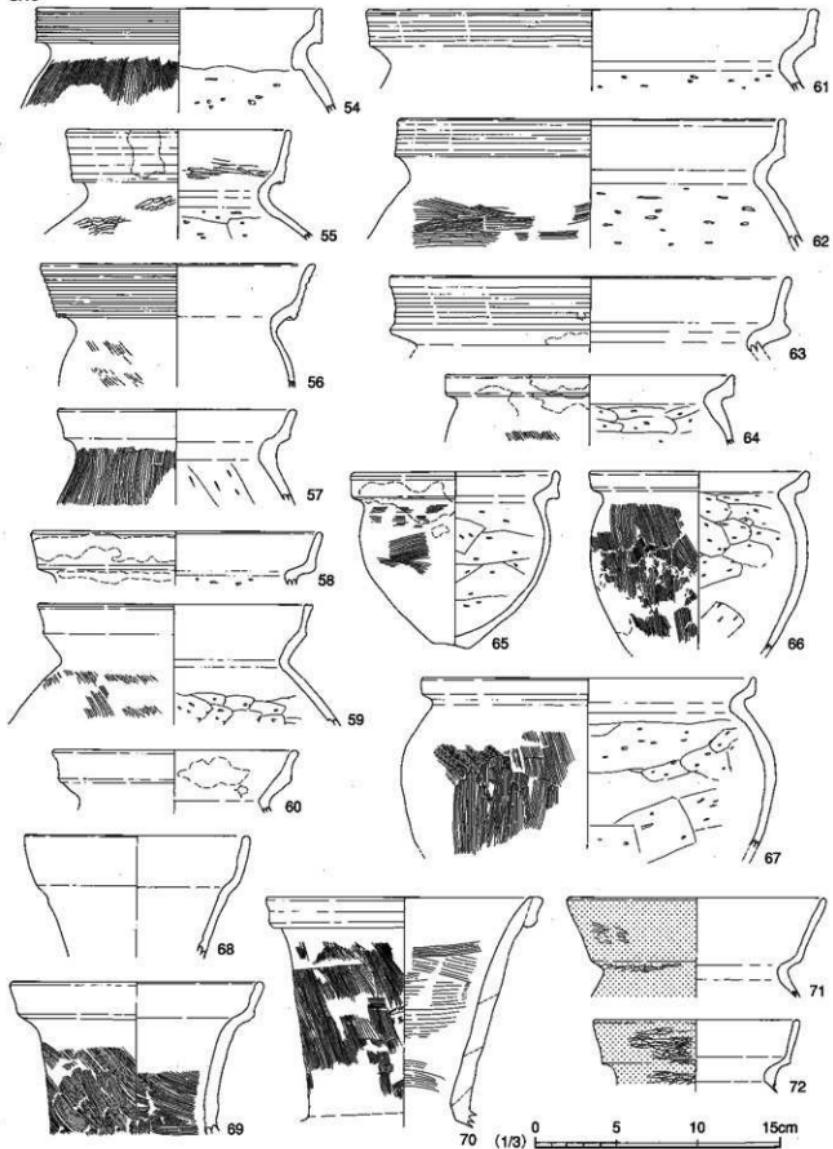
第44図 妻負における古墳出現期の土器変遷案(6)

参考文献

- あ 石川県立埋蔵文化財センター1986「漆町遺跡Ⅰ」
石川考古学研究会シンポジウム実行委員会1986「シンポジウム「月影式土器」について 報告編」
内田亞紀子1997「越中における古代土師器の編年予察」「埋蔵文化財調査概要一平成8年度一」財団法人富山県
文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
内田亞紀子2000「越中婦負郡の古代土師器煮炊具一婦中町中名Ⅰ・V・VI遺跡の竪穴住居出土資料を中心にして」
『富山考古学研究』第3号
内田亞紀子2002「富山県の黒色土器—6~8世紀の県内資料を中心にして」『富山考古学研究』第5号
宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会1988「越中瀬戸—発祥四百年記念誌一」
岡本淳一郎他1999「佐野台地における古墳出現期の土器について」『富山考古学研究』第2号
小沢国夜史2003「富崎城を中心とした城のうつり変わりにみる婦中町の戦国時代」婦中町教育委員会生涯学習フ
ェスティバル文化財ミニ講座レジメ
小田木治太郎1989「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ 石川考古学研究会々誌』
第32号 石川考古学研究会
か 上市町教育委員会1984「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編一」
上市町教育委員会1984「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・総括編一」
金沢市教育委員会1995「石川県金沢市上荒屋遺跡Ⅰ」
金沢市・金沢市教育委員会1996「西念・南新保遺跡Ⅳ」
金沢市埋蔵文化財センター1999「戸戸遺跡群Ⅰ戸戸ホコダ遺跡」
河合忍・稻石純子1997「IV考察—翠尾Ⅰ遺跡出土の弥生土器について」『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書1』八尾
町教育委員会
木田清1998「法仏式土器の認識と再確認」『石川考古学研究会々誌』第41号 石川考古学研究会
小杉町教育委員会1999「HS-04遺跡発掘調査報告」
さ 財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所1994「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺構編)」
財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所1994「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」
財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所1998「五社遺跡発掘調査報告」
財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所1999「富山県指定史跡勅使塚古墳発掘調査レポート」
財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所2002「清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡発掘調査報
告」
財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所2002「石名田木舟遺跡発掘調査報告」
酒井重洋 1997「中世土器の分類について—清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡から—」『埋蔵文化財調
査概要一平成8年度一』財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
た 富山考古学会1999「富山考古学会創立50周年記念シンポジウム 富山平野の出現期古墳(発表要旨・資料集)」
富山市教育委員会1974「富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書」
富山市教育委員会1975「富山市杉谷(A・G・H)遺跡発掘調査報告」
富山県教育委員会1986「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群 第8次緊急調査概要 小杉丸山遺
跡一」
富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会1992「大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(2)一布目沢北遺跡
第3次調査一」
富山大学人文学部考古学研究室1990「越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告—北陸の前方後円・後方墳の一考察」

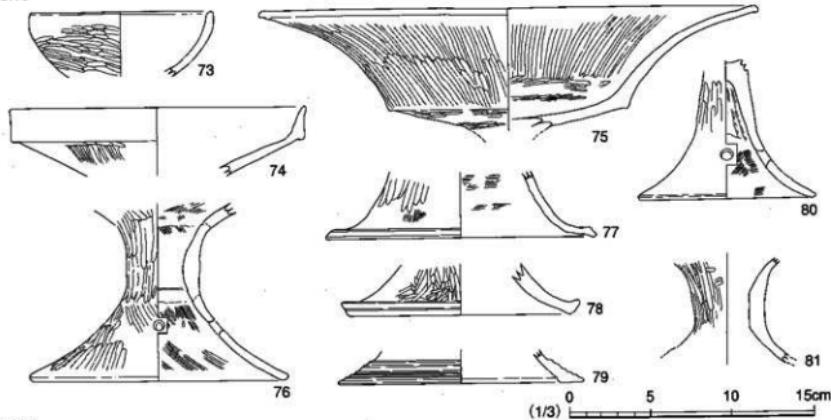
- は 婦中町1967「婦中町史」
婦中町1997「婦中町史」
婦中町教育委員会1995「千坊山遺跡（1）」
婦中町教育委員会1996「千坊山遺跡（2）」
婦中町教育委員会1998「千坊山遺跡（3）」
婦中町教育委員会1998「富山県婦中町南部Ⅰ遺跡発掘調査報告」
婦中町教育委員会2000「富山県婦中町南部Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ」
婦中町教育委員会2000「富山県婦中町菅庭手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財試掘調査報告書—婦中南部地区・千里地区」
婦中町教育委員会2002「富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書」
北陸中世土器研究会1997「中近世の北陸—考古学が語る社会史」
ま 町田尚美2002「富山県出土の中世後期瓦質土器」「富山考古学研究」第5号
宮田進一1988「越中瀬戸の窯資料（1）」「大境」第12号富山考古学会
や 谷内尾晋司1983「北加賀における古墳出現期の土器について」「北陸の考古学 石川考古学研究会々誌 第26号」
八尾町教育委員会1997「梨尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書1」
雄山閣1996「日本土器事典」
吉岡康暢1989「珠洲の名陶」珠洲市立珠洲焼資料館
吉岡康暢1991「日本海域の土器・陶磁 [古代編]」六興出版

St15

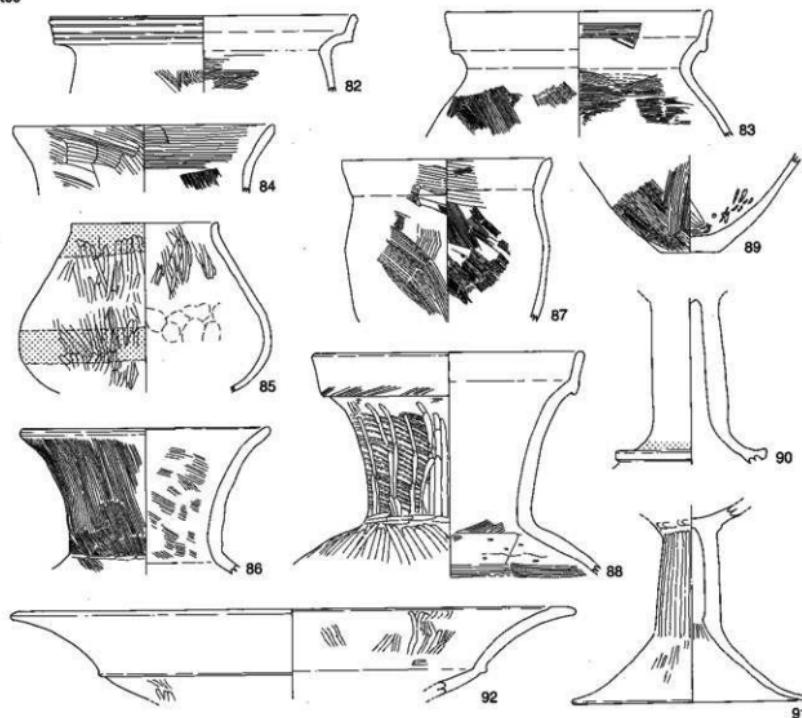


第45図 A区出土遺物(1/3)

SI15

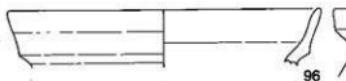
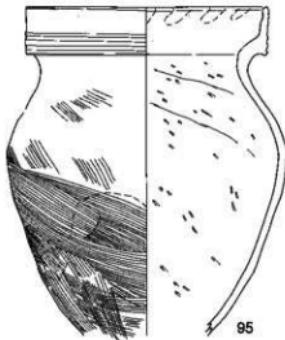
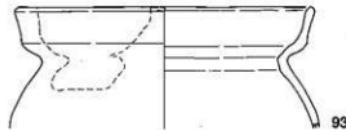


SK60

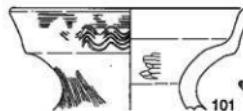
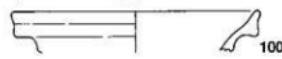
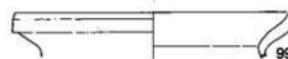


第46図 A区出土遺物(1/3)

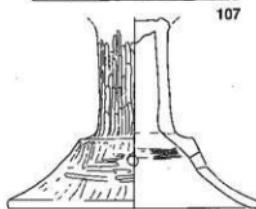
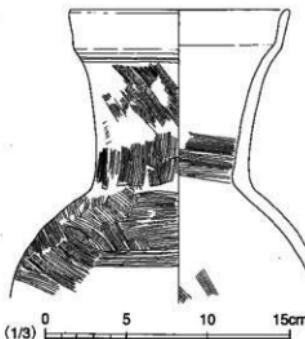
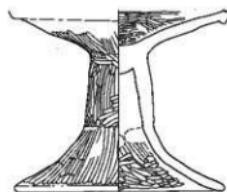
SK120



98



103



(1/3)

0 5 10 15cm

SD119



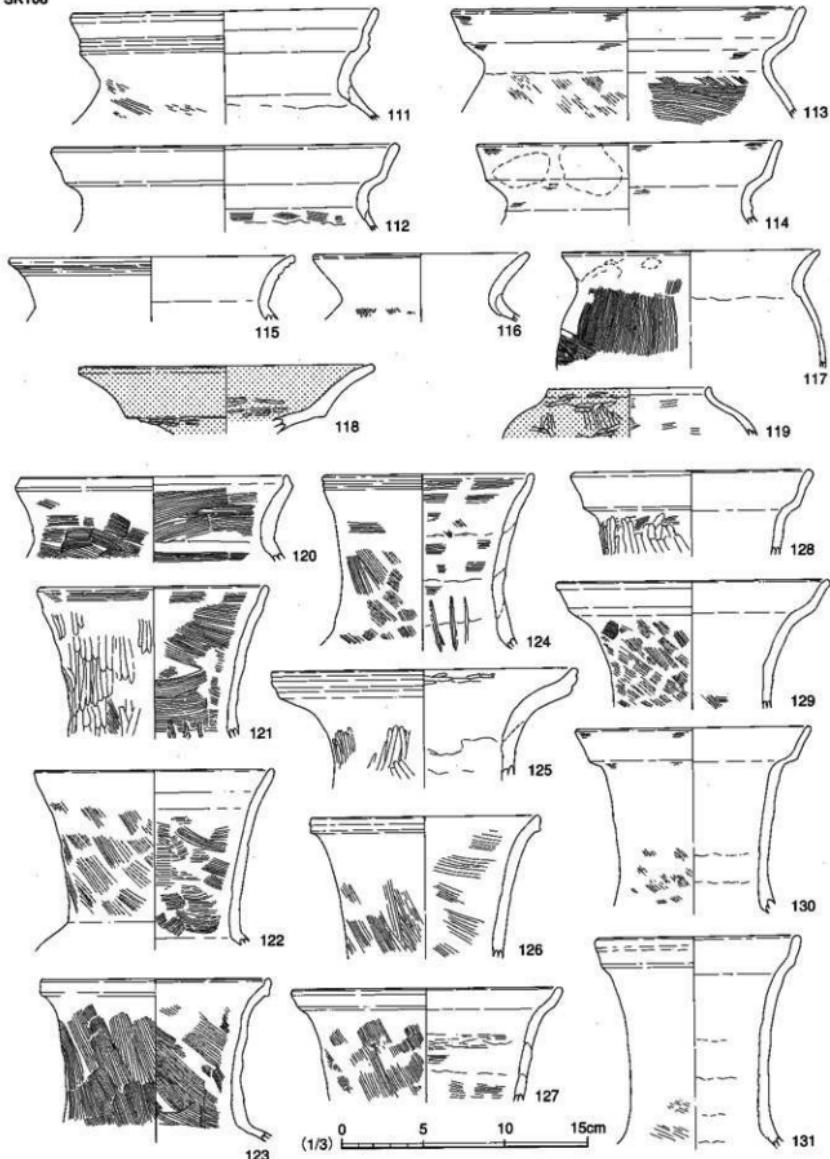
106

SK07

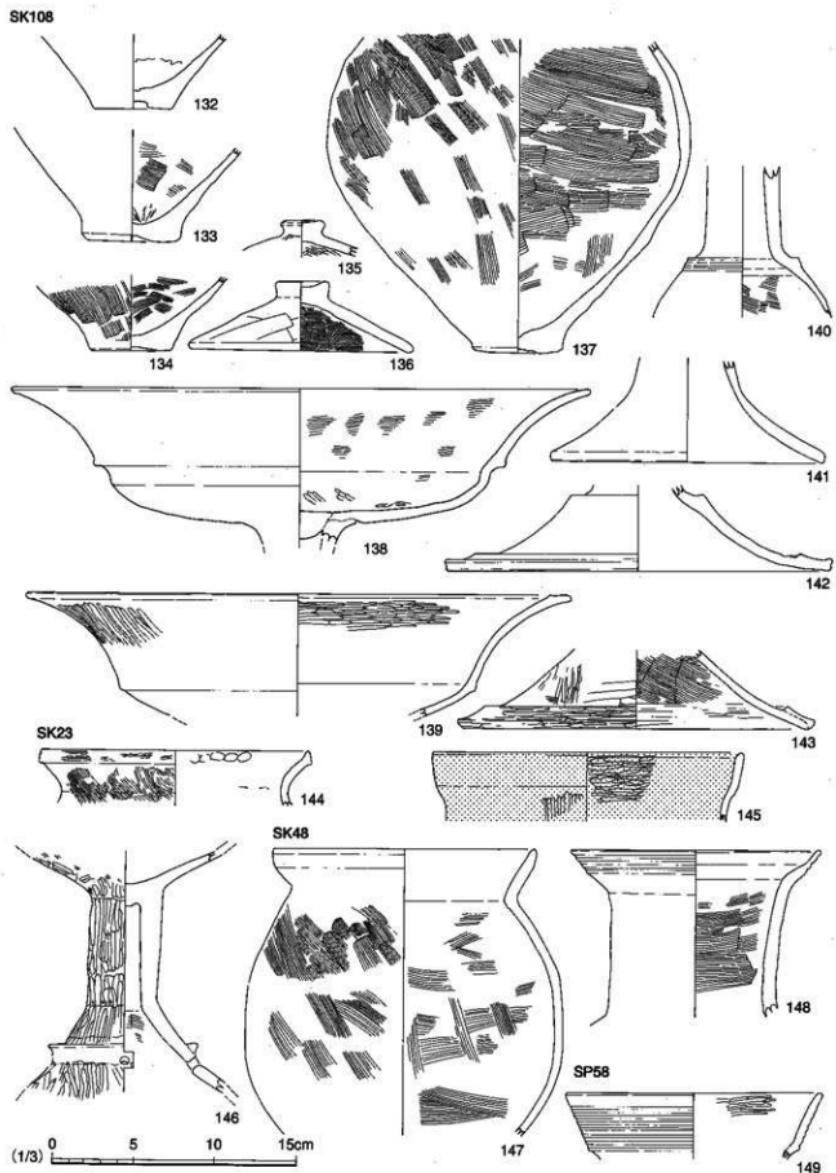


第47図 A区出土遺物(1/3)

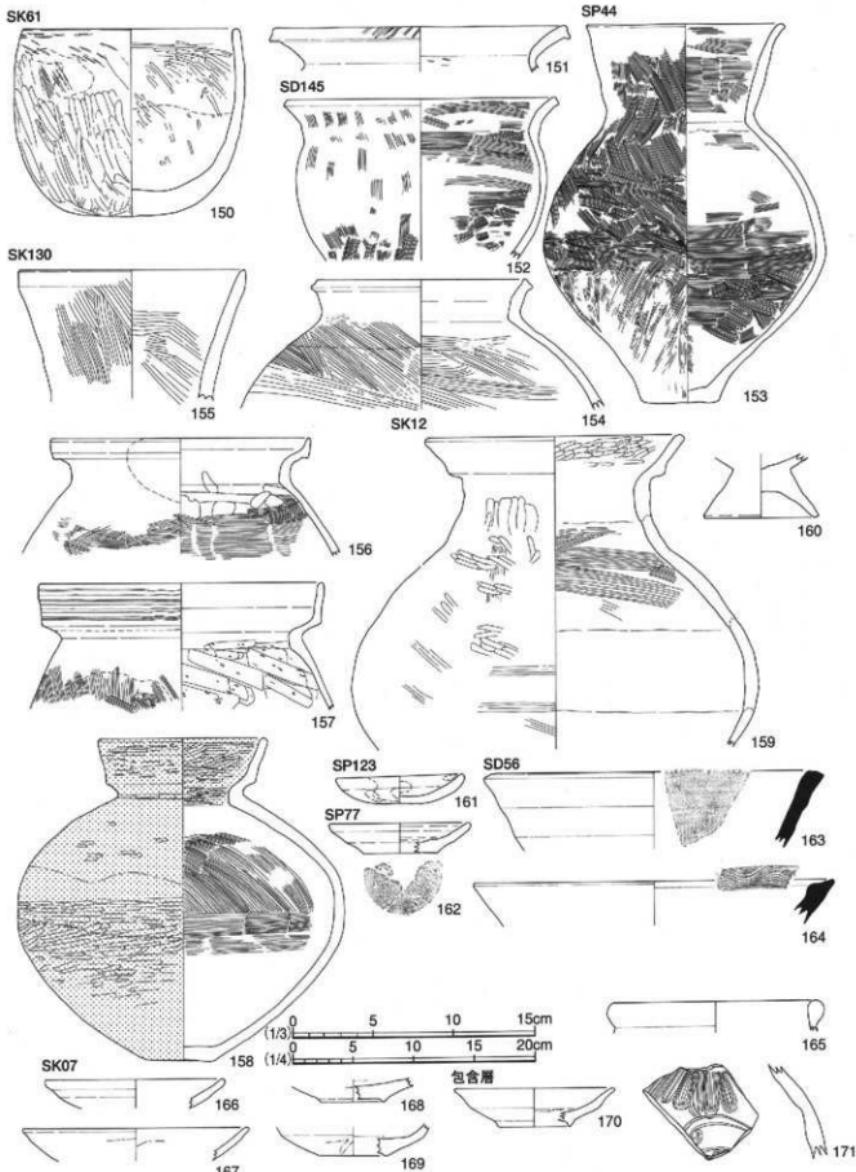
SK108



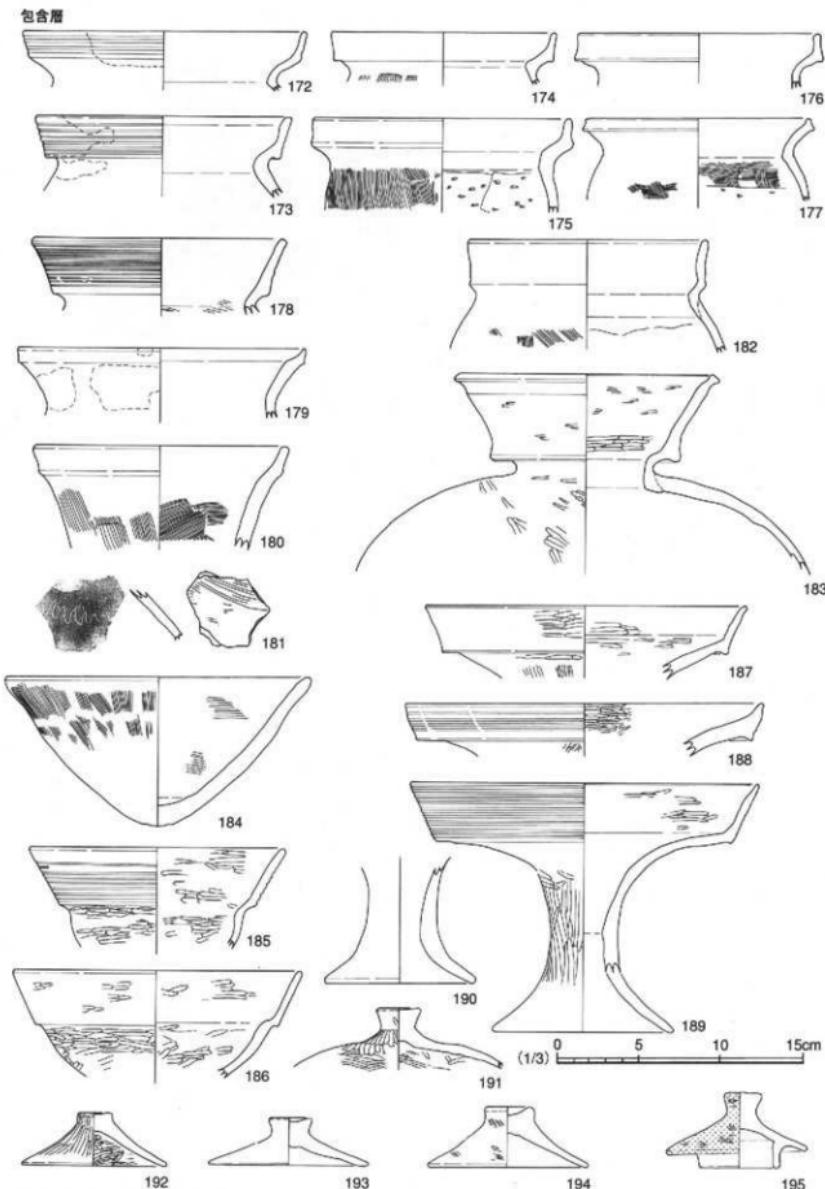
第48図 A区出土遺物(1/3)



第49図 A区出土遺物(1/3)

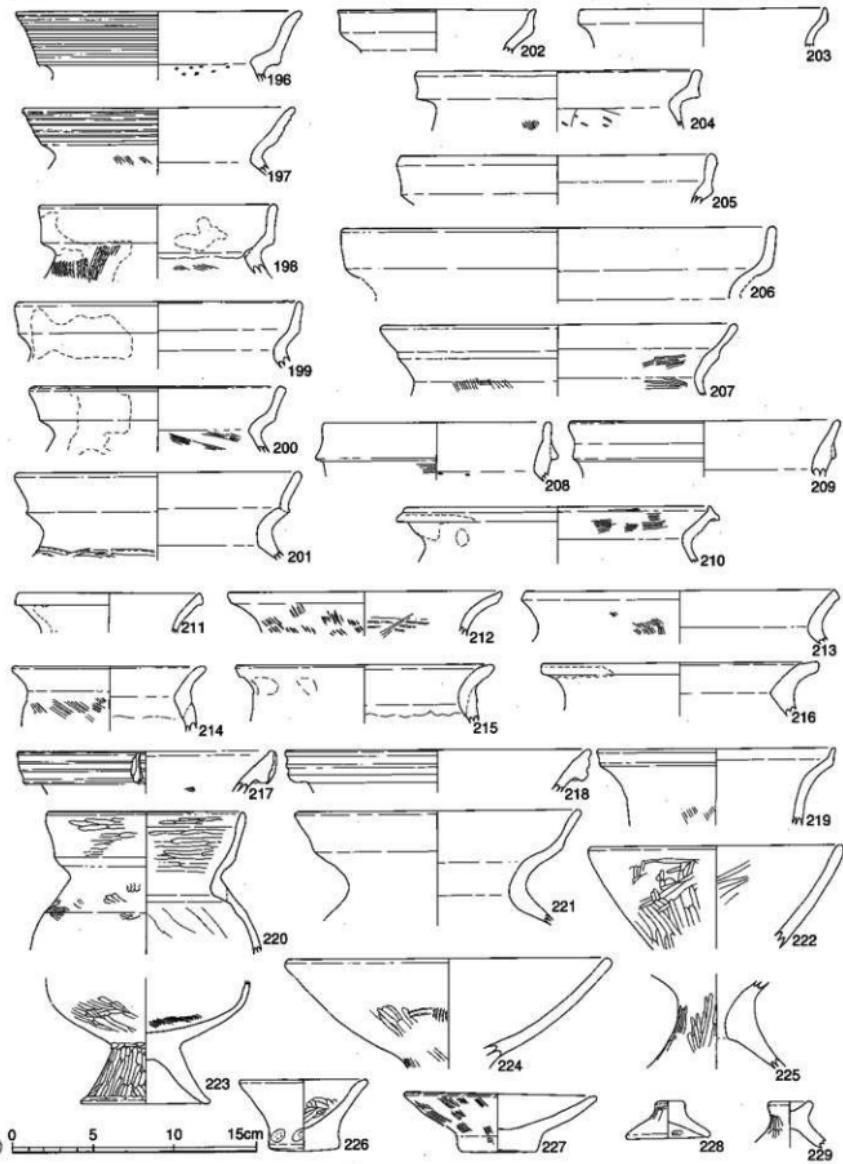


第50図 A区出土遺物 (163・164は1/4, その他は1/3)



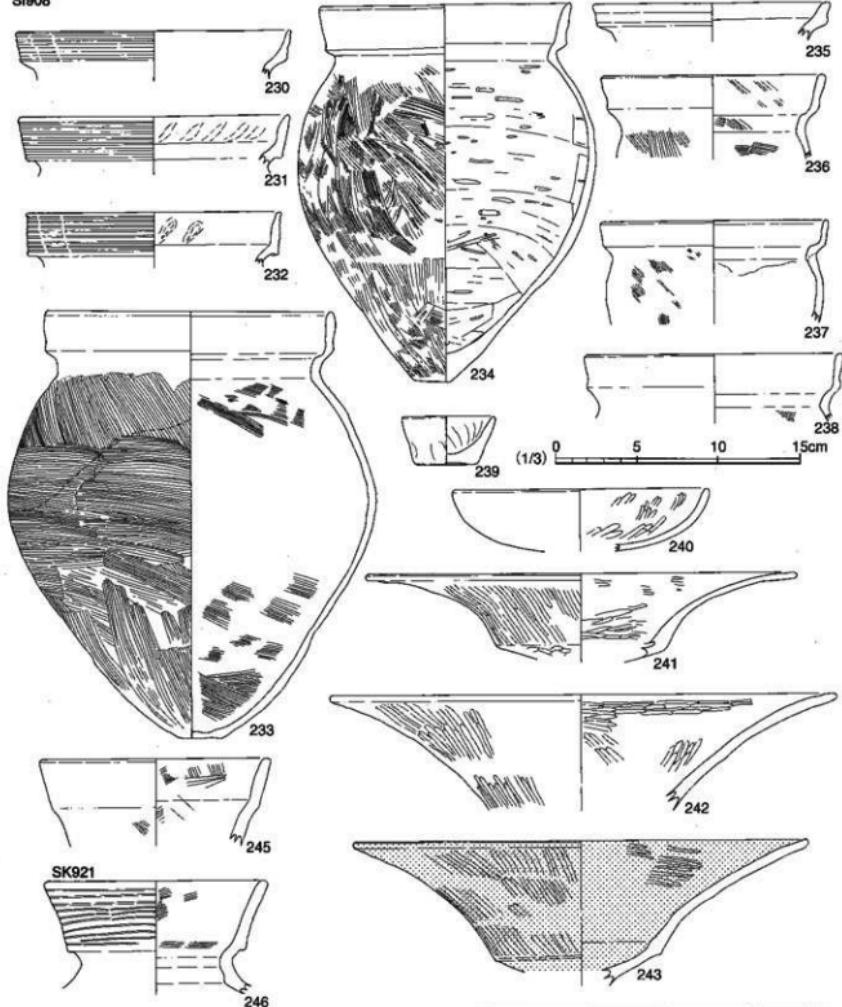
第51図 A区出土遺物(1/3)

SI745



第52図 B区出土遺物(1/3)

SI908



SK921



SD906

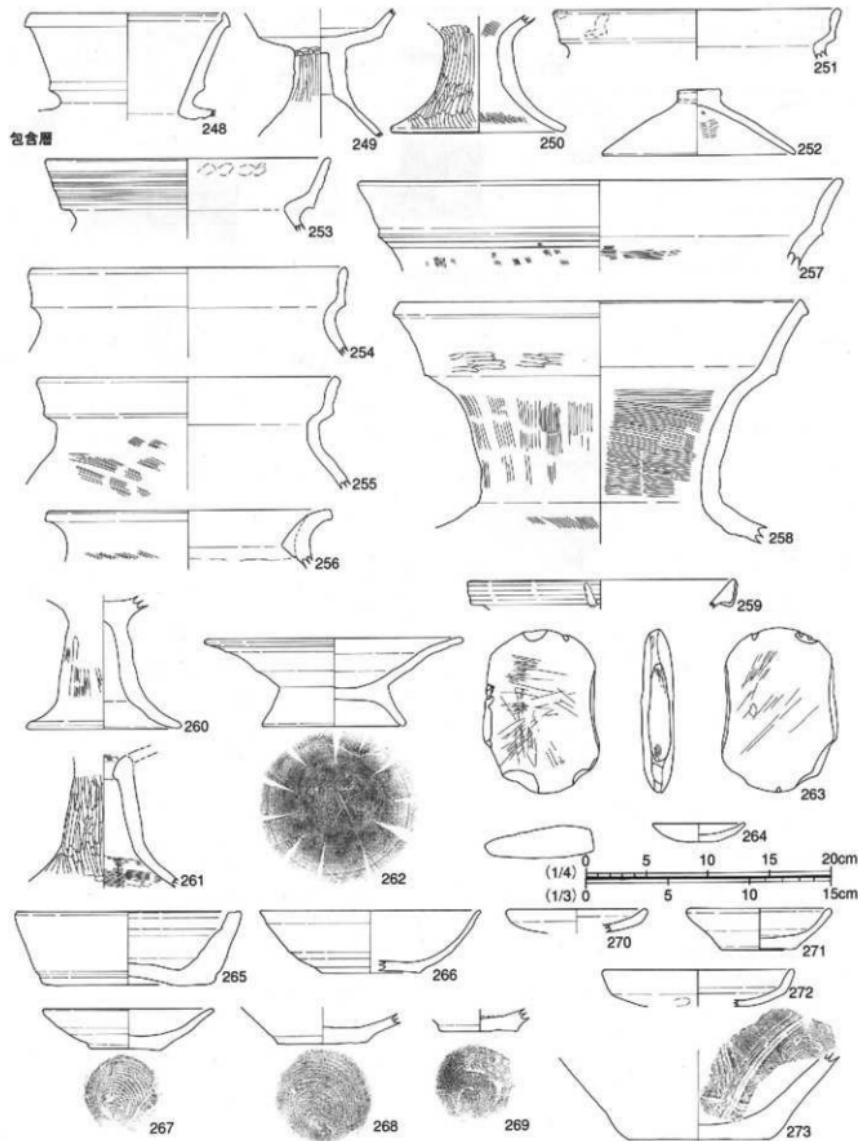


第53図 B区出土遺物(1/3)

SD725

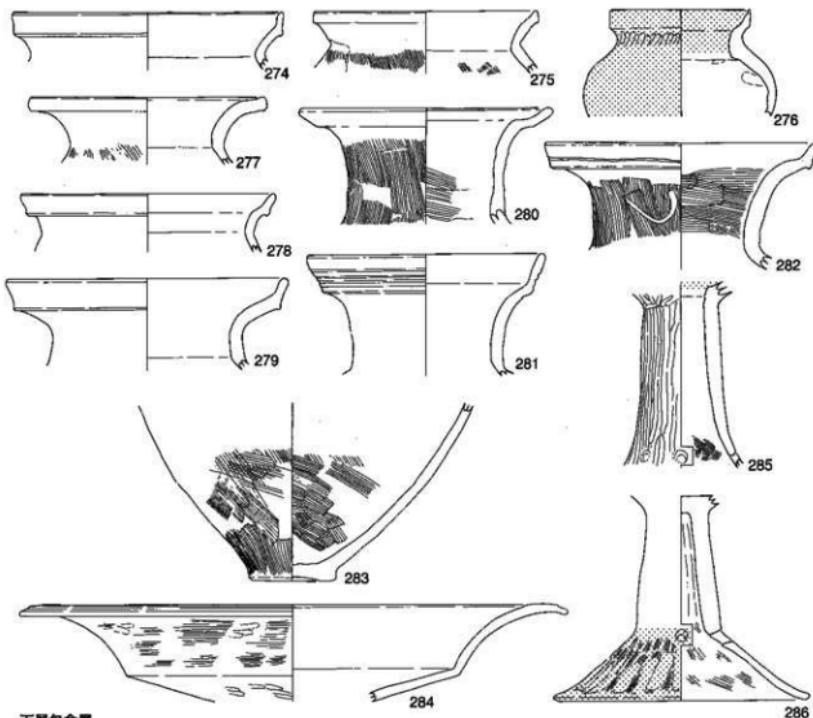
SD746

SD747

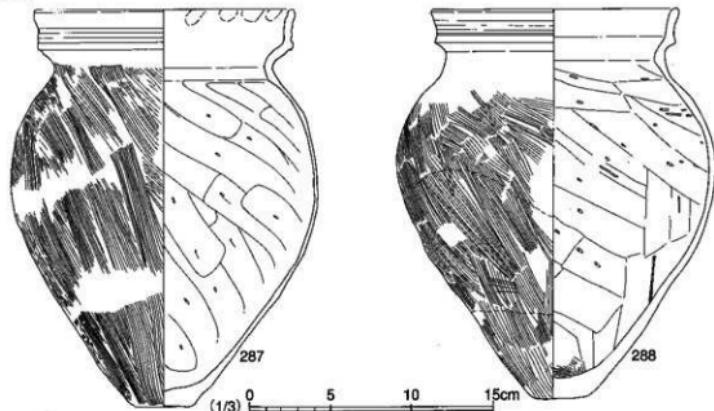


第54図 B区出土遺物 (263・273は1/4, その他は1/3)

SK816

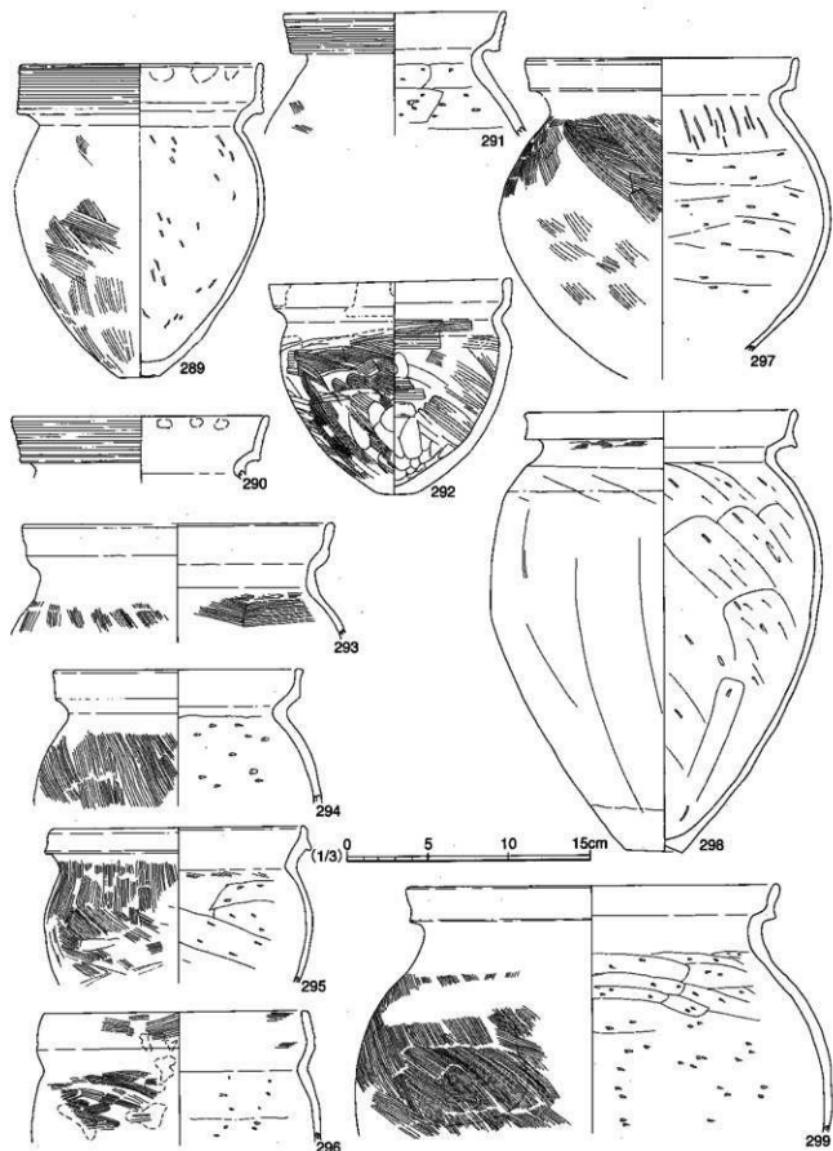


下層包含層



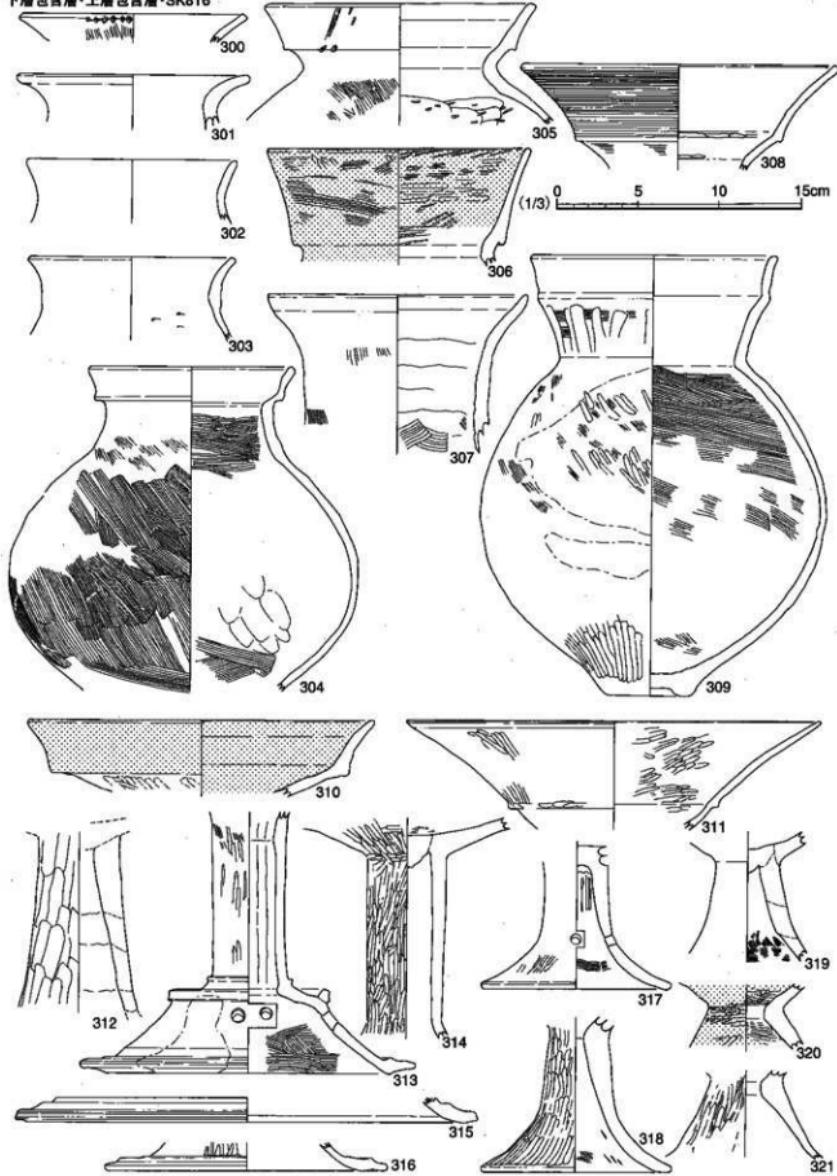
第55図 C区出土遺物(1/3)

下層包含層



第56図 C区出土遺物(1/3)

下層包含層・上層包含層・SK816



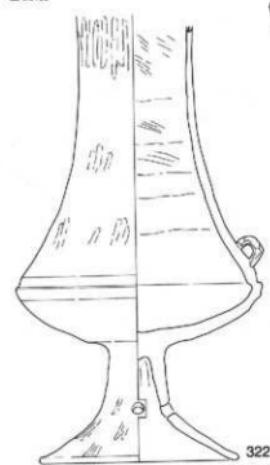
第57図 C区出土遺物(1/3)

下層包含層:300~302,304,306,310,311,314,317,319

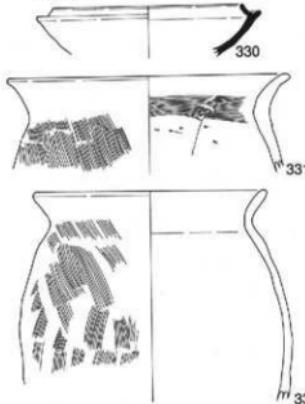
上層包含層:305,309,318,320,321 SK816:313,316 排水溝:303,307,308,312

表土:315

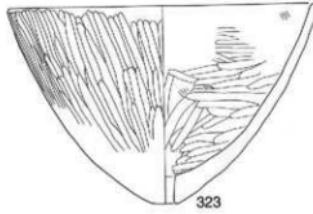
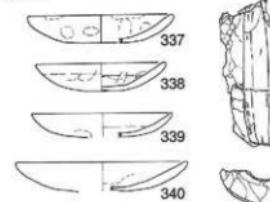
包含層



SI615



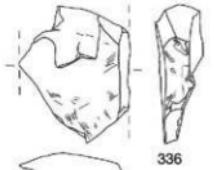
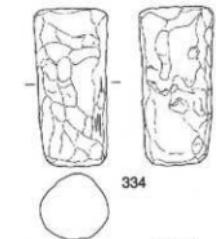
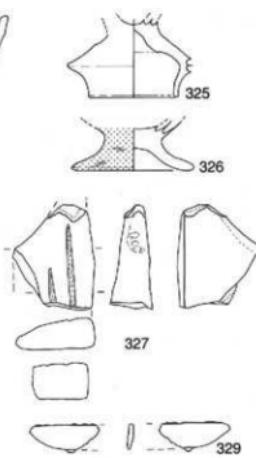
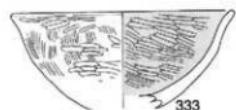
SK587



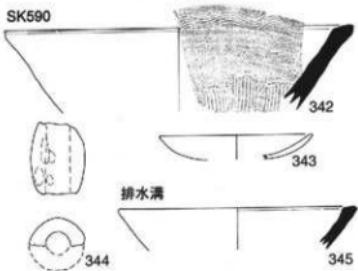
表土



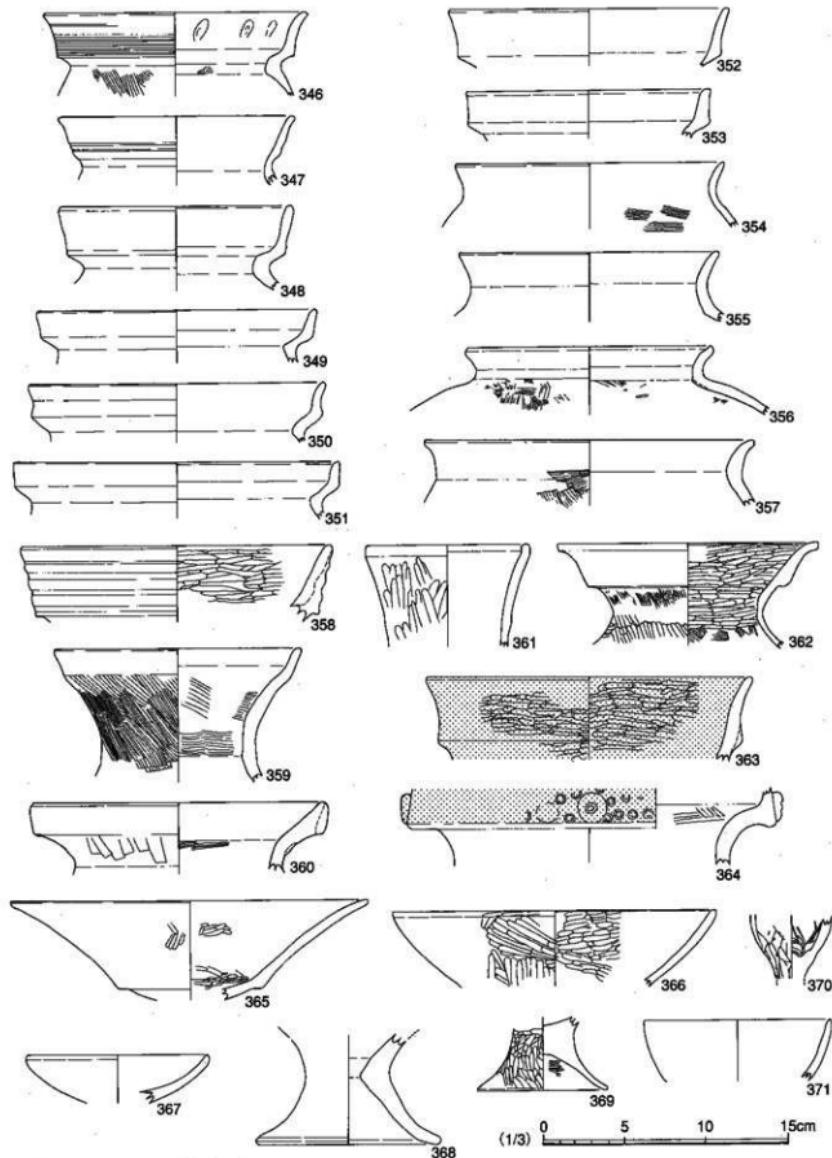
(1/3) 0 5 10 15
(1/4) 0 5 10 15 20cm



SK590

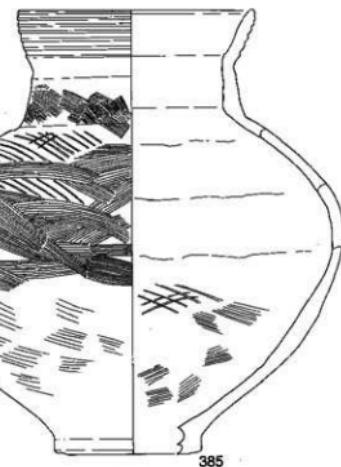
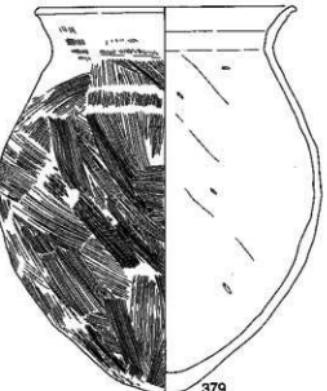
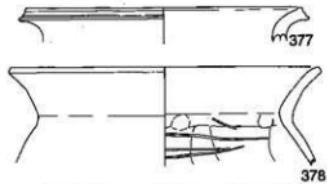
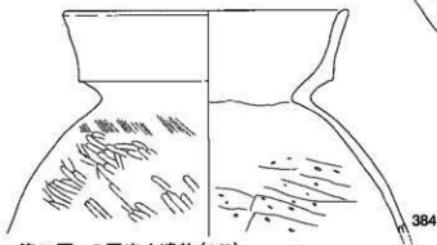
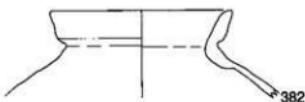
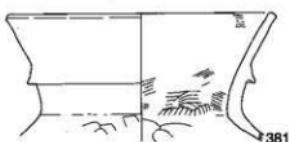
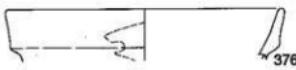
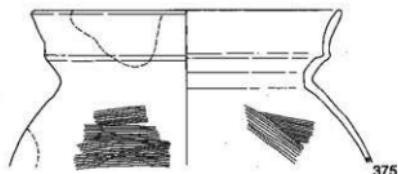
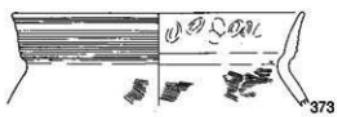


第58図 C区出土遺物 (328・334・336・341・342・344・345は1/4, その他の1/3)
下層包含層:322~324,327 上層包含層:325,326



第59図 D区出土遺物(1/3)

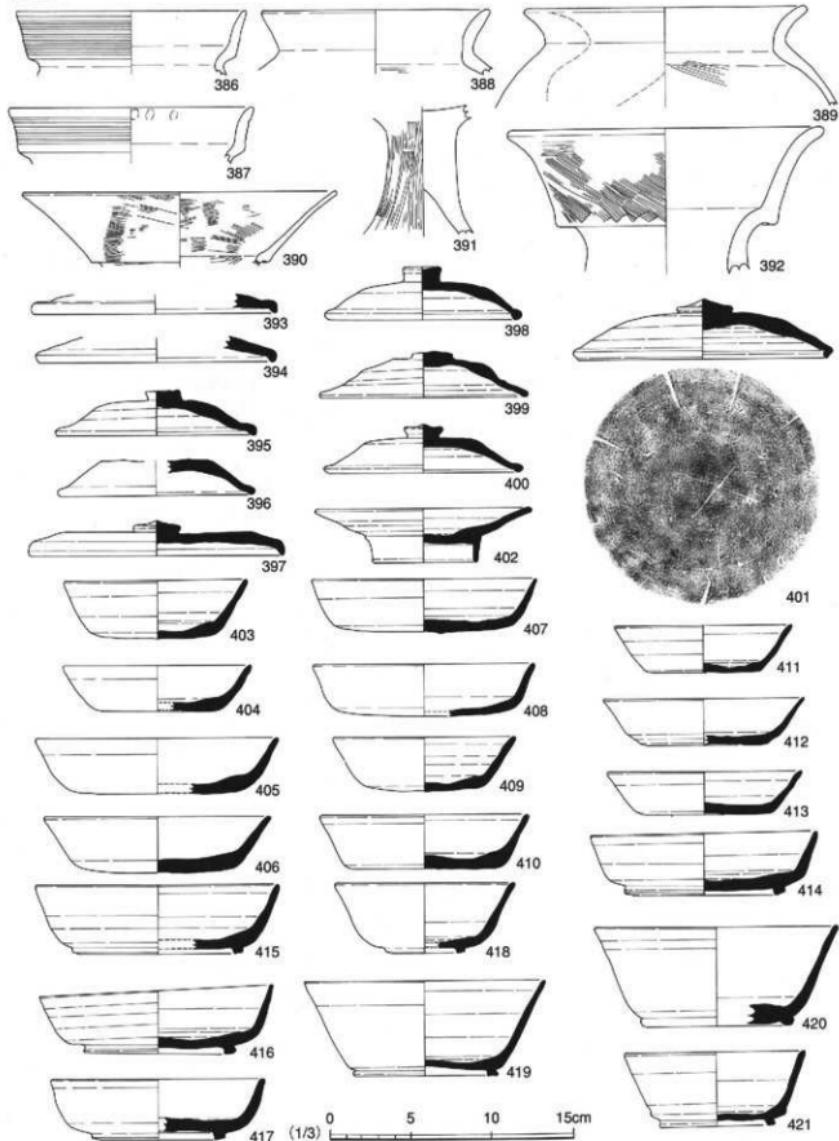
SD277



(1/3) 0 5 10 15cm

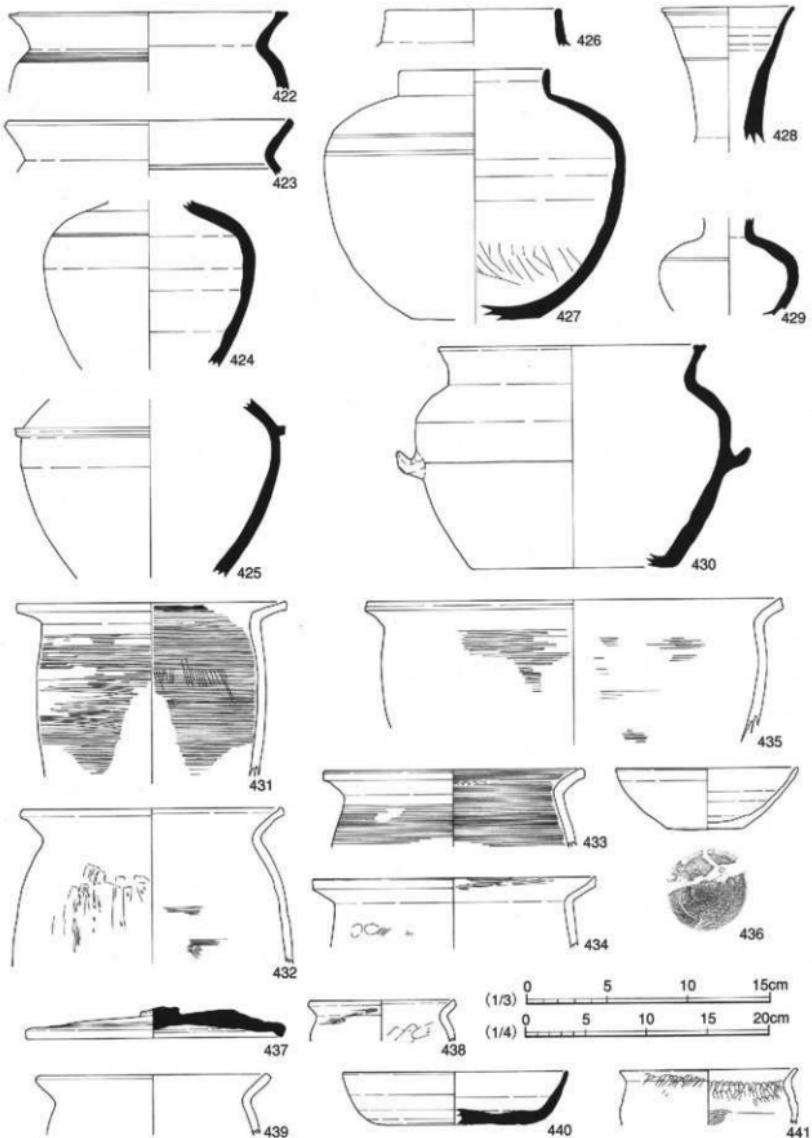
第60図 D区出土遺物(1/3)

SD276



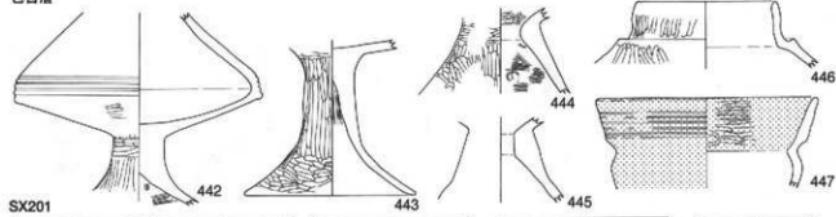
第61図 D区出土遺物(1/3)

SD276

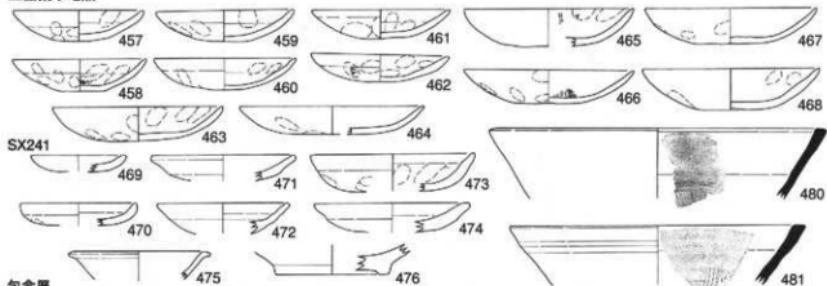


第62図 D区出土遺物 (422~436は1/4, その他は1/3)

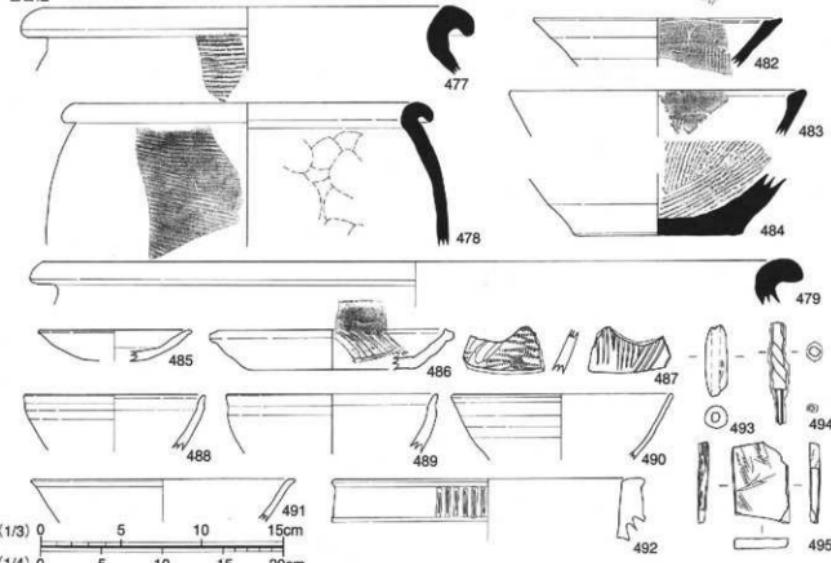
包含層



土器集中地点

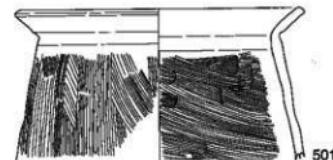
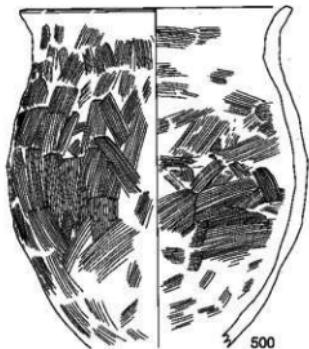
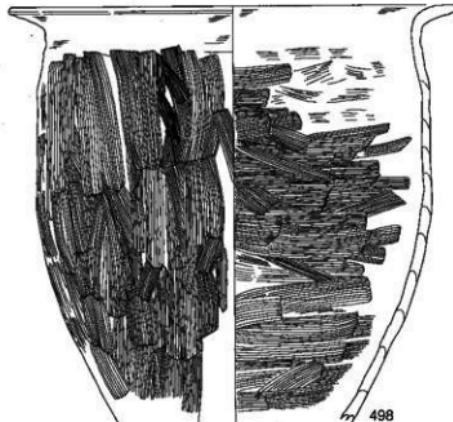


包含層

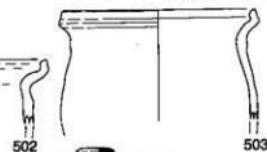


第63図 D区出土遺物 (477~484は1/4, その他は1/3)

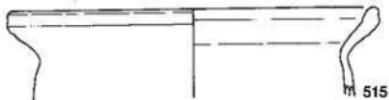
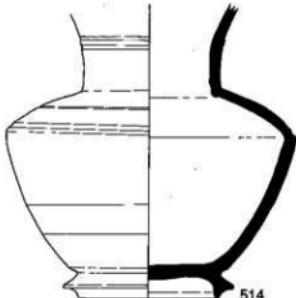
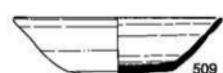
SI431



SK409



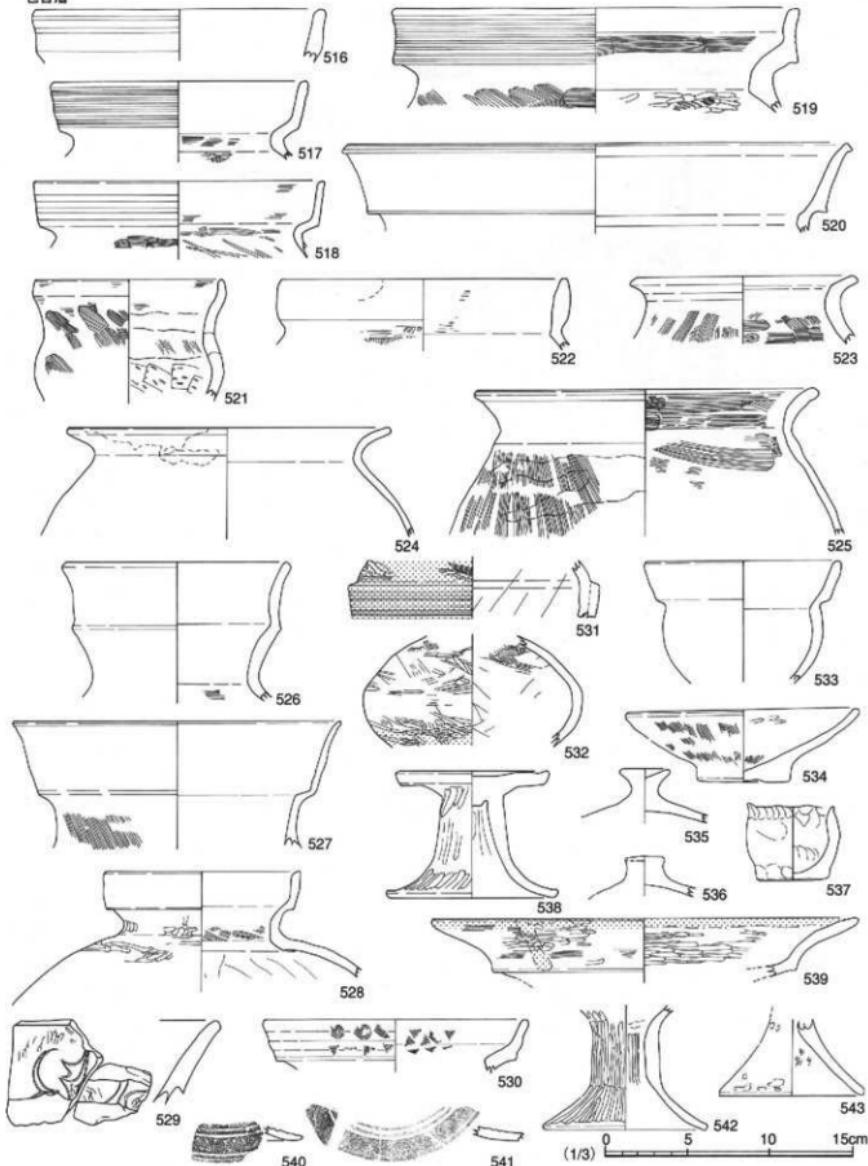
SK432



(1/3) 0 5 10 15cm

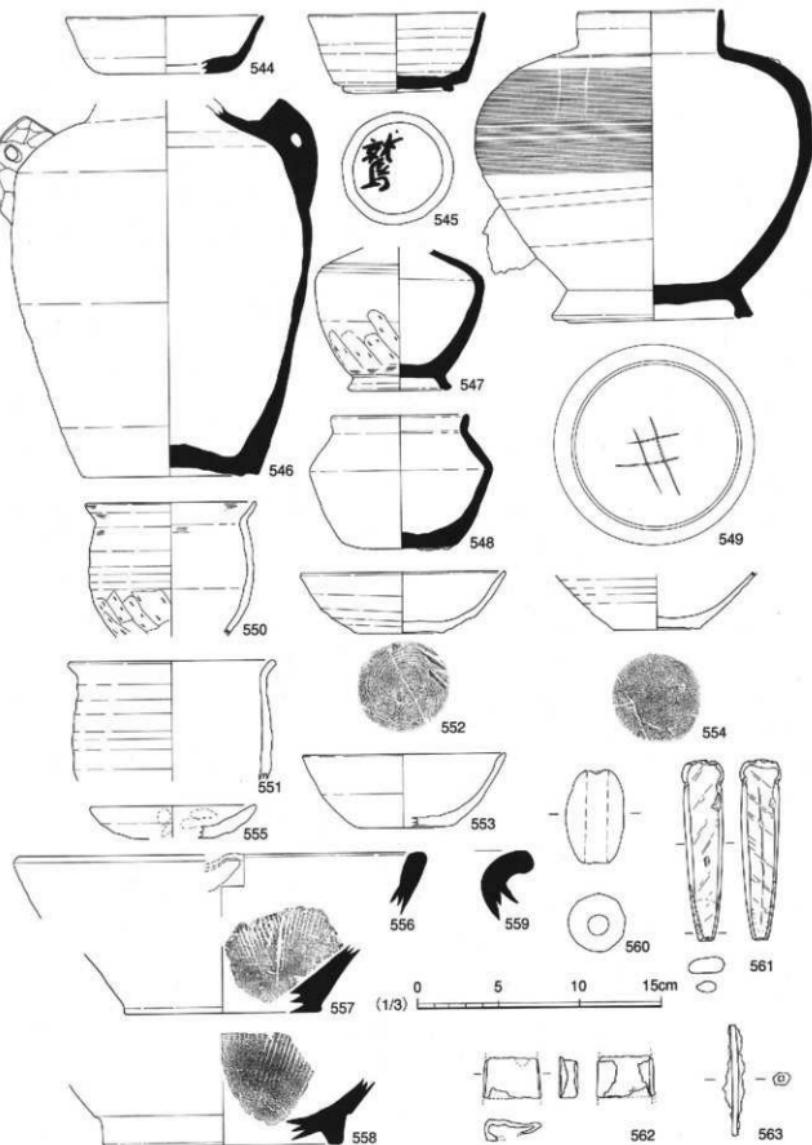
第64図 E区出土遺物(1/3)

包含層



第65図 E区出土遺物(1/3)

包含層



第66図 E区出土遺物 (1/3)

番号	学名	科	属	種	形態		葉		花		果實		外觀		生態		分布		備考
					高さ (cm)	葉幅 (mm)	葉長 (mm)	葉幅 (mm)	葉長 (mm)	葉幅 (mm)	葉長 (mm)	葉幅 (mm)	花被片 の形態	花被片 の長さ (mm)	花被片 の幅 (mm)	花被片 の長さ (mm)	花被片 の幅 (mm)	花被片 の長さ (mm)	花被片 の幅 (mm)
1	T186.1	セリ科	セリ属	セリ A.1	17.00	1.00	—	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2	T186.2	セリ科	セリ属	セリ A.1	16.10	1.00	—	1.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
3	T186.3	セリ科	セリ属	セリ A.1	17.00	1.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4	T186.4	セリ科	セリ属	セリ A.4	12.00	0.80	—	3.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
5	T186.5	セリ科	セリ属	セリ A.3	12.00	0.80	—	1.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
6	T186.6	セリ科	セリ属	セリ A.1	13.00	0.80	—	2.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
7	T186.7	セリ科	セリ属	セリ A.1	16.00	0.80	—	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
8	T186.8	セリ科	セリ属	セリ A.3	17.00	0.80	—	3.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
9	T186.9	セリ科	セリ属	セリ A.2	13.00	0.80	—	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
10	T186.10	セリ科	セリ属	セリ A.4	16.00	0.80	—	2.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
11	T186.11	セリ科	セリ属	セリ A.2	16.00	0.80	—	3.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
12	T186.12	セリ科	セリ属	セリ A.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
13	T186.13	セリ科	セリ属	セリ A.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
14	T186.14	セリ科	セリ属	セリ A.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
15	T186.15	セリ科	セリ属	セリ A.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
16	T186.16	セリ科	セリ属	セリ A.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
17	T186.17	セリ科	セリ属	セリ C. c.	20.50	0.80	—	1.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
18	T186.18	セリ科	セリ属	セリ C. c.	20.50	0.80	—	12.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
19	T186.19	セリ科	セリ属	セリ C. c.	19.20	26.90	2.40	12.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
20	T186.20	セリ科	セリ属	セリ C. s.	13.00	0.80	—	12.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
21	T186.21	セリ科	セリ属	セリ C. s.	16.10	1.50	—	3.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
22	T186.22	セリ科	セリ属	セリ C. s.	15.00	0.80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
23	T186.23	セリ科	セリ属	セリ C. s.	16.00	20.80	2.00	4.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
24	T186.24	セリ科	セリ属	セリ C. s.	14.40	0.80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
25	T186.25	セリ科	セリ属	セリ C. s.	12.00	0.80	—	4.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
26	T186.26	セリ科	セリ属	セリ C. s.	17.00	0.80	—	0.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
27	T186.27	セリ科	セリ属	セリ C. s.	15.80	0.80	—	0.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
28	T186.28	セリ科	セリ属	セリ C. s.	16.00	0.80	—	0.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
29	T186.29	セリ科	セリ属	セリ C. s.	15.00	0.80	—	1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
30	C. 30	セリ科	セリ属	セリ C. s.	16.70	0.80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
31	T186.31	セリ科	セリ属	セリ C. s.	20.00	0.80	—	0.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
32	T186.32	セリ科	セリ属	セリ C. s.	15.80	0.80	—	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
33	T186.33	セリ科	セリ属	セリ C. s.	15.80	0.80	—	2.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
34	T186.34	セリ科	セリ属	セリ C. s.	13.00	0.80	—	1.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35	T186.35	セリ科	セリ属	セリ C. s.	15.00	0.80	—	1.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
36	T186.36	セリ科	セリ属	セリ C. s.	16.50	0.80	—	2.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
37	T186.37	セリ科	セリ属	セリ C. s.	16.50	0.80	—	0.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
38	C. 38	セリ科	セリ属	セリ C. s.	16.00	0.80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
39	T186.39	セリ科	セリ属	セリ C. s.	15.00	0.80	—	1.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
40	T186.40	セリ科	セリ属	セリ C. s.	16.00	0.80	—	1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
41	C. 41	セリ科	セリ属	セリ C. s.	16.00	0.80	—	1.10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

表 4 道野咲表(1)

图号	地区	地名	基 土			砾 土			砂 土			粉 土			成 地 湿 地			灌 水
			砂	砾	石砾 (cm)	砾	砾 (cm)	砾 (cm)	砾	砾 (cm)	砾 (cm)	砾	砾 (cm)	砾 (cm)	砾 (cm)	砾 (cm)	砾 (cm)	
42	苏	T18e18	新庄集村	9.30	(1.0)	-	2.0	-	5.4	苦	-	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好
43	苏	T18e15	新庄集村F	(1.0)	(1.0)	14.00	-	-	5.4	苦	-	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好
44	苏	T18e16	新庄集村H	-	(0.5)	-	-	-	5.4	苦	-	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好
45	苏	T18e14	新庄集村I	-	(0.5)	-	-	-	11.1	苦	-	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好
46	苏	T18e2	小庄子村C	8.95	4.07	5.45	9.7	12.0	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
47	苏	T18e16	新庄集村J	9.22	-	(0.5)	4.00	-	12.0	苦	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
48	苏	T18e16	新庄集村K	-	(0.5)	16.00	-	0.6	1.0	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
49	苏	T20e10	新庄集村L	-	(0.5)	16.00	-	1.7	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
50	苏	T18e14	新庄集村M	10.51	12.00	3.10	-	1.2	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
51	苏	T18e17	新庄集村N	10.51	13.00	3.90	-	1.0	-	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
52	苏	T18e18	新庄集村O	11.00	0.90	-	2.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
53	苏	T18e16	新庄集村P	11.00	0.90	-	2.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
54	苏	T18e16	新庄集村Q	11.00	0.90	-	2.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
55	苏	T18e15	新庄集村R	11.00	0.90	-	2.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
56	苏	S18e19	新庄集村S	9.44	14.00	0.90	-	4.0	-	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
57	苏	S18e19	新庄集村T	14.70	0.90	-	3.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
58	苏	S18e19	新庄集村U	17.00	0.90	-	3.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
59	苏	S18e19	新庄集村V	17.00	0.90	-	3.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
60	苏	S18e19	新庄集村W	16.00	0.90	-	4.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
61	苏	S18e19	新庄集村X	15.00	0.90	-	3.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
62	苏	S18e19	新庄集村Y	27.10	5.00	-	1.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
63	苏	S18e19	新庄集村Z	23.60	0.90	-	2.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
64	苏	S18e19	新庄集村A	24.40	0.90	-	2.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
65	苏	S18e19	新庄集村B	17.50	0.90	-	2.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
66	苏	S18e19	新庄集村C	12.40	11.00	2.20	12.0	0.6	1.0	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
67	苏	S18e19	新庄集村D	13.20	1.00	-	3.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
68	苏	S18e19	新庄集村E	30.45	0.90	-	1.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
69	苏	S18e19	新庄集村F	31.00	0.90	-	2.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
70	苏	S18e19	新庄集村G	17.00	0.90	-	4.5	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
71	苏	S18e19	新庄集村H	15.70	0.90	-	1.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
72	苏	S18e19	新庄集村I	12.40	0.90	-	2.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
73	苏	S18e19	新庄集村J	11.00	0.90	-	1.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
74	苏	S18e19	新庄集村K	15.60	0.90	-	2.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
75	苏	S18e19	新庄集村L	17.00	0.90	-	1.0	-	0.6	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水	
76	苏	S18e19	新庄集村M	15.40	-	11.0	苦	-	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水		
77	苏	S18e19	新庄集村N	15.40	-	1.0	苦	-	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水		
78	苏	S18e19	新庄集村O	13.80	-	1.6	苦	-	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水		
79	苏	S18e19	新庄集村P	15.00	-	0.5	苦	-	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水		
80	苏	S18e19	新庄集村Q	11.10	-	2.0	苦	-	良好	10.97	10.97	10.97	10.97	10.97	好	灌水		

第五 道路勘察报告(2)

表 6 遺物観察表(3)

地名	学名	形態		根		葉		花		果		種子		成形・調理		備考
		根幅 (cm)	根長 (cm)	根幅 (mm)	根長 (mm)	根幅 (mm)	根長 (mm)	葉幅 (mm)	葉長 (mm)	果幅 (mm)	果長 (mm)	種子幅 (mm)	種子長 (mm)	成形・調理	備考	
120 AIR SK0203-4	根A1	16.36	0.85	—	4.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
121 AIR SK0203-10	根A1	14.46	0.95	—	4.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
122 AIR SK0203-3	根A1	14.70	0.85	—	4.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
123 AIR SK0203-9	根A2	14.20	0.95	—	11.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
124 AIR SK0203-5	根A1	12.79	0.75	—	4.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
125 AIR SK0203-4	根A1	19.00	0.85	—	4.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
126 AIR SK0203-1	根A2	14.00	0.75	—	3.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
127 AIR SK0203-10	根A1	16.86	0.85	—	3.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
128 AIR SK0203-19	根A1	16.00	0.85	—	5.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
129 AIR SK0203-11	根A1	17.00	0.85	—	2.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
130 AIR SK0203-5	根A1	14.40	0.85	—	3.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
131 AIR SK0203-9	根A1	12.66	0.85	—	4.0	—	—	1.60	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
132 AIR SK0203-3	根A1	—	4.0	5.00	—	5.5	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
133 AIR SK0203-6	根A1	—	4.0	5.00	—	11.0	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
134 AIR SK2006-5	根A1	—	4.0	5.00	—	12.0	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
135 AIR SK0203-4	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
136 AIR SK0203-10	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
137 AIR SK0203-7	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
138 AIR SK0203-14	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
139 AIR SK0203-11	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
140 AIR SK0203-10	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
141 AIR SK0203-20	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
142 AIR SK0203-11	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
143 AIR SK0203-19	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
144 AIR SK0203-13	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
145 AIR SK2006-1	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
146 AIR SK0203-16	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
147 AIR SK0203-4	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
148 AIR SK0203-1	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
149 AIR SK0203-7	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
150 AIR SK0203-2	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
151 AIR SK0203-8	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
152 AIR SK0203-16	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
153 AIR SK0203-19	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
154 AIR SK0203-1	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
155 AIR SK0203-6	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
156 AIR SK0203-3	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
157 AIR SK0203-20	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	
158 AIR SK0203-6	根A1	—	4.0	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナラ、ハナ	—	

表7 滅虫防除表(4)

表 9 遺物觀察表(6)

地名	地番	形態		施設		施設		施設		施設		施設		施設		施設		施設	
		面積 (ha)	面積 (ha)	内面積 (m ²)	外面積 (m ²)														
227	162	SND051	農業	13.80	1.0	-	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-
228	162	SND050	農業	15.75	4.50	-	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-
229	162	SND051	小生土B/C	5.65	3.50	4.00	11.0	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-
240	162	SND050	農業	16.80	1.00	-	-	6.0	-	6.0	-	6.0	-	6.0	-	6.0	-	6.0	-
241	162	SND050	農業	26.60	1.00	-	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-
242	162	SND050	農業	31.20	1.00	-	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-
243	162	SND050	農業	28.10	1.00	-	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-
244	162	SND050	農業	32.50	1.00	-	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-
245	162	SND050	農業	13.90	1.00	-	-	7.8	-	7.8	-	7.8	-	7.8	-	7.8	-	7.8	-
246	162	SND021	施設	14.00	0.95	-	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-
247	162	SND050	農業	22.10	1.00	-	-	11.0	-	11.0	-	11.0	-	11.0	-	11.0	-	11.0	-
248	162	SND050	農業	12.00	1.00	-	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-
249	162	SND050	農業	7.90	-	-	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-	8.0	-
250	162	SND050	耕作地盤	10.50	-	-	-	12.0	-	12.0	-	12.0	-	12.0	-	12.0	-	12.0	-
251	162	SND046	施設	17.70	1.00	-	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-
252	162	SND046	施設	4.65	11.00	-	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-
253	162	SND046	施設	17.95	1.00	-	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-
254	162	B-C/23170547	施設	5.50	5.50	-	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-
255	162	B-C/23181716	施設	18.30	0.90	-	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-
256	162	X-NBY16	施設	17.30	1.00	-	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-
257	162	X-NBY16	施設	29.40	0.90	-	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-
258	162	X-NBY16	施設	24.69	0.90	-	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-
259	162	B-C/23180758	施設	16.50	1.00	-	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-
260	162	B-C/23170547	施設	0.60	-	-	-	4.0	-	4.0	-	4.0	-	4.0	-	4.0	-	4.0	-
261	162	X-NBY16	施設	15.40	5.50	0.5	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-
262	162	SND050	農業	5.60	1.15	-	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-	2.0	-
263	162	SND046	施設	13.80	4.05	-	-	0.9	-	0.9	-	0.9	-	0.9	-	0.9	-	0.9	-
264	162	SND046	施設	13.00	3.90	-	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-
265	162	SND046	施設	10.40	2.00	-	-	6.1	-	6.1	-	6.1	-	6.1	-	6.1	-	6.1	-
266	162	SND046	施設	11.60	0.80	-	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-
267	162	SND044	施設	11.20	-	-	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-
268	162	SND044	施設	16.80	-	-	-	12.0	-	12.0	-	12.0	-	12.0	-	12.0	-	12.0	-
269	162	SND035	中生土A	8.60	0.60	-	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-
270	162	SND035	中生土B/C	12.70	3.90	-	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-
271	162	SND035	中生土C	8.60	2.55	4.68	12.0	12.0	-	12.0	-	12.0	-	12.0	-	12.0	-	12.0	-
272	162	SND035	中生土D	11.60	0.80	-	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-
273	162	SND035	中生土E	11.20	-	-	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-	1.3	-
274	162	SND035	中生土F	16.80	-	-	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-	1.0	-
275	162	SND035	中生土G	12.70	3.90	-	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-	3.0	-
276	162	SND036	施設	8.70	0.80	-	-	6.0	-	6.0	-	6.0	-	6.0	-	6.0	-	6.0	-

序号	地名	出土情况	形制			尺寸			特征			说明		
			器型	口径	底径	高度	腹深	腹径	内外径	外径	内径	腹径	腹深	说明
277	CJK	SK8316	圈足盘	14.50	4.15	-	1.0	-	带	1.00	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
278	CJK	SK8465-1	圈足盘	15.70	5.00	-	0.6	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
279	CJK	SK8465-2	圈足盘	17.70	5.00	-	3.0	-	带	1~2.2	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
280	CJK	SK8466	圈足盘	15.75	4.80	-	0.8	-	带	1~1.5	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
281	CJK	SK8467	圈足盘	14.40	4.55	-	10.0	-	带	-	带好	10.50/10.0	10.50/10.0	带好
282	CJK	C-SK1717/168	圈足盘	16.00	4.90	-	12.0	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
283	CJK	SK8468	圈足盘	15.00	5.50	-	12.0	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
284	CJK	C-SK1717/169	圈足盘	15.00	5.50	-	2.0	-	带	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好	带好
285	CJK	SK8469	圈足盘	-	-	-	-	-	带	-	带好	-	-	带好
286	CJK	SK8470	圈足盘	15.30	3.50	-	4.0	带	-	带好	2.50/2.75	2.50/2.75	带好	-
287	CJK	C-SK1717/164	圈足盘	16.20	5.00	-	12.0	12.0	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
288	CJK	C-SK1717/164	圈足盘	16.00	10.0	2.00	12.0	12.0	带	1.5~2.0	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
289	CJK	C-SK1717/164	圈足盘	14.80	15.50	2.25	12.0	12.0	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
290	CJK	C-SK1717/164	圈足盘	15.60	4.10	3.0	1.0	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
291	CJK	C-SK1717/164	圈足盘	14.00	10.00	1.00	1.0	-	带	2~3cm	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
292	CJK	C-SK1717/164	圈足盘	15.00	13.25	1.00	12.0	12.0	带	1~1.5	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
293	CJK	SK8471	圈足盘	15.00	7.00	-	2.0	-	带	1~1.5	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
294	CJK	C-SK1717/164	圈足盘	15.00	7.00	-	1.0	-	带	1~2.0	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
295	CJK	C-SK1717/165	圈足盘	15.00	8.00	-	10.0	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
296	CJK	SK8472	圈足盘	15.00	8.00	-	5.0	-	带	1~2.0	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
297	CJK	C-SK1717/165	圈足盘	15.00	8.00	-	5.0	-	带	1~2.0	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
298	CJK	C-SK1717/165	圈足盘	15.00	7.00	3.0	9.0	9.0	带	3~4cm	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
299	CJK	SK8473	圈足盘	22.40	11.50	-	4.0	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
300	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	13.00	8.00	-	1.1	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
301	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	14.00	9.00	-	1.0	-	带	1~1.5	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
302	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	12.80	7.00	-	1.4	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
303	CJK	KU717/167	圈足盘	12.00	7.00	-	2.0	-	带	1~2.0	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
304	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	12.00	7.00	-	11.7	-	带	1~2.0	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
305	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	17.10	10.00	-	2.0	-	带	1~1.5	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
306	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	15.00	7.00	-	2.4	-	带	1~1.5	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
307	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	16.00	10.00	-	5.0	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
308	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	15.00	8.00	-	1.0	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
309	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	14.35	27.25	4.00	3.0	12.0	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
310	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	21.15	11.00	-	9.0	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
311	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	25.00	11.00	-	12.0	-	带	-	带好	10.75/10.25	10.75/10.25	带好
312	CJK	XJ1717/167	圈足盘	-	-	-	-	-	带	-	带好	-	-	带好
313	CJK	SK8474	圈足盘	-	-	-	-	-	带	-	带好	-	-	带好
314	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	-	-	-	-	-	带	-	带好	-	-	带好
315	CJK	C-SK1717/167	圈足盘	-	-	-	-	-	带	-	带好	-	-	带好

表12 遺物調査表(9)

物 種 名	出 處	形 態			施 土			水 質			成 分			性 質			檢 驗 地 點	備 考
		口徑 (cm)	管 長 (cm)	管 壁 厚 (cm)	管 材 種 類	管 徑 (cm)	管 長 (cm)											
437 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	—	1.91	11.90	—	7.5	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
438 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	9.03	10.35	—	2.2	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
439 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	14.48	13.94	—	2.2	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
440 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	14.00	13.93	—	3.0	4.1	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
441 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	11.40	12.42	—	2.2	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
442 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	—	—	—	—	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
443 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	—	—	—	—	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
444 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	—	—	—	—	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
445 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	—	—	—	—	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
446 DKE XIST0109-300	秧	8.60	10.50	—	2.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
447 DKE XIST0109-300	秧	13.46	10.40	—	2.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
448 DKE XIST0109-300	秧	7.06	5.10	—	0.6	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
449 DKE SX20101	中土土壤改良剂	7.50	9.07	—	0.5	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
450 DKE SX20101	中土土壤改良剂	7.50	9.07	—	2.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
451 DKE SX20101	中土土壤改良剂	8.40	9.05	—	1.9	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
452 DKE SX20101	中土土壤改良剂	9.06	10.40	—	0.5	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
453 DKE SX20101	中土土壤改良剂	9.06	10.40	—	1.1	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
454 DKE SX20101	中土土壤改良剂	9.26	10.70	—	1.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
455 DKE SX20101	中土土壤改良剂	10.98	10.90	—	1.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
456 DKE SX20101	中土土壤改良剂	10.89	10.72	—	2.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
457 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	8.00	1.80	—	1.0	1.50	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
458 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	8.30	2.00	—	2.0	1.40	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
459 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	8.40	2.00	—	5.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
460 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	8.70	1.95	—	8.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
461 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	8.60	1.90	—	9.5	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
462 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	8.50	1.81	—	10.0	9.8	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
463 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	10.10	2.00	—	10.50	10.5	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
464 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	11.40	1.80	—	5.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
465 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	11.90	1.80	—	5.5	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
466 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	10.98	2.10	—	4.00	12.0	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
467 DKE 土壤中耕机	土壤中耕机	10.98	2.20	—	3.50	12.0	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
468 DKE XIST0109-300	秧	10.40	3.00	—	8.8	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
469 DKE XIST0109-300	秧	10.40	3.00	—	2.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
470 DKE SX20101	中土土壤改良剂	7.20	10.40	—	5.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
471 DKE SX20101	中土土壤改良剂	8.90	9.85	—	1.0	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
472 DKE SX20101	中土土壤改良剂	8.00	9.85	—	1.7	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
473 DKE SX20101	中土土壤改良剂	10.20	9.85	—	1.5	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
474 DKE SX20101	中土土壤改良剂	9.60	9.85	—	1.7	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—
475 DKE SX20101	中土土壤改良剂	8.20	9.85	—	1.2	—	管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	直管	—	—

表15 通暢觀察表(12)

表16 遺物觀察表(13)

遺物觀察表(14)
表17

番号	地区	地質		岩相		地形		地質		地形		備考
		岩種	[特徴]	岩種	[特徴]	岩種	[特徴]	岩種	[特徴]	岩種	[特徴]	
507	ED2	火山灰土	無機	—	—	角砾	漂砾	角砾	漂砾	角砾	漂砾	—
558	ED2	X13571706	中等	—	—	1.00	—	0.90	—	1.00	—	—
569	ED2	X13571706	高	—	—	0.90	—	1.00	—	1.00	—	—
560	ED2	X13571706	低	—	—	0.90	—	1.00	—	1.00	—	—

表18 地物點整表(15)

番号	地区	地質		岩相		地形		地質		地形		備考
		岩種	[特徴]	岩種	[特徴]	岩種	[特徴]	岩種	[特徴]	岩種	[特徴]	
16	ED2	T156706	砂岩	1.00	10.30	3.10	600.00	7.00	7.00	7.00	7.00	—
17	ED2	T156706	砂岩	1.00	11.90	7.10	—	—	—	—	—	—
283	BTR	B-3	含鉄	—	—	2.00	—	—	—	—	—	—
287	CIE	C-2	含鉄	—	—	2.00	—	—	—	—	—	—
329	CR	S-1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
555	CR2	S13571606	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
344	CIE	S135706	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
493	D16	X13571606-109	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
494	D16	X13571606-170	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
495	D16	X13571606-189	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
590	ED2	X13571706	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
591	ED2	X13571706	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
592	ED2	X13571706	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
593	ED2	X13571706	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

附章 錫冶町遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

錫冶町遺跡（富山県婦負郡婦中町に所在）周辺の地形は、藤井（1992）を参考にすると、西側・北西側に射水丘陵および音羽丘陵が存在し、東側に神通川扇状地が認められる。本遺跡は、北西側から砂礫の供給が認められることから、神通川の支流である山田川にそそぎ込む河川が形成した扇状地上に位置すると考えられる。これまでの発掘調査の結果、弥生時代末の竪穴住居・土器捨て場、溝、土坑、奈良時代の竪穴住居・溝、室町時代の掘立柱建物跡・横列・石組造構などが検出されている。

今回、弥生時代の集落が営まれていた年代に関する情報を得るために、堆積物中から得られた炭化物について放射性炭素年代測定を実施する。同試料については、植生に関する情報を得るために炭化材の樹種同定も併せて行う。また、本遺跡の堆積環境および周辺植生に関する情報を得るために珪藻分析・植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

試料採取地点であるC区南壁の層序は、上位より1～9層に分層されている。最下部の9層は、下部が砂礫、上部が砂層である。8層は、暗褐色シルト混じり砂よりなる。7層は、暗褐色シルト質砂よりなり、腐植がやや集積し炭化物も混じる。本層上面が弥生時代後期の遺構確認面にあたる。5層・6層は、褐色砂を主体とし、灰色シルトブロックが混じる。5層上面が古代の遺構確認面にあたる。

土壤試料は、5層上部・下部の2点、6層～8層の各層1点、9層上部・下部の2点の合計7点（上位より試料番号1～7）を採取した。この内、試料番号1・4・6について珪藻分析を、試料番号1・4について植物珪酸体分析を実施する。また、放射性炭素年代測定および樹種同定を行う炭化物は、弥生時代後期の遺構確認面直下の7層最上部（試料番号1）・上部（試料番号2）から採取された合計2点である。

2. 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。なお、今回は、微量な試料であるため、加速器質量分析法を行う。なお、炭化材については、その樹種も調べる。

（2）樹種同定

木口（横断面）・板目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（3）珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸500倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange-Bertalot（1986、

1988、1991a、1991b)などを参照する。

同定結果は、海水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。

堆積環境の解析に当たっては、海水～汽水生種は小杉(1988)、淡水生種は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性種は、Asai and Watanabe (1995)の環境指標種を参考とする。

(4) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐藤(1986)の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1に示す。両試料の年代値は7層最上部が 1910 ± 30 BP、7層上部が 2100 ± 30 BPである。なお、表中に示した $\delta^{13}C$ の値は、加速器を用いて試料炭素中の $^{13}C/^{12}C$ を測定し、標準試料PDB(白亜紀のペレムナイト類の化石)の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差(‰: パーミル)で表したものである。今回の試料の年代値は、この値に基づいて補正した年代である。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料名	層位	質	樹種	同位体補正年代	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代	Code No.
弥生時代遺構確認面最上部	7層	炭化材	不明	1910 ± 30	-28.17 ± 0.89	1940 ± 30	IAAA-10653
弥生時代遺構確認面上部	7層	炭化材	ニレ属/ケヤキ	2100 ± 30	-26.44 ± 1.03	2120 ± 30	IAAA-10654

注: (1) 年代値: 1960年を基準とした値。

(2) 誤差: 標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代

(3) $\delta^{13}C$: 試料炭素の $^{13}C/^{12}C$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値

(2) 樹種同定

結果を放射性炭素年代測定結果と共に表1に示す。試料番号1は、木材組織が観察できず、不明とした。試料番号2はニレ属またはケヤキに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ニレ属またはケヤキ (*Ulmus* or *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科

環孔材で、孔面部は1～2列、孔面部外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性または異性Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高。観察した範囲では、結晶細胞が稀に見られるが、鞘細胞は確認できない。

(3) 珪藻分析

結果を表2に示す。珪藻化石の産出は各試料とも非常に少なく、試料番号4・6から保存状態の悪い珪藻化石が数個体産出しただけである。また、試料番号1では無化石であった。

表2 硅藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	1	4	6
	塩分	pH	流水				
<i>Actinopytchus senarius</i> (Ehr.) Ehrenberg	Euh			A	—	1	—
<i>Thalassionema nitzschiooides</i> (Grun.) Grunow	Euh			A,B	—	3	1
<i>Thalassiosira spp.</i>	Euh				—	1	—
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W. Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	—	—	1
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	R,A,S	—	1	—
<i>Pinnularia brebissonii</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	—	—	1
海水生種合計					0	4	1
淡水～汽水生種合計					0	0	1
淡水生種合計					0	1	1
珪藻化石总数					0	5	3

凡例

H.R.: 塩分濃度に対する適応性 pH: 水素イオン濃度に対する適応性 C.R.: 流水に対する適応性

Euh : 海水生種 al-il : 好アルカリ性種 ind : 流水不定性種

Ogh-Meh : 淡水～汽水生種 ind : pH不定性種

Ogh-ind : 鹿床不定性種

環境指標種

A : 外洋指標種 B : 内湾指標種 (以上は小杉, 1988)

S : 好汚泥性種 U : 広域適応性種 T : 好清水性種 (以上はAsai,K. & Watanabe,T., 1986)

R : 強生珪藻 (RA : A群, RB : B群, RI群, 伊藤・堀内, 1991)

検出される産出種は、海水生種の*Actinopytchus senarius*、*Thalassionema nitzschiooides*、*Thalassiosira spp.*、淡水～汽水生種の*Nitzschia palea*、流水不定性種の*Pinnularia brebissonii*、陸生珪藻A群の*Navicula mutica*である。なお、陸生珪藻A群とは、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い群のことである (伊藤・堀内, 1991)。

(4) 植物珪酸体分析

結果を表3に示す。植物珪酸体は2試料ともほとんど検出されない。また、僅かに検出される植物珪酸体は、保存状態が悪く、表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。

試料番号4では、タケア科の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、スキ属の短細胞珪酸体、その他に種類の判別が困難な不明短細胞珪酸体 (キビ型・ダンチク型) がわずかに検出される程度である。

試料番号1では、種類の判別が困難な不明キビ型短細胞珪酸体 (キビ型) と不明機動細胞珪酸体がわずかに認められるに過ぎない。

4. 考察

(1) 堆積物の年代観

今回の結果では7層最上部が約1900年前、7層上部が約2100年前の年代値が得られた。上部の試料と最上部の試料で約200年程度の差があるが、層位的に矛盾がない。試料が包含層中に含まれる炭化物であり、また測定時の誤差範囲を考慮すると、7層が堆積したのは約1900～2100年前と考えられる。この年代値は、7層上面で弥生時代後期の遺構が検出されていることと調和的な結果である。今後、遺構に伴う炭化物などについて年代測定を実施し、それらを統計的に扱うこと、さらに詳細な年代観が得られていくものと期待される。

表3 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	1	4
イネ科葉部短細胞珪酸体			
タケア科	—	1	
ウシクサ族スキ属	—	1	
不明キビ型	1	1	
不明ダンチク型	—	2	
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
タケア科	—	1	
不明	1	1	
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	1	5	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1	2	
総計	2	7	

(2) 遺跡周辺の古環境

今回、堆積物中から珪藻化石はほとんど検出されなかった。僅かに検出される種類は、海水生種、淡水不定性種、陸生珪藻である。前述のように、本遺跡の堆積物は後背の丘陵から供給された扇状地性の堆積物で構成される。したがって、検出された珪藻化石の中で、海水生種は遺跡の後背地に分布する新第三紀中新世の音川累層（例えば藤井、1992）に由来する可能性がある。また、その他の種類も様々な環境で生育していたものが、扇状地堆積物として二次堆積したと考えられる。

また、植物珪酸体も堆積物中からほとんど検出されなかった。本遺跡の立地条件および本遺跡の堆積物は砂分が多いことを考慮すると、堆積速度が速い、あるいは堆積時間が短いため、堆積物中に化石が取り込まれ難い環境にあつたことが考えられる。また、僅かに検出される化石の保存状態が極めて悪いことから、堆積後の経年変化によって化石が分解・消失した可能性もある。

ここで、本遺跡では、弥生時代後期と古代で遺構が検出されており、弥生時代頃一時的に離水、乾燥化したことが考えられる。弥生時代の遺構が掘り込まれた7層では、腐植がやや集積し炭化物なども検出されている。この炭化物の¹⁴C年代値から、一時的に離水したのは約1900~2100年前で、当時の遺跡周辺には腐植の由来となった草本類などの植生が認められたと考えられる。したがって、これらの層準においてイネ科草本の植物珪酸体が増加すると思われるが、今回の結果をみるとその傾向が読みとれない。これは、当時の地表面最上部がその後の扇状地の発達によって削除されているのかもしれない。

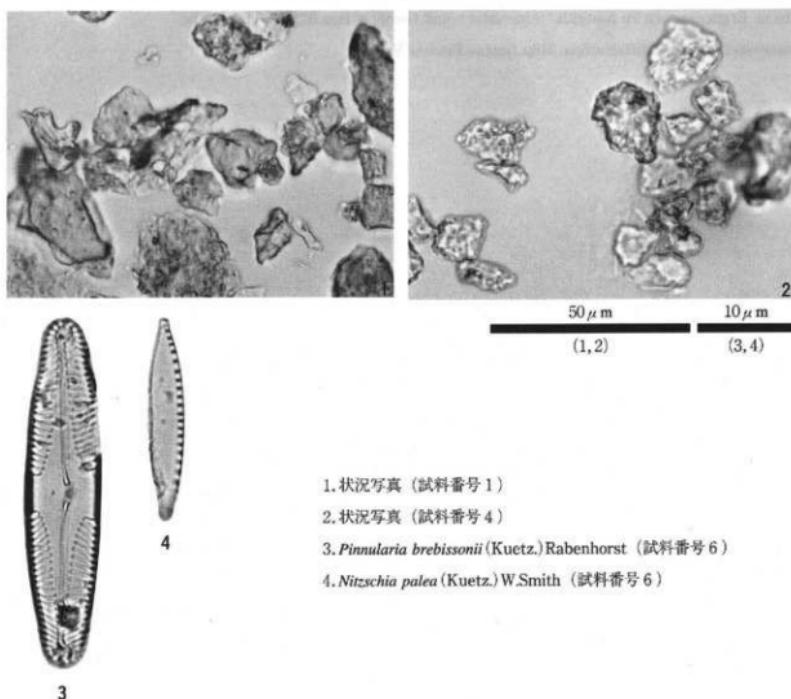
今回の分析により本遺跡の堆積物の年代指標は得られたが、珪藻化石・植物珪酸体の産状から古環境を十分に復元することは難しい。ただし、堆積物中より得られた炭化材より、周辺にはニレ属またはケヤキなどが生育していたと考えられる。当時の古環境については、今後、遺構に伴って出土する炭化材の樹種同定を行うなど、他の観点からの検討を試みていきたい。

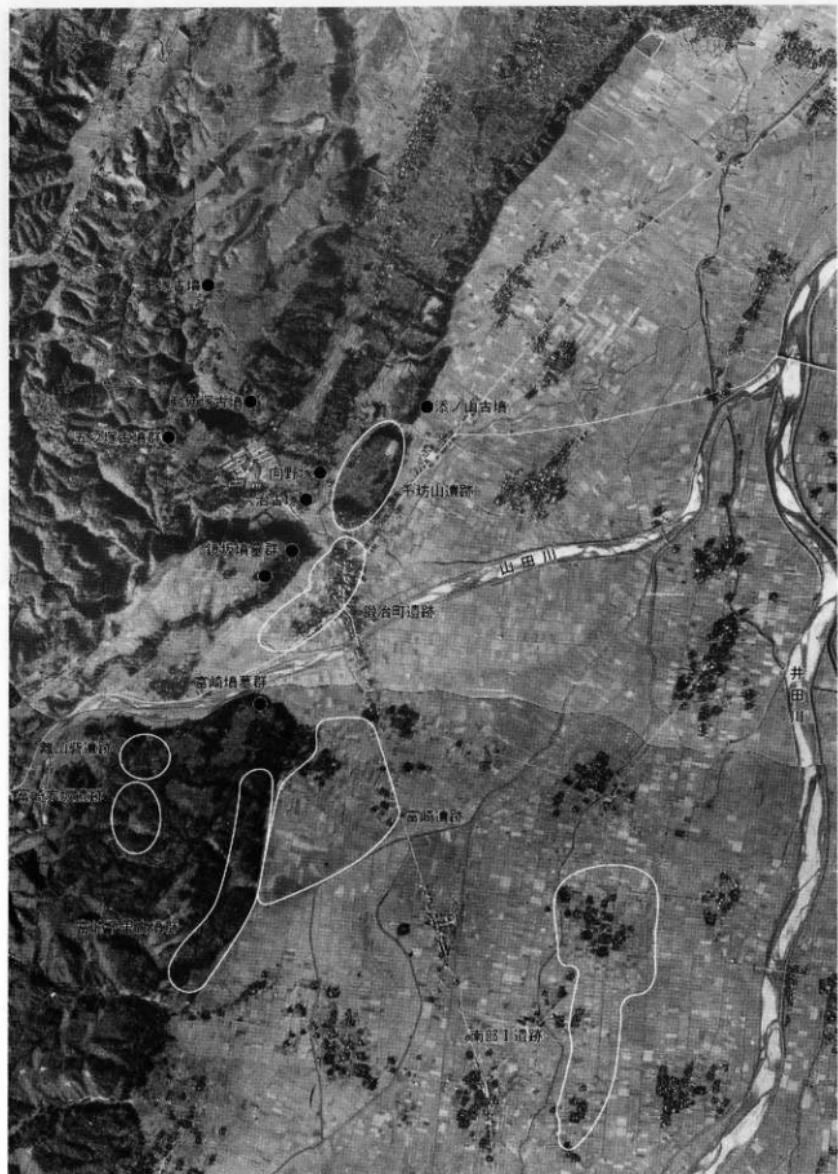
引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p. 73~88.
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35~47.
- 藤井昭二 (1992) 富山平野. 「アーバンクボタ」, 31, p. 38~47.
- 原口和夫・三友 清・小林 弘 (1998) 埼玉の藻類 硅藻類. 埼玉県植物誌. 埼玉県教育委員会, p. 527~600.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6, p. 23~45.
- 近藤錬三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p. 31~64.
- 小杉正人 (1988) 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, p. 1~20.
- Krammer,K.(1992)PINNULARIA,eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1~353., BERLIN · STUTTGART.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p. Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p. Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p. Gustav Fischer Verlag.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1991b) Bacillariophyceae.Teil4, Achnanthaceae,
Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema.Band 2 / 4 von : Die
Süsswasserflora von Mitteleuropa, 248p.Gustav Fischer Verlag.

図版1 植物珪酸体分析プレパラート内の状況写真・珪藻化石



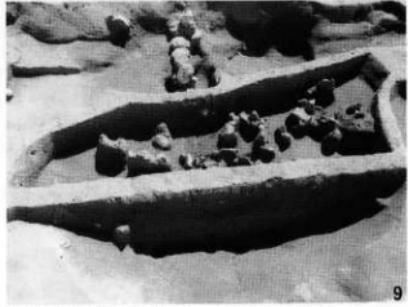
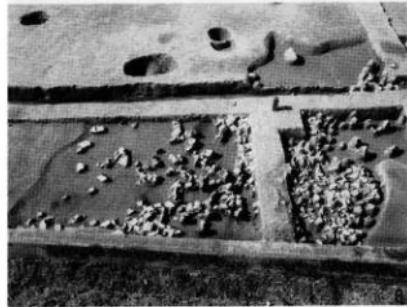
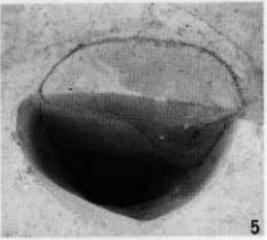
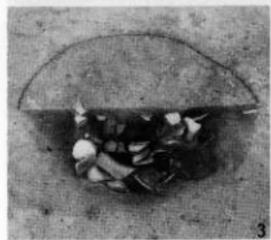


図版1 空中写真 (1/25,000、上が北)

昭和20年 米軍撮影



図版2 1.A区上層検出遺構 2.A区下層検出遺構



図版3 1.SI15遺物出土状況(南から) 2.SI15(南西から) 3.SI15-P1断面(北から)
4.SI15炉断面(東から) 5.SI15-P2断面(北から) 6.SK48遺物出土状況(南から)
7.SK12遺物出土状況(西から) 8.SK108遺物出土状況(南から) 9.SK120遺物出土状況(西から)